佐賀県立九州陶磁文化館

研　究　紀　要

第　11　号

肥前陶磁器の窯詰めに敷いたモミガラについての研究
・・・・・井上　康彦・大橋　康二

佐賀藩の近代化事業と陶磁器（１）－反射炉用資材と陶磁器産地
・・・・・・・・・・・　徳永　貞紹

17 世紀前半に肥前で生産された鳥形香合について
・・・・・・・・・・・　巖　由季子

『山本神右衛門重澄年譜』の再検討
・・・・・・・・・・・　芳野　貴典

中国磁器銘の集成―冨永コレクション・髙取家コレクション・柴田夫妻コレクション―
・・・・・・・・・・・　宮木　貴史

資料紹介 瀬川コレクションの大皿地文様
・・・・・・・・・・・鈴田　由紀夫

資料紹介「マイセン製　色絵甕割唐子文八角皿（司馬温公図皿）」について（１）
・・・・・・・・・・・　藤原　友子

2026

佐賀県立九州陶磁文化館

はじめに

このたび佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第 11 号を刊行しました。

当館は、昭和 55 年（1980 年）に九州陶磁に関する文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与する目的で設立され、以来、多面的な活動を行ってきましたが、重要な活動の一つとして調査研究にも力を尽くし、研究紀要や展覧会図録等でその成果を公にしてきました。

当館における調査研究活動をより充実させると共に今後の展示及び教育普及に活用するため、研究紀要の刊行を進めております。第 11 号では、肥前の初期窯業にみられるモミガラを用いた窯詰めについての研究、佐賀藩の近代化と陶磁器産地の関わりの研究、初期伊万里の鳥形香合についての他産地の事例も含めた考察、初代有田皿屋代官である山本重澄の年譜の再検討、中国磁器にみられる銘の分析といった論考を収録しました。また、資料紹介として、江戸後期の大皿にみられる地文様についてや、ドイツ　マイセン製の柿右衛門デザインの皿について紹介しています。

今後も、当館の設立目的にありますように、九州の陶芸文化の発展に寄与するべく九州陶磁に関する調査研究に尽力し、その成果を逐次報告したいと存じますので、皆様方の御叱正、御指導をお願い申し上げます。

令和８年（2026 年）３月

佐賀県立九州陶磁文化館

館長　鈴田　由紀夫

目　次

はじめに

論考

肥前陶磁器の窯詰めに敷いたモミガラについての研究

・・・・・・・・井上康彦・大橋康二・・・・ 1 頁

佐賀藩の近代化事業と陶磁器（1）－反射炉用資材と陶磁器産地

・・・・・・・・・　　徳永　貞紹　・・・・32 頁

17 世紀前半に肥前で生産された鳥形香合について

・・・・・・・・・　　巖　由季子　・・・・42 頁

『山本神右衛門重澄年譜』の再検討

・・・・・・・・・　　芳野　貴典　・・・・50 頁

中国磁器銘の集成―冨永コレクション・髙取家コレクション・柴田夫妻コレクション―

・・・・・・・・・　　宮木　貴史　・・・・65 頁

資料紹介

瀬川コレクションの大皿地文様

・・・・・・・・・　鈴田　由紀夫　・・・・85 頁

「マイセン製　色絵甕割唐子文八角皿（司馬温公図皿）」について（1）

・・・・・・・・・　　藤原　友子　・・・・91 頁

肥前陶磁器の窯詰めに敷いたモミガラについての研究

井上康彦・大橋康二

１．実体顕微鏡による陶磁器のモミガラの写真撮影について

（１） 用いた機材

１．実体顕微鏡　LEIKA　MSS・接眼レンズ×10 倍・対物レンズ×１倍・ズーム機能は 0.63・1.0・2.5・4.0

＊高ズーム機能は被写体の明るさに問題があり 1.6 ズームを選択した。

２．デジタルカメラ・RICOH WG-20

３．マイクロスケール　0.1 ㎜

マイクロスケール 0.1 ㎜を実体顕微鏡　LEIKA　MSS・接眼レンズ×10・対物レンズにデジタルカメラ・RICOH WG-20 をオートにして 2.7 ズームを選択し実体顕微鏡の接眼レンズにセットし撮影した。マイクロスケールを１㎜（0.1 ㎜×10）で切り取り写真に張り付けた。

（２） 観察方法

撮影条件

・実体顕微鏡　LEIKA　の接眼レンズにデジタルカメラ・RICOH WG-20 をオート撮影にセット。2.7 ズーム機能で撮影した。

a．デジタルカメラ・RICOH WG-20 の標準撮影と標準撮影後に拡大編集を行う。

b．デジタルカメラ・RICOH WG-20 を焦点距離 1 ㎝にセットし撮影。

c．実体顕微鏡　LEIKA、16 倍にセットし接眼レンズにデジタルカメラ・RICOH WG-20 をオートでズーム機能 2.7 ズームで統一し撮影した。

観察の陶磁器

大橋康二が選定した高台のある窯跡出土陶片と窯道具及び中国磁器の伝世資料。

モミガラ

・乾燥のモミガラに約 20％ほどの非晶質ケイ酸（非晶質シリカ）を含んでいる。モミガラ燻炭では 50％。非晶質ケイ酸は生物由来であり珪藻土、オパール、イネ科植物に多く含まれる。

・非晶質ケイ酸の珪藻土の融点は 1250℃。

・結晶質ケイ酸は石英（水晶）で融点は 1650 ～ 1700℃で高い。

・石英に長石やほかの鉱物が付着していれば溶融温度は下がる。

・江戸時代初期の米の生産高は 144 kg / 反、明治初期 180 kg / 反、現在 540 kg / 反であり、品種改良、肥料、機械化で増加した。（＊注）　江戸時代の米の大きさは今と比較してかなり小さい。

＊柚山義人『農業・農村における創エナと節エネ』(Seneca21st・柚山義人)2013 より

砂粒について

河川上流域の地層帯により砂粒も異なる。佐賀県の陶磁器生産の河川域の地層帯について、以下に述べる。

① 岸岳周辺

古代第三紀の堆積岩の貝化石を含む行合野層、メタセコイア、アカメカシア、ナラの仲間の化石を含む芳ノ谷層は砂岩（主に石英）と泥岩・頁岩からなる。

② 有田川

上流域は黒髪山山系は流紋岩と安山岩質の火砕岩。牧ノ山・青螺山は安山岩と玄武岩。支流の長崎県と境の隠居岳・八天山は安山岩である。

安山岩は灰褐色～黒褐色、流紋岩は黄白色～茶白色。

流紋岩は熱水変性作用を受け陶磁石に変わる。

③ 松浦川

上流域は花崗岩・変成岩、蛇紋岩、支流域は堆積岩（砂岩、泥岩が主）地帯である。河口の虹の松原は白い石英の砂浜が広がる。花崗岩の長石、角閃石、雲母や蛇紋岩などは柔らかく、河口までに微細な砂と泥になる。残るのは石英で白砂となり白砂青松の景勝となる。

（３） 観察結果

●景徳鎮青花磁器（図１）；；砂単独

・砂粒は熱膨張をしている。砂粒は流紋岩の可能性がある。

●福建青花磁器（図２）；；モミガラと砂の混合。

・高台内側にモミガラがガラス化し釉薬と一体化している。

●岸岳皿屋、飯胴甕窯出土陶器（図３・４）；；モミガラを採用している。

・モミガラ・茎葉が釉薬の飛んだ素地に熔着している。

●小森谷窯出土陶器６点（図５・６）；；モミガラと砂の混合を採用している。

・図６のモミガラ・茎葉は黒く変色している。燃焼時に有機質、炭素は燃えて気化する。モミ

ガラ・茎葉に鉄分が含まれていた？。鉄分は高温焼成時に四三化鉄（黒錆）に変わる。黒い色の成分は明らかにしない。

・砂の付着が発見できずモミガラ・茎葉が素地に単層で熔着。

●山辺田３号窯出土陶器（図７）；；モミガラを採用。

１点の観察である。素地、高台に白く熔着したモミガラがある。

●小溝上窯出土陶器（図８）；；モミガラと砂の混合を採用。

・素地、釉薬飛び、高台畳付にモミガラ・茎葉、砂粒が熔着している。

・モミガラ・茎葉単体と砂粒が熔着しているものもある。

●天神森窯出土陶器（図９）；；モミガラを採用。

・高台畳付、素地部にガラス化したモミガラあり。

●多久市高麗谷窯（図 10）；；モミガラを採用

これは唐人古場窯開窯以前に高麗谷窯で作られた陶器と考えられる。

●多久市唐人古場窯出土陶器（図 11・12）

当初１点の観察であった。再度、多久市郷土資料館を訪れ発掘品の閲覧を行った。

全ての発掘品に粗い敷砂が熔着していた（図 11・12）。敷砂は近在の沢から採集しフルイなどで選別せずに用いた。敷砂に土状のものも含まれている。敷砂は熱により熔着、熱膨張、熱変性を受けている。敷砂は器、窯底の焼結粘土と溶結し器の取り出しにクレーム品が多く出たと思われ、敷砂に関し改善が見えない。韓国の砂と近在の砂が異なることを初めて認識をする。

●多久市高麗谷窯（図 13 ～ 16）

７点を観察した。モミガラ方式は４点（図 10）、小さい砂粒＋土混合１点、内側に選別された砂と外側にモミガラ方式が１点を採用。高麗谷窯で日本の風土に合わせた方法を検討し工夫をしてきたのが分かる。

１．近在の川砂もフルイなどで選別した。小さい砂粒に土？が混在したものを用いた（白土装飾陶器皿）（図 16）。

２．情報を集め，あるいは岸岳系の窯を訪ねたと思われる。モミガラ採用に切り替える。

（濃い灰釉小碗，長石釉小皿，白磁碗（図 14・15））

３．サヤ（図 13）の内側に用いた小さい砂に土？は含まれていない。敷砂は熔着し塊となった。外側はモミガラ方式を採用し一定の成功を収めたのであろう。

４．白磁碗は当初１点を観察し、もう１点は高台に焼結粘土がつき観察ができないと判断し、排除されていた。

白磁（図 14）はガラス化したモミガラが沢山熔着している。焼結粘土側にも同じ程度のガ

ラス化したモミガラが熔着していたのであろう。

白磁（図 15）は高台に窯底の焼結粘土が熔着している。焼結粘土との間に僅かな隙間がありガラス化したモミガラが確認できた。ガラス化したモミガラはまばらで焼結粘土側に熔着しているものと器側に熔着しているのが観察できた。

白磁（図 14）はモミガラ層を厚めにまき焼成、白磁（図 15）は薄目にまいて焼成したのであろう。

白磁２点を見ても、金ヶ江三兵衛が日々改善していたことが分かる。

●小溝上窯出土のトチン（図 17）

・外周の熔着したガラス化したモミガラは厚い層になっている。トチンは複数回，使用されていたことがわかる。上面の黄色のガラス化したモミガラは重なっている。

●天神森窯出土磁器（図 18・19）；；モミガラ、砂混合を採用。

・モミガラ、砂粒が顕著。

・砂粒は白く熱膨張をしていない、石英であろう。

●天神森窯出土磁器（図 20）；；モミガラと砂粒の混合

・砂は熱膨張・溶融をしていない、石英と思われる。

●有田町猿川窯出土磁器（図 21・22）

・２点とも高台側壁は施釉し、高台先端（畳付）は無釉である。２点とも粗い敷砂＋モミガラ方式を採用。敷砂が重なって熔着している。１点は高台の内外壁にガラス化したモミガラが熔着している（図 21）。敷砂の大半は流紋岩で黒い砂粒は火砕角礫岩である（図 22）。砂粒は近くの有田川で採集したのであろう。流紋岩､火砕角礫岩とも表面は熔け重なって熔着している。敷砂のまき方は粗雑で器の外壁まで熔着している。

●長吉谷窯出土磁器（図 23）；；砂＋モミガラの混合。

・砂粒は熱膨張をしている。流紋岩の可能性大。

●南川原窯ノ辻窯出土磁器（図 24）・樋口窯出土磁器（図 25）

・両方とも仕上がりは良い。気泡は透明で 1250-1300℃で焼成されている。呉須の浮き上がり，浮遊，微細な点状はなく発色も良い。高台壁は施釉，高台畳付は無釉である。

高台に微細な石英の砂粒が少し熔着している。微細な砂粒は石英で少し正長石が混入している｡石英と正長石が合体した砂も混在する｡1250-1300℃の焼成温度であれば長石は熔け始める。微細な石英の砂粒を選択するまでに 60 年前後の時間を要した。

流紋岩と花崗岩

・粘性の高い溶岩と粘性の低い溶岩がある。粘性の高い溶岩はマグマだまりができ、地殻が溶ける。地殻にはケイ酸（シリカ）が多く含まれ粘り気の多い溶岩となる。粘り気の少ない溶岩はマグマだまりができず、直接、溶岩が水を噴き上げるように出る。（アイスランド、ハワイ。日本では伊豆大島三原山など）

・地下 20-30 ㎞の深いところで固まったのが花崗岩である。時間をかけて冷却し結晶化する。成分によって異なるが主に石英、長石、角閃石、雲母から構成される。

・地表あるいは地表近くで固まったのが安山岩、流紋岩である。安山岩よりケイ酸分が多いのが流紋岩である。流紋岩が熱変性作用を受けると陶石となる。有田泉山、天草など。

・流紋岩質溶岩が急冷すると真珠岩、黒曜石となる。黒髪山周辺に分布する。70 年以上前、コンロの中にコークスを入れ家庭用の燃料としていた。温度は 800℃前後である。黒曜石の一種のマレカナイトを入れた事がある。マレカナイトがぶつぶつして吹きあがり軽石状になる。真珠岩から消音剤、農地改良剤のパーライトを作る。1000℃に熱した窯の中に入れると真珠岩は多孔質に変化する。

・マグマが流紋岩と花崗岩の中間で固まったのが花崗斑岩である。対馬の陶石は花崗斑岩が熱変性作用を受けたもの。

モミガラ

・前項で少しふれたが江戸時代の米と現代の米の大きさは異なる。今回の観察でモミガラと砂の混合があることが分かった。砂の比重が重く均一に混じることはない。重い砂が下に多く、上の方に モミガラが多くなる。

　江戸時代は竹製の扱きこし（扱き箸）が使われていた。モミガラの外被の微毛は残り葉などの細片が混じる。

稲穂
単位；；５㎜

脱穀されたモミガラ

現代は機械で籾を落とすため外被の微毛・突起などは落ち表面はなめらかである。

韓国地質（兼高康之「韓国の地質」静岡地学第 40 号、1974 より）

・筆者は韓国に行ったことがない。よって、地質については静岡大学論文を引用する。京畿道広州市は花崗岩・結晶片岩・花崗片麻岩からなる。花崗岩，花崗片麻岩は主に石英，長石，雲母からなる。石英の主成分は結晶質シリカで融点は 1700℃前後で敷砂に適合する。長石の融点は 1290℃前後で敷砂に適合する。

広州付近の河川の砂は長石も含まれるが石英が主体で“白い敷砂”に恵まれている。

佐賀県内の地質概略と河川の砂調査結果。

・長崎本線，唐津線の北側は花崗岩、花崗閃緑岩が広範囲に分布する。局所的に三郡変成岩、蛇紋岩が点在する。三郡変成岩、蛇紋岩などは物理的な分解速度は速い。花崗岩は石英，長石，角閃石，雲母などで構成されている。長石、雲母は水を含み長い年月をへて深いところまで粘土に変化し“山砂”となる。佐賀で“山砂”は埋め立てに利用される。豪雨になると土砂崩れが発生する。脊振山系で頻繁に土砂崩れが発生する引き金となっている。

石英の主成分は結晶質シリカで融点は高く 1700℃，正長石の主成分はケイ酸アルミで融点は 1290℃で敷砂に適合する。角閃石，雲母，蛇紋岩は物理的な風化にさらされる。

・長崎本線，唐津線の南側は古代第三紀層を基盤にして火山の溶岩で固まった山塊が連なる。平野は第四紀層からなる。溶岩が固まった玄武岩の溶融温度は 1100-1200℃、安山岩、流紋岩は 700-800℃で低い。

・脊振山系の河川で嘉瀬川，玉島川と支流の晴気川，祇園川と東部の城原川、田手川の川砂は敷砂に適合する。佐賀県東部のみやき町、鳥栖市は調査を省いた。

・牛津川水系の川砂は主に安山岩、サヌカイト、珪質頁岩で敷砂には不適合であり、かろうじて玄武岩が該当するが緻密で砂になりにくい。唐人古場窯・高麗谷窯はこの水系の上流地域にある。

・松浦川の支流の中で花崗岩地帯から流れてくる厳木川、伊岐佐川の砂は敷砂に適合する。大半の支流は三紀層を基盤にした火山の溶岩でできた山であり敷砂に適合しない。以上のことから岸岳系窯はモミガラを採用したのであろう。

・有田川は流紋岩、火砕角礫岩地帯を源流とし、一部の支流は安山岩、玄武岩地帯である。有田町猿川窯の敷砂は流紋岩、火砕角礫岩で敷砂は熔着している。陶石は流紋岩が熱水変性作用を受けてできる。黒髪山山系の陶石は泉山の他に各所に点在する。

唐人古場窯，高麗谷窯がある多久市多久町、西多久町の地質

・基盤地層は海洋性堆積岩が広がり火山が噴火する。鬼ノ鼻山(434. 5m)は粘り気がある安山岩、サヌカイトからなる。東隣の聖岳（416m）は粘り気の少ない玄武岩からなる。

北側の八幡岳（763. 5m)，隣の女山（684. 7m）も玄武岩からなる。

・海洋性堆積岩は石英が固まった砂岩と土が固まった頁岩（泥岩）からなる。頁岩に非晶質シリカが沈積し緻密な珪質頁岩層からなる。頁岩は物理的な風化速度が早く土に戻る。

非晶質シリカは水溶性で岩の隙間に沈積したのがメノウ、オパールであり、埋設木に沈積したのが珪化木である。これらの山系から流れた沢は牛津川に合流し３－４㎞すると細かい砂になり南多久町長尾で５㎜以下の砂州が発達する。砂粒を調べると褐色系が多く安山岩で黒い色のサヌカイトが大量に含まれる。黒褐色系は玄武岩である。灰白～肌色系は珪質頁岩である。不透明な白色は石英でわずかに含まれる。サヌカイト、珪質頁岩は溶融点、分界点は 800℃以下であり敷砂に適しない。玄武岩は唐人古場窯・高麗谷窯の焼成温度にかろうじて耐えうる。

砂の調査

・佐賀県の地層は北部は花崗岩地帯、中央～南部地域は第３紀層を基盤に火山が噴火した地域に分かれる。火山はケイ酸分が多い安山岩、流紋岩とケイ酸分が少ない玄武岩からなる。石英の融点は 1700℃前後、正長石、玄武岩は 1290℃、安山岩、流紋岩は 700-800℃で低い。

・花崗岩・花崗閃緑岩地帯から流れる河川で佐賀市嘉瀬川２ヶ所で砂を採集し観察した。

石井樋の砂は５㎜前後で石英単体が 50-40％、石英と長石の合体砂が 40-30％、その他は角閃石、蛇紋岩など。

石井樋から下った鍋島町森田付近の砂は１㎜以下で石英単体は 70-65％、石英＋長石の合体砂は 25-20％、その他は黒雲母、砂鉄など。

・松浦川は武雄市、唐津市、伊万里市に源流がある。大半の所は安山岩、玄武岩と堆積岩地帯を流れる。川砂を見る限り安山岩が多く砂岩由来の石英も混入する。天山、作礼山を源流とする河川に厳木川、伊岐佐川がある。二つの河川は花崗岩、花崗閃緑岩、蛇紋岩、結晶片岩地帯を通る。河口近くの西の浜の海浜の砂粒は５㎜以下である。石英の砂粒が 90％以上で敷砂に最も適合する。

・唐津市玉島川は花崗岩、花崗閃緑岩地帯を源流とし河口まで同じ地層帯である。河口近くの東の浜の砂は５㎜前後である。石英・石英＋正長石・正長石・砂鉄からなる。砂鉄の溶融温度は高く 1400℃前後である。敷砂に適合する。今回の観察をした中に砂鉄が混入した敷砂はなかった。

窯の敷砂の探索

・先人たちは敷砂にも相当苦労をしている。金ヶ江三兵衛（李三平）は故郷では当たり前に川砂を採集し問題はなかった。韓国広州市一体は花崗岩、花崗片麻岩が広く分布し河川の砂は白く、反射光があり、それを普通に使用していた。多久に来てみると川砂は反射光がなく褐色系である。それを敷砂に採用したところ熔着し高台が破損し砂に問題があることは早い段階で認識した。対応策としてフルイなどで選別し５㎜以下サイズと土を取り除き採用したがなかなか問題は解決しなかった。白い焼き物を作る原料探しと同じころ、“白い砂”の探索も行った可能性がある。

（井上康彦）

２．肥前陶磁器の窯詰めに敷いたモミガラについての研究

肥前陶磁器は 1580 年代頃に波多氏の居城岸岳城下（佐賀県唐津市）で陶器生産が始まった。朝鮮の技術者によると考えられている。1593 年波多氏の改易により、陶器生産は佐賀県の南へと拡がる。豊臣秀吉の朝鮮出兵が 1598 年秀吉の死で終わり、新たに多くの朝鮮陶工が連れ帰られる。佐賀藩の記録には「焼き物上手の者 6、7 人」とある。その一人と推測される金ヶ江三兵衛が多久安順の下に預けられていたが、唐人古場窯を築き、陶器焼成を試し、次にすでに陶器生産を行っていた多久市高麗谷窯に移り、ここで少量の磁器原料を入手して、磁器の試し焼を行ったことが調査で分かった。そこで出土した白磁碗の底部にモミガラが熔着していたことから、焼成時にモミガラを敷いて焼く技術の研究を行うこととした。

焼成時にモミガラを敷いて窯詰めする方法は、朝鮮では確実な例は知られていない。中国でも景徳鎮は砂を敷くが（図１）、福建省の漳州窯は 16 世紀の中頃から染付生産を行う中でモミガラを敷く例が多い（図２）。図３・４はこうした中で朝鮮陶工が肥前に来て、岸岳城下で陶器製作をする時に肥前の地質から良い砂が手に入らず（井上論考）、手近かなモミガラを使用したものと推測される。1593 年の波多氏改易で岸岳窯の陶工は南の伊万里地域などに移動したとみられるが、1590 ～ 1610 年代に胎土目積みで量産する段階に高級陶器として鉄絵装飾が盛んに行われ、絵唐津と呼ばれる。この時期の窯ではモミガラがふつうに敷かれたので、熔着している例は多い。有田町の小森谷窯（図５・６）、山辺田窯（絵唐津、図７）、小溝上窯（胎土目積み、図８）、天神森窯（図９）、及び金ヶ江三兵衛が入る前の多久市高麗谷窯の灰釉小碗（図 10）などのモミガラ敷きの例を顕微鏡写真で確かめた。

金ヶ江三兵衛が多久で最初に開いた唐人古場窯では、まだ磁器原料が入手できず、陶器のみ作られた。その成形や施釉の特徴は朝鮮で白磁を作っていた陶工の技術と思え、底部まで施釉し高台畳付のみ釉剥ぎし、朝鮮同様に砂を敷いて窯詰めしたところが（図 11・12）、既存の肥

前陶器窯との大きな違いである。そして、次に多久高麗谷窯に移り、ここで磁器原料を少量であるが入手し、白磁碗の製作を試みたことが２点の白磁碗（図 14・15）の出土とサヤ（図 13）の出土で明らかになった。この白磁碗２点の底部にモミガラが熔着していることから、適当な砂がなく、図 14・15 のように既に高麗谷窯で使われていたモミガラを敷く方法を採用したものとみられる。朝鮮の広州官窯クラスの技術水準の成形､施釉とサヤに入れて窯詰めするなど、官窯の技術を体得した技術者が金ヶ江三兵衛集団にいたことを示す（大橋 2021、同 2025)。サヤ（図 13）の内底には砂を敷くが外底にはモミガラが熔着している。金ヶ江三兵衛集団が朝鮮から新たに持ち込んだ技術として白土装飾を用いた陶器が出土している。その一つは高台まで全釉であり（図 16)、高台畳付には敷かれた砂がびっしりと熔着している。唐人古場窯の陶器に敷かれた砂と異なり、フルイなどで選別された砂になっている。

金ヶ江三兵衛集団が伊万里を経て豊富な磁器原料があるということで有田に入る。記録から 1616 年と推測される。この時点をもって肥前磁器生産・流通の始まりと考えられる。有田町の小溝上窯のトチン（図 17）の上面には陶器をのせて焼いた後、磁器をのせて焼いた熔着痕が残り、そこにモミガラが熔着している。小溝上窯と同時期に隣接地の天神森窯で作られた染付磁器にもモミガラ熔着痕がみられる（図 18)。天神森窯では砂敷にモミガラがみられるものがある（図 19･20)。図 19 の碗の高台畳付には砂が熔着するが、ここにガラス化したモミガラ・茎葉が混じった状態が観察される。

1637 年の佐賀藩による窯場の整理統合事件で、有田の陶器の食器碗・皿は排除され、磁器中心の生産体制が整うが、その頃の有田町の猿川窯の染付碗（図 21）・皿（図 22）は高台に敷砂とガラス化したモミガラが熔着している。焼成時に敷砂の上にモミガラを厚く敷いたと井上氏はみる。

以上が、1640 年代までの朝鮮的技術で作られていた時代の窯詰めで使われた製品の熔着を防ぐ敷物の特徴である。肥前磁器は 1650 年前後に朝鮮的技術から中国的技術に技術革新を果たす。その結果、1650 年代以降、有田磁器などでは素焼きを行うようになり、焼成時の窯詰めの敷物も砂粒が主となる。長吉谷窯のヨーロッパ向け芙蓉手皿 (図 23) では砂敷にみえるが、まだ若干のガラス化したモミガラ・茎葉がみられることが注意される。それが 1670 ～ 1700 年代の南川原窯ノ辻窯になると砂粒のみで粒もそろったものとなる（図 24)。18 世紀後半の樋口窯になると砂粒も粒がそろった良質なものとなる（図 25)。

以上のように、肥前陶磁の始まりの段階から砂の代わりに用いられ始めたモミガラは、金ヶ江三兵衛集団が多久における磁器の試験焼成段階から磁器焼成に用いられ、有田に入っても、1630 ～ 1640 年代まで一部で砂と共に使われたことがわかる。有田磁器の技術革新後の 17 世紀後半にみられなくなるが、長吉谷窯の染付でも砂敷の中でモミガラが混じっていることが知

られた。しかし、17 世紀末の有田・南川原窯ノ辻窯では完全に砂粒のみとなるのであり、17 世紀における窯詰め時の敷物の変遷がわかってきたのである。製陶の中では目立たない存在であったが、江戸前期における肥前の陶磁器生産の技術の一端が明らかになったといえる。

参考文献

1. 大橋康二 2021「江戸初期における肥前磁器の開発過程について」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第 6 号』佐賀県立九州陶磁文化館
2. 大橋康二 2025「肥前磁器始まりの全貌」『初期伊万里ビッグバン－日本磁器始まりの全貌－』佐賀県立九州陶磁文化館

（大橋康二）

図版の凡例

・図版は試料の内外面写真（どちらか１枚だけのものもある）と実体顕微鏡による拡大写真をあげた。

・試料名の表記は次の順で表した。産地・年代・特徴は大橋による。
通し番号、試料の産地、窯名、試料の種類と器種、推定製作年代、所蔵者名、試料の特徴

・拡大写真を見るうえで参考となる特徴などを井上が記載した。

・写真は井上が撮影した。

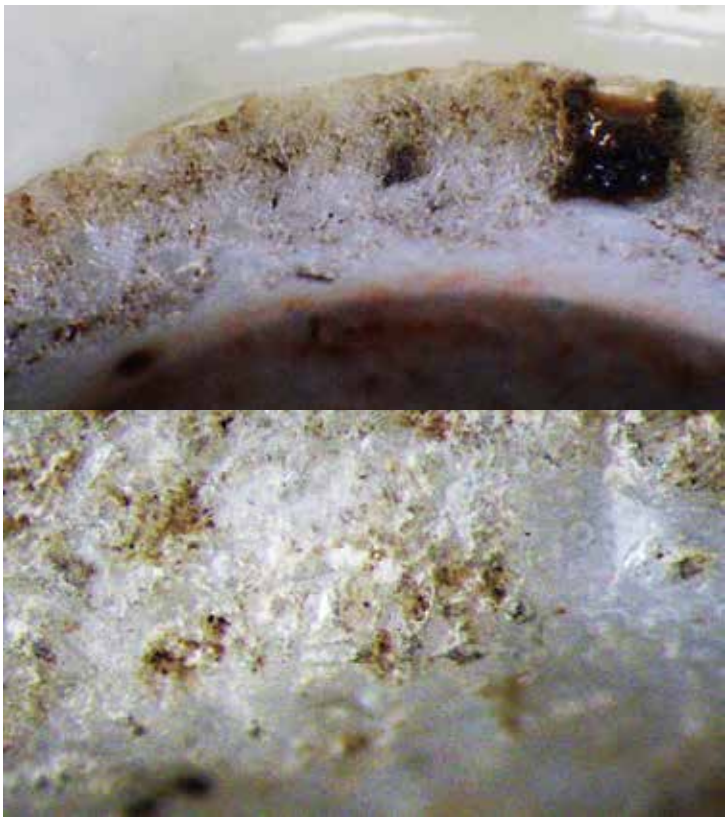
・試料のうち多久市所蔵分のみは多久市郷土資料館で藤井伸幸氏の協力を得て撮影した。記して謝意を表す。他は個人蔵を除き佐賀県立九州陶磁文化館保管資料である。所蔵については個々に記した。

１．中国・景徳鎮窯、青花小碗、1590 ～ 1610 年代頃、個人蔵、高台畳付無釉、その周辺に小石粒熔着。

・砂粒は割れ、断面の状態がわかるとともに、熱膨張しているのがわかる。石英ではなく流紋岩の可能性がある。

２．中国福建・漳州窯、青花小皿、17 世紀後半、個人蔵、高台周囲にモミガラ熔着痕。

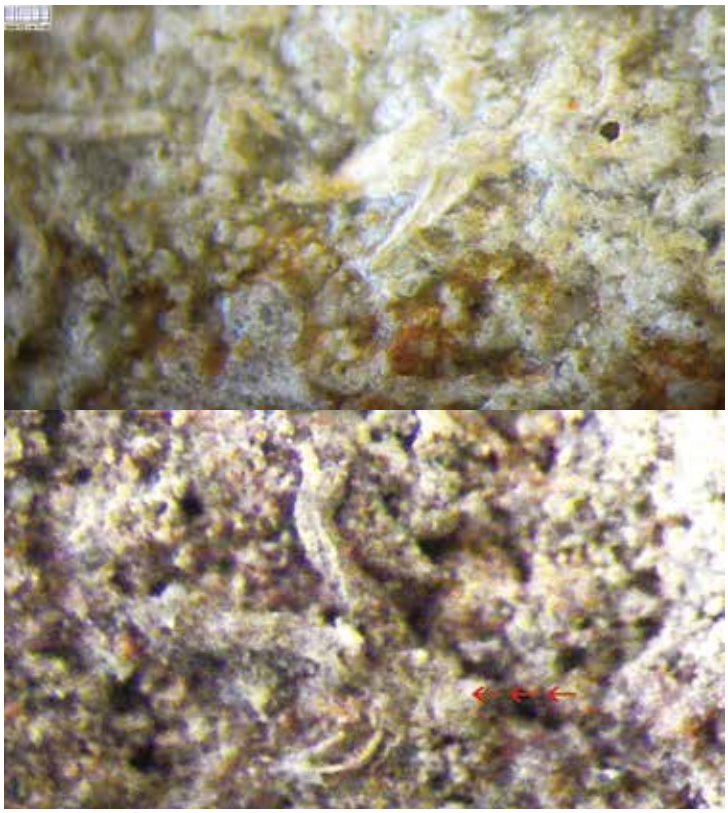
・ガラス化し熔着、無数の細片のようにみえる。



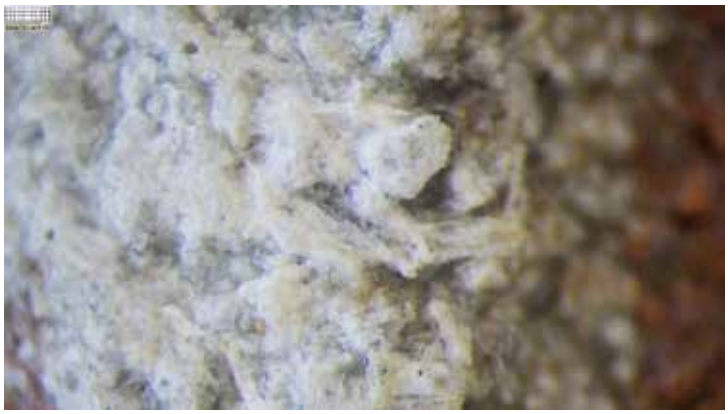
・多数のガラス化したモミガラ・茎葉の細片は釉薬と熔着している。

３．唐津市岸岳皿屋窯、藁灰釉小皿、1580 ～ 1590 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、内底四角く釉剥ぎして胎土目３個、釉剥ぎ部分にもモミガラか。底部無釉、外底釉が飛んだ部分にモミガラ痕。

・中央付近～下部にかけてモミガラ・茎葉の非結晶質ケイ酸がガラス化、釉薬と一体化している。

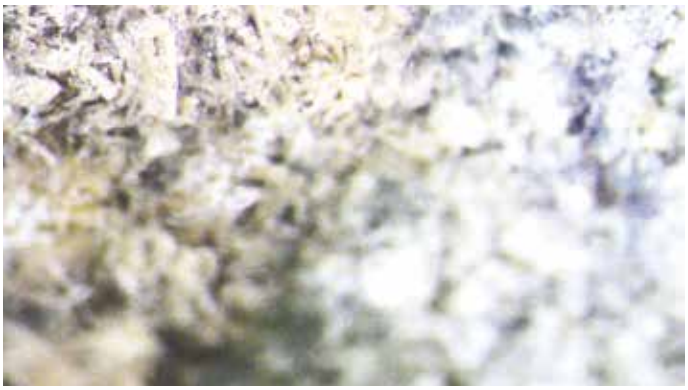


４．唐津市岸岳飯胴甕窯、濃い灰釉小皿、1580 ～ 1590 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、底部無釉。外底に釉が飛んだところにモミガラ痕か。



・モミガラ・茎葉の拡大

・側壁の釉薬に付着した微細なモミガラ・茎葉など。

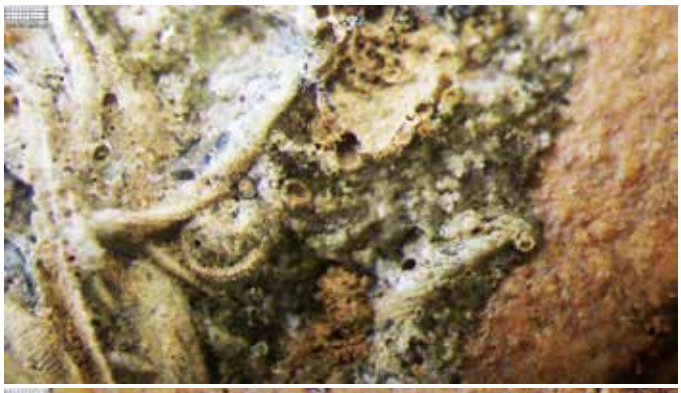


・稲の葉、モミガラに含まれた非晶質のケイ酸は釉薬（結晶質ケイ酸）と一体化し細胞壁が観察され化石のようである。

５．有田町小森谷窯、濃い灰釉小皿、1590 ～ 1610 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、底部無釉、外底釉が飛んだところにモミガラ顕著。

・モミガラ・茎葉がガラス化し高台畳付に熔着している。

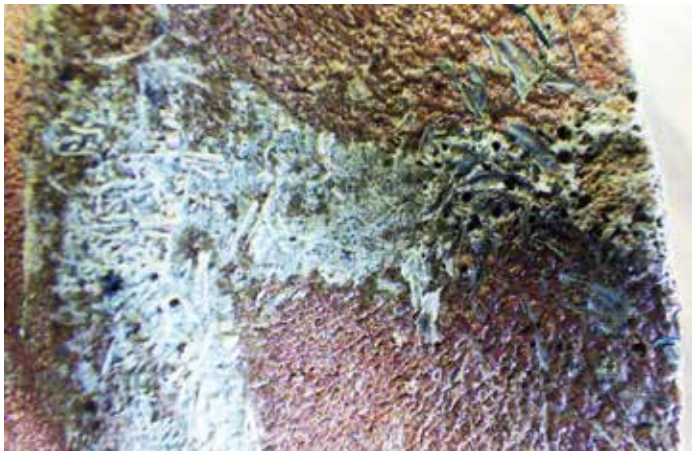
・モミガラ・茎葉の有機物は燃焼し非結晶質ケイ酸はガラス化している。細胞壁、突起などが確認できる。



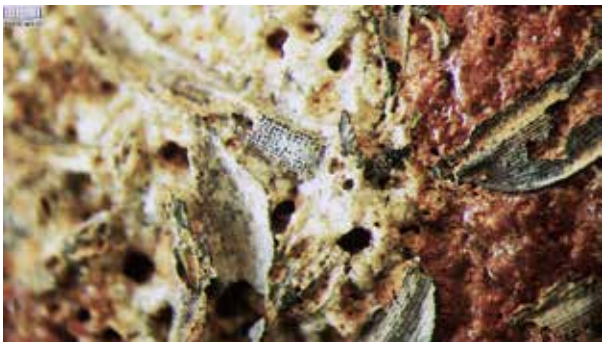
・化石の集合体のようなモミガラ・茎葉。モミガラは動物の背骨のように湾曲している。

・高台外壁の素地部にモミガラの非晶質ケイ酸分がガラス化し白く熔着している。

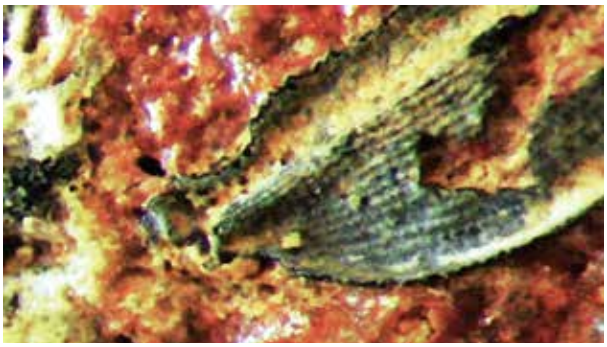
６．有田町小森谷窯、灰釉小皿、1590 ～ 1610 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、見込胎土目 4 個か、底部無釉。外底、釉が飛んだところなどにモミガラ顕著。



・高台畳付の釉薬飛び



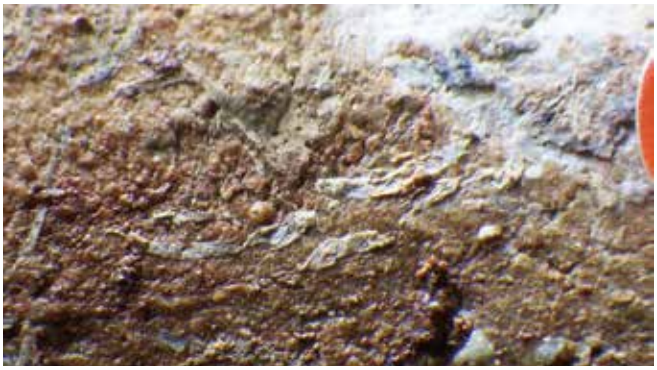
・左３分の２は釉薬とモミガラ・茎葉。右３分の１は素地に黒く変色したモミガラ痕が一体化している。どちらのモミガラ痕もガラス化し細胞壁の凹凸まで確認できる。



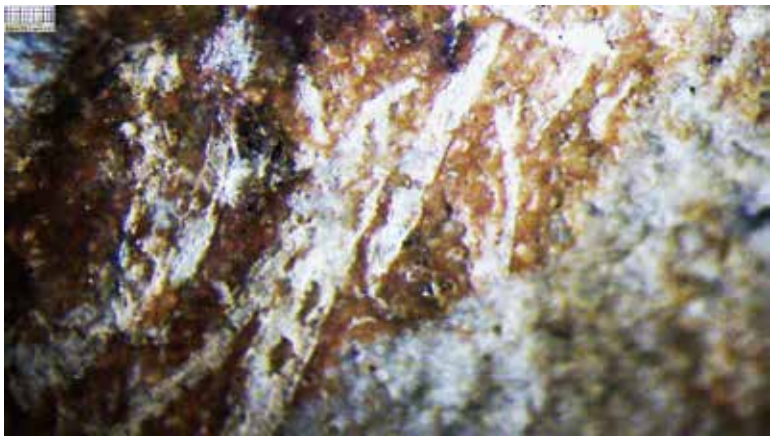
・今回の観察でモミガラ痕は黒く変色しガラス化している。黒く変色した物質の究明は行わない。

・素地部の稲葉の微細な細片は白いガラス質に変わり素地に熔着している。

７．有田町山辺田３号窯、鉄絵（灰釉）大皿、1590 ～ 1610 年代、有田町教育委員会蔵、内底に胎土目４個熔着、底部無釉、高台に胎土目４個、高台畳付にモミガラ顕著。



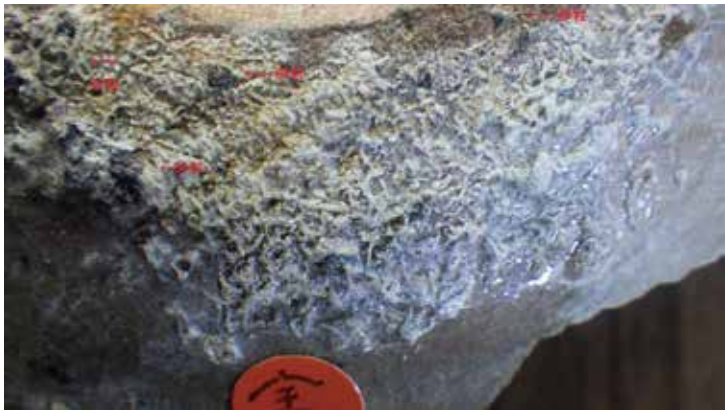
・高台のモミガラ・茎葉

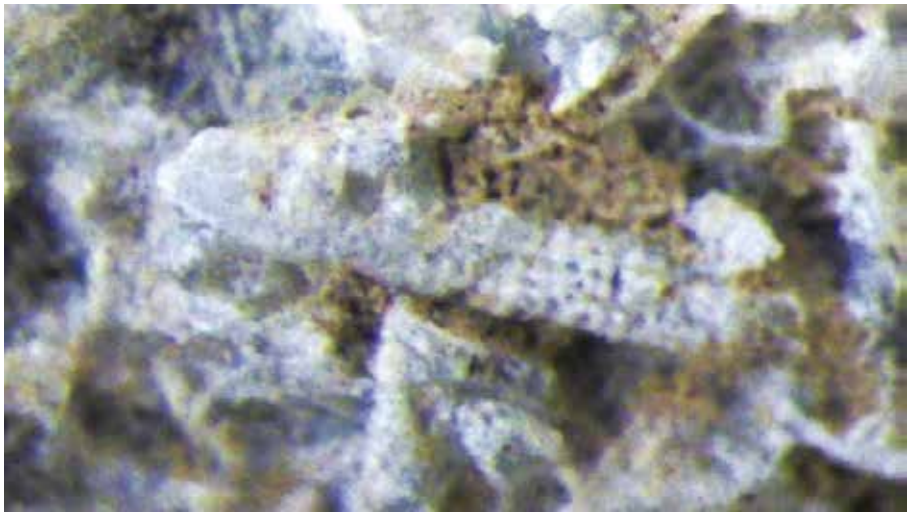


・高台の釉薬飛びと素地境のモミガラ・茎葉痕

８．有田町小溝上窯、灰釉小皿、1590 ～ 1610 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、内底に胎土目 4 個、底部無釉、外底にモミガラ顕著。

・高台下部の釉薬飛び部にモミガラ・茎葉の集合体がある。





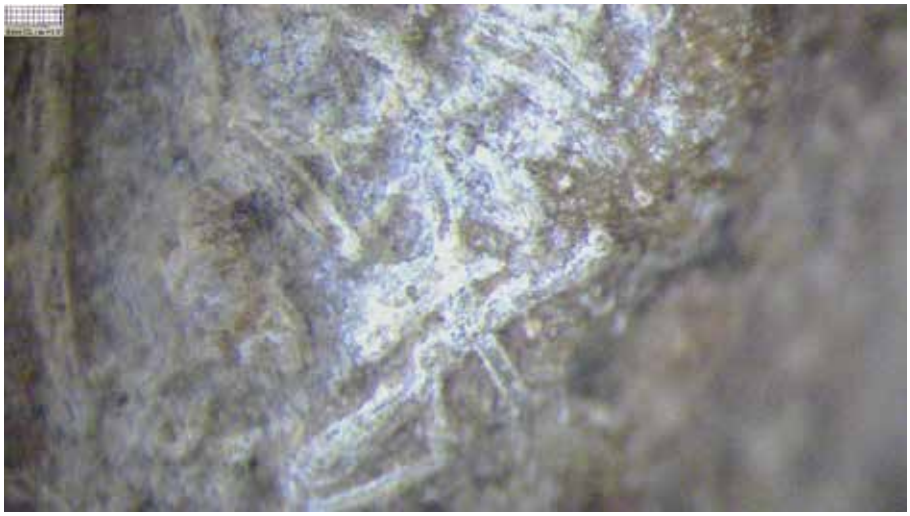
・乾燥させた植物は燃焼時に湾曲し燃える。稲など乾燥時に約 20％の非結晶質ケイ酸を含んでいる。炭化すると非結晶質ケイ酸は約 50％に達する。写真のモミガラはこの経過をたどり釉薬が溶け出し熔着し一体化したのであろう。

・素地部の熔着したモミガラ・茎葉痕

９．有田町天神森２号窯、濃い灰釉小皿、1590 ～ 1610 年代、有田町教育委員会蔵、内底に胎土目４個、底部無釉、外底の釉が飛んだところにモミガラ熔着。

・高台畳付の矢印の先にモミガラ・茎葉がある。

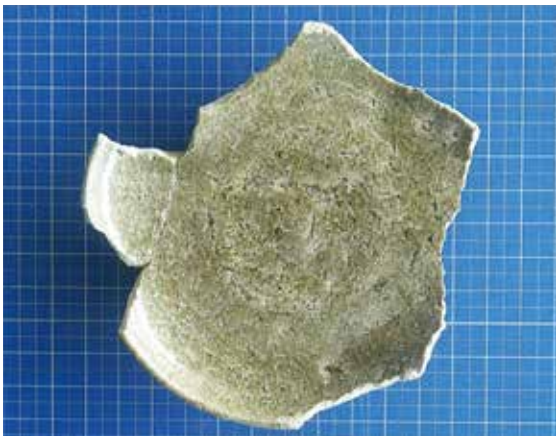
・釉薬部のモミガラ・茎葉



10. 多久市高麗谷窯、濃い灰釉小碗、1590 ～ 1610 年代、多久市教育委員会蔵、外底にモミガラ熔着痕。

11. 多久市唐人古場窯、濃い灰釉小皿、1598 ～ 1610 年代、多久市教育委員会蔵、外底に粗い敷砂熔着。

・敷砂は近在の沢から採集してきたのであろう。フルイなどで選別していないので土状の物が混じる。
・敷砂は 5-6mm 以下。

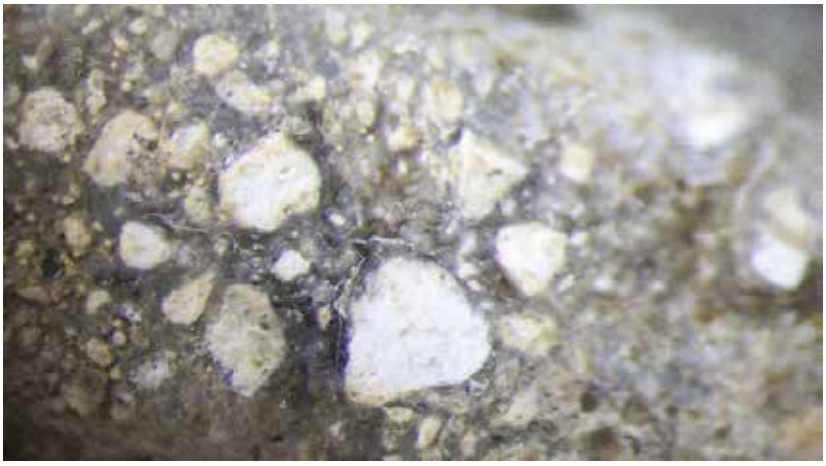


12. 多久市唐人古場窯、濃い灰釉小皿、1598 ～ 1610 年代、多久市教育委員会蔵、外底に粗い敷砂熔着。

・窯近くの牛津川の砂を敷砂に採用したのであろう。この界隈の地質は火山性の溶岩が固まった，粘り気が少ない玄武岩と粘り気のある安山岩に海洋性の堆積岩（砂岩、頁岩、珪質頁岩）からなる。耐熱性がある石英（砂岩）は少ない。玄武岩は緻密で固く、溶融温度も 1290℃前後。安山岩の溶融温度は 780℃前後で低い。安山岩は物理的な風化作用で砂になるのが早い。源流から 3-5 km下ると 1 ㎜以下の砂となる。石英・玄武岩を除く砂粒は耐熱性が低く敷砂に向かない。
・高台は無釉であるが敷砂は熔着している。

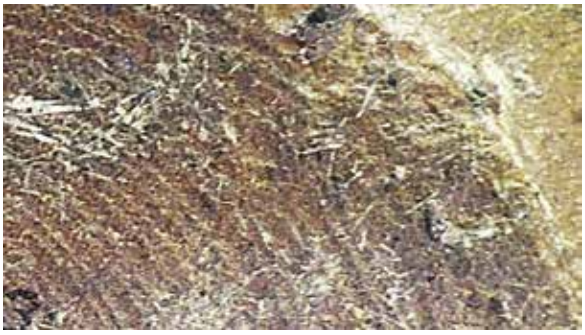
・高台に粗い敷砂と窯底（窯道具か）の焼結した粘土が熔着

・畳付の釉薬に熔着している敷砂。



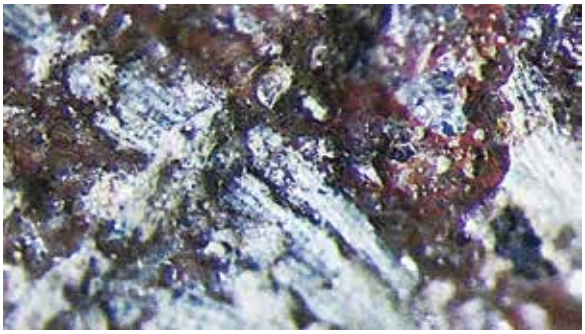
13. 多久市高麗谷窯、サヤ、1610年代頃、多久市教育委員会蔵、外底にモミガラ熔着痕、内底に敷砂。

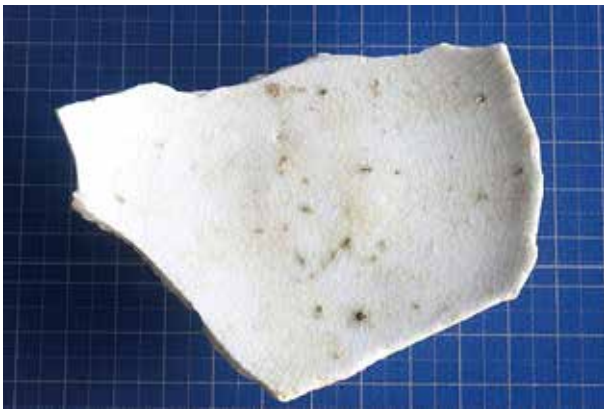
・ガラス化したモミガラが熔着している。外底のガラス化したモミガラの熔着は周囲にみられる。



・ガラス化したモミガラの集合箇所

・内底の敷砂はフルイなどで選別されている。粒の大きさは３㎜以下である。敷砂同士が熔着している。大半が灰白色で安山岩、珪質頁岩の可能性が高い。黒い砂粒もある。





14. 多久市高麗谷窯、白磁碗、1610 年代頃、多久市教育委員会蔵、高台内にモミガラ熔着痕。

15. 多久市高麗谷窯、白磁碗、1610 年代頃、多久市教育委員会蔵、高台に窯詰め道具の熔着があり、その脇の高台にモミガラ熔着痕。

・このガラス化したモミガラは2㎜弱の長さである。細胞壁がわかる。
・このガラス化したモミガラは焼結粘土に熔着している。

・高台と焼結粘土の隙間にガラス化したモミガラが熔着。

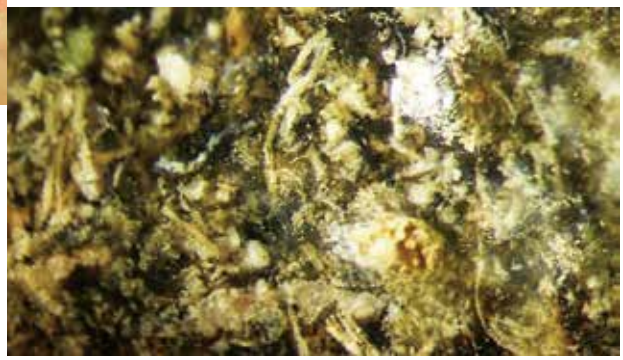
・ガラス化したモミガラが高台に熔着している状態がわかる。

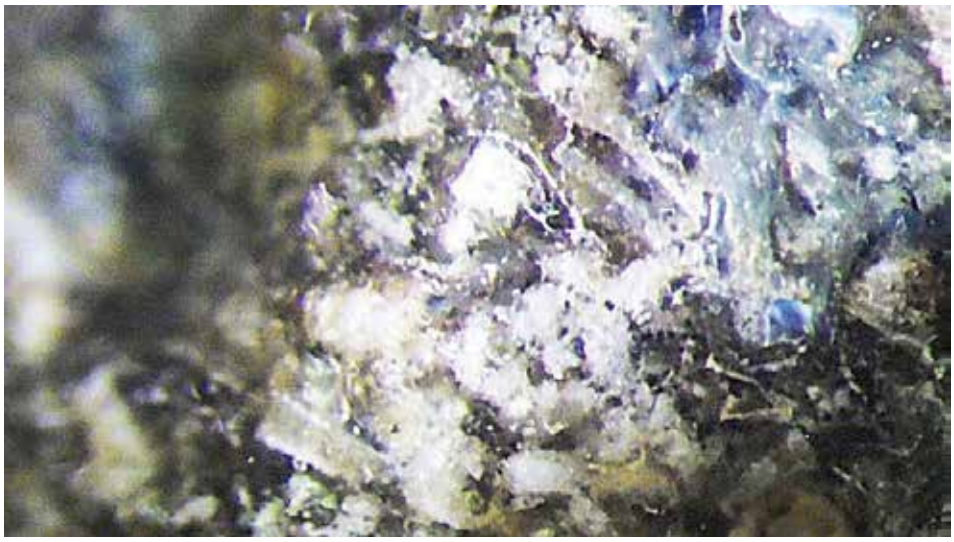
16. 多久市高麗谷窯、白土装飾陶器皿、1610年代頃、多久市教育委員会蔵、高台まで全釉であり、畳付に砂熔着。

・敷砂はフルイなどで選別されている。
しかし土？も含まれている。

・高台畳付に熔着した敷砂。

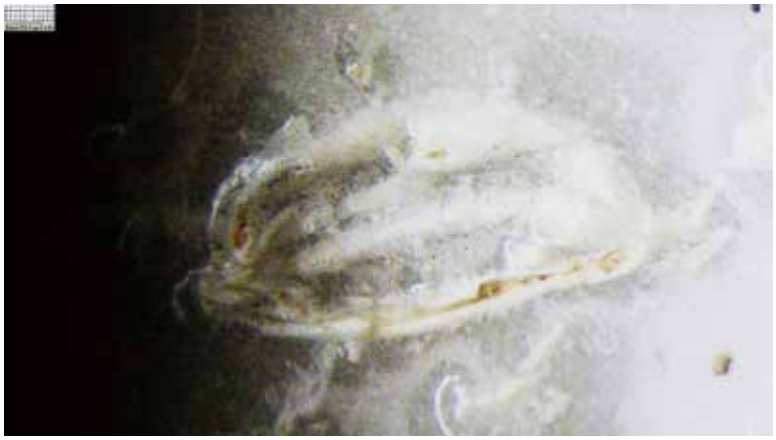
17. 有田町小溝上窯、トチン、1610 ～ 1630 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、上面にモミガラ痕、陶器の高台痕の後、磁器の高台痕が残る。





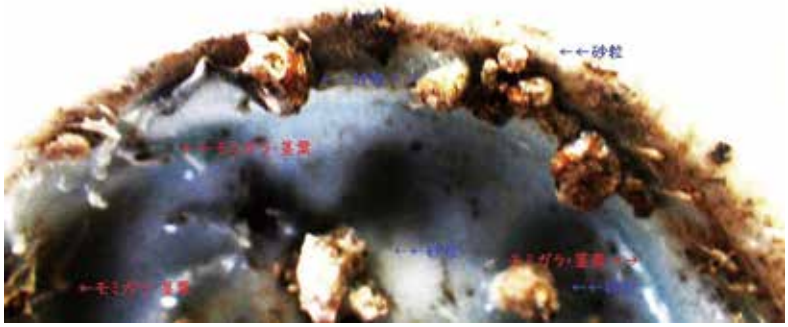
18. 有田町天神森７号窯、染付皿、1610～1630年代、有田町教育委員会蔵、高台畳付のみ無釉、高台畳付周近にモミガラ顕著。内面菊唐草文、やや黄ばむ。呉須は黒ずむ。

・モミガラ熔着



19. 有田町天神森窯、染付碗、1610 ～ 1630 年代、有田町教育委員会蔵、天目形か、高台内に染付銘有（花押のようにもみえる）、高台畳付のみ無釉、高台内粗い小石粒とともにモミガラ顕著。

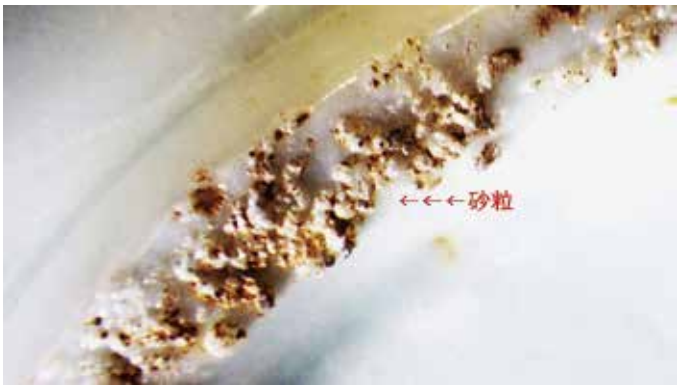
・高台、高台畳付



・高台の砂粒熔着。熔着している砂粒にばらつきがある。フルイなどで選別されていない。砂粒は（石英）結晶質珪酸。

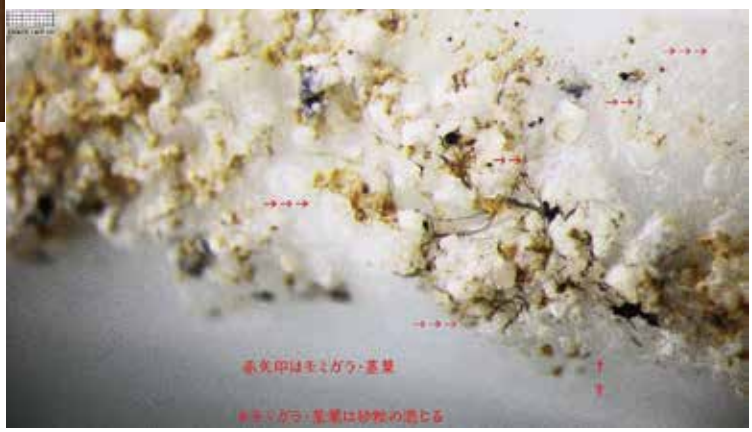
・高台上のガラス化したモミガラ・茎葉。天神森窯の焼成温度は低いため、浮き出たモミガラは白く不透明である。

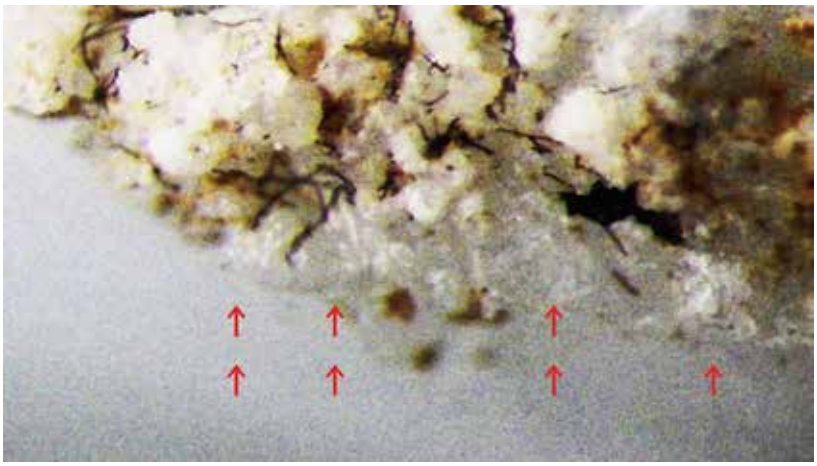
20. 有田町天神森７号窯、染付官人文小皿、1610 ～ 1630 年代、有田町教育委員会蔵、型打ち成形、高台に小石粒熔着。



・高台と高台畳付に砂粒

・砂粒は白く熱による膨張感は見えず石英（結晶質珪酸）と思われる。石英の融点は 1650-1700 度。
・砂粒の中にガラス化したモミガラ・茎葉が混じる。





・赤矢印はガラス化したモミガラ・茎葉。
・砂粒は石英である。
・砂粒とモミガラ・茎葉を混ぜて使用。

21. 有田町猿川窯、染付碗、1610 ～ 1640 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、底部にモミガラ熔着痕。

・高台に敷砂とガラス化したモミガラが熔着している。

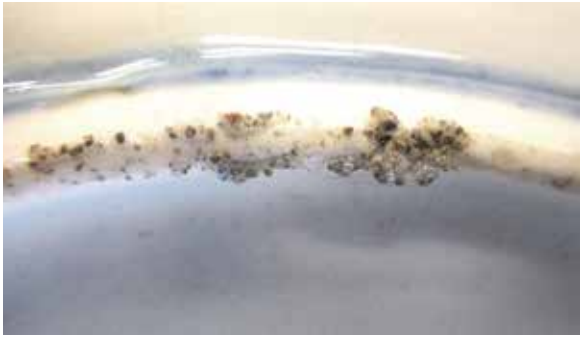
・高台内壁は密に乳白色のガラス化したモミガラが熔着。細胞壁も認識できる。
・焼成時に敷砂の上にモミガラを厚くしたのであろう。

22. 有田町猿川窯、染付小皿、1610 ～ 1640 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、底部にモミガラ痕。

・敷砂は流紋岩がほとんどでわずかに火砕角礫岩がある。

・高台内壁に乳白色のガラス化したモミガラが多数熔着している。畳付にも沢山のガラス化したモミガラが熔着している。
・褐色の敷砂は流紋岩、黒く多孔質の敷砂は火砕角礫岩。

23. 有田町長吉谷窯、染付芙蓉手鹿文皿、1660 ～ 1670 年代、有田町教育委員会蔵、底部にハリ熔着、高台などに砂粒熔着。



・赤線の先にガラス化したモミガラ・茎葉。
・砂粒とガラス化したモミガラ・茎葉が混在する。

24. 有田町南川原窯ノ辻窯、染付皿、1670 ～ 1700 年代、佐賀県立九州陶磁文化館蔵、高台畳付に敷砂痕。

・敷砂は 0.3㎜ 前後で粒がそろっている。敷砂には石英単体と石英＋長石、長石単体に黒色系統がみられる。このような状態の砂は河川で採集している。海浜の砂は海水による比重選択と波の力により同じ系統の石英の砂に統一される。
・石英の融点は 1700 度前後、長石は 1290 度で長石が溶けて無釉の高台畳付に熔着した。

・自然界で石英、水晶の透明なものは少ない。大半は不透明なものが多い。山梨県は水晶加工の産地で不透明なものは加熱処理を行い透明にする。
・拡大写真を観察すると透明度は上がり一次的、二次的な不純物が見られる。
・1250 － 1300 度の焼成温度で溶けることはない。

25. 有田町樋口窯、染付仙芝祝寿文皿、18 世紀後半、有田町教育委員会蔵、型打ち成形、外底に敷砂痕。

・敷砂は 0.3mm 前後で粒がそろっている。敷砂には石英単体と石英＋長石、長石単体に褐色系統の砂が多くみられる。このような状態の砂は河川で採集している。
・石英の融点は 1700 度前後、長石は 1290 度で長石が溶けて高台内の底面に熔着した。褐色、不透明な白色系統の砂は長石であろう。

佐賀藩の近代化事業と陶磁器（１）－反射炉用資材と陶磁器産地

徳永貞紹

１．はじめに

幕末に佐賀藩が取り組んだ近代化事業は、長崎の海防強化のための両島台場築造とそこに配備する鉄製大砲の鋳造から始まった。反射炉を中心とする大砲鋳造施設（以下、反射炉）の建設と稼働は、ウルリッヒ・ヒュゲーニン Ulrich Huguenin（1755 － 1834）[1]が現在のベルギーリエージュにおける鋳造所を事例に鉄製砲の鋳造法を説いた 1826 年の蘭書“Het gietwezen in's Rijks ijzer-geschutgieterij, te Luik”（『ロイク国立鉄製砲鋳造所における鋳造法』[2]以下、『鉄製砲鋳造法』）を伊東玄朴や杉谷雍助らが翻訳したものをテキストに進められた。同書に書かれた原料の入手や設備の導入が難しい場合でも、在来の技術や知識、経験を応用して実現したと評価されてきた。特に、反射炉に必要な耐火煉瓦の開発製造については陶磁器生産との関わりが指摘されるが、従来は限られた史料や不確かな情報に拠る解釈に留まっていた。

近年、佐賀藩の近代化事業にかかる佐賀市内の重要産業遺跡について継続的な文献調査と発掘調査が進められ、文献調査の成果として築地・多布施反射炉の関係史料が翻刻・刊行された（佐賀市教委 2012・2013・2014・2015）。小稿では反射炉用資材と陶磁器産地の関わりについて陶磁史の視点から再検討する。

２．反射炉用資材の原料調達

反射炉の築造と稼働には、何より反射炉内壁の資材となる耐火煉瓦の製造が必須であり、鋳型なども含め関連する各種の原料調達を『鉄製砲鋳造法』の内容を元に試みなければならなかった。『鉄製砲鋳造法』の翻訳者の一人であり佐賀藩の反射炉事業で西洋の技術を読みとく中心的な役割を果たした杉谷雍助（雍介）は築地反射炉（大銃製造方）の設置から試験操業など初期の試行錯誤を手記として残している。この「杉谷手記」（『松乃落葉』所引）に築地における反射炉用資材の原料土の供給地と種類に関する記述がある。

史料１　「杉谷手記」（『松乃落葉』所引）（杉本・酒井・向井 編 1987）

土ハ我肥ノ白石山、志田山、文珠山ニ取リ、（中略）土ハ粘土類ナリ。炉ヲ築クニ用ユル焼石及ヒ製型ノ料ニ給ス。白石山ニ出ス者ハ淡灰色粘土ニシテ陶工以テ「トチミ」ヲ製スル者及ヒ浅黄色粘土是ナリ。志田山ニ出ス者ハ砂ニ類シテ淡灰色、浅黄ヲ帯ル者間錯ス。陶工以テ「トチミ」ヲ製スル者ニシテ、メスナ幾分ヲ調和スル者及ヒ浅黄色粘土是ナリ。文珠山独リ浅黄色粘土ヲ出ス。（中略）型砂ハ初メ天草ニ出ス礬土ヲ用ユ悪シ。後ニ志田山ニ出スメスナヲ用ユ好シ。

まず、原料土は肥前佐賀領内の「白石山」「志田山」「文珠山」から調達した、とする。「白石山」

は三根郡千栗郷白壁の白石皿山（現在の三養基郡みやき町)、「志田山」は藤津郡塩田郷の志田皿山（現在の嬉野市塩田町）に比定される。江戸時代の肥前では陶磁器生産区域を「皿山」と呼び､各「皿山」に地名を冠して「〇〇皿山」「〇〇山」と表すのが一般的で､「白石山」「志田山」が陶磁器産地の「皿山」を意味することは後掲の史料２～６からも明らかである[3]。

次に、土は粘土類で反射炉の築造に用いる「焼石」と「製型」の原料に供給され、「白石山」は淡灰色粘土で陶工が「トチミ」を製作するものと浅黄色粘土、「志田山」は砂に類し淡灰色で浅黄色を帯びるものが挟まれる陶工が「トチミ」を製作するもので「メスナ」をいくらか調合するものと浅黄色粘土、「文珠山」は浅黄色粘土のみ、とする。原料土の用途が２つあることと３ヶ所の原料土それぞれの種類が記されるが、「焼石」と「製型」用にどの原料土が適用されるかは示されていない。「トチミ」は陶磁器の焼成時に窯内で製品を載せる窯道具の１つで、現在は「トチン」と呼ばれることが多いが、江戸期の史料での用例はほとんど「トチミ（とちみ)」と記される[4]。「メスナ」は登窯焼成室の床面や「トチミ」などに製品が熔着しないよう遊離材として敷く珪砂などの耐火物で、「目砂」とも書く。

最後に、当初「型砂」は天草の「礬土」を用いたが不良で、「志田山」の「メスナ」を用いたら良好だった、とする。「型砂」用原料土の試行と変更を記し、天草産の原料土が試されたことがわかる。

「杉谷手記」では反射炉用原料の用途が「炉ヲ築クニ用ユル焼石及ヒ製型ノ料」と記されており、このうち炉の築造に用いる「焼石」は耐火煉瓦を含む煉瓦と想定される。そもそも、反射炉の築造に必要な耐火煉瓦はそれまでの日本には存在しなかった資材であるから、当然それを指す名称も存在しなかったのだが､『鉄製砲鋳造法』の佐賀藩翻訳書の１つである『熕鉄新書』(佐賀県立図書館所蔵　蓮池鍋島家文庫　蓮 350-1）巻之七では原著の「vuurbestendige gebakken steenen（耐火性の焼成された石)」が「火ニ耐ル焼石」と訳され、耐火煉瓦を意味する用語として「焼石」が使われており、同書の翻訳者である杉谷雍助が手記に「焼石」と書いたものは耐火煉瓦を意味することが確認できる。また、「製型ノ料」は、『熕鉄新書』巻之四に鋳型の原料を解説した「型料粘土并砂」の項があり、鋳型原料の粘土・砂類と考えられる。

築地反射炉の耐火煉瓦や鋳型に用いる原料土が白石皿山と志田皿山から供給されたことは塩田商人で志田東山の再興に尽力した江口平兵衛の日記（『天相日記』）でも裏付けられる。

史料２　『天相日記』嘉永３年８月 28 日条（塩田町教育委員会 1997）

ランホウ石火矢拵へに付砟こ五万斤入用、尤三万斤計りハ白カベ山ゟ取ヨセニ相成なり、弐万斤買入トシテ来られ候よし、尤右砟こ五万斤トガタ土トねり合セ、形仕立に相成よし

嘉永３年（1850）８月に蘭方すなわちオランダ式の銃砲製造に「砟こ」５万斤（約３万 Kg）が必要であり、うち約３万斤は「白カベ山」から取り寄せられ、残り２万斤の買入に来られた

そうで、「砟こ」５万斤と「ガタ土」を練り合わせて「形仕立」にされる由、と記す。築地において鉄製大砲の鋳造に向けた取り組みが始まった頃で、反射炉で鋳型製作に必要な原料として「砟こ」を調達するため塩田へ来たのである。塩田は流通拠点として栄えた河口の港町で、陶磁器や陶磁器生産関係の原料なども扱われ、近郊に志田皿山（本藩領の東山と蓮池藩領の西山）があった。同じ原料の調達先として挙げられた「白カベ山」は白壁（しらかべ）山、すなわち先述した白石（しらいし）皿山を指すとみてよく、「砟こ」が磁器産地に関わる資材であることを示唆する。

「砟こ」の正体は何か。『天相日記』の解説では「砟」を「柞」の当て字と解して釉薬に用いる柞灰（いすばい）のこととするが（塩田町教委 1997，p. 53）、平兵衛は柞灰を「灰」と記しており[5]、「灰船」と「砟こ船」を使い分けている[6]のも積荷の違いを示す。「砟こ」は「砟粉」で、柞灰ではなく土石類であることは、嘉永２年３月 18　日条の「砟粉土」（塩田町教委 1996，p. 13）の用例から裏付けられる。「砟」字は「石」そのものの意味で、「砟粉」は石の粉末を指すとみられ、有力な候補は陶石の粉末「はたり粉」である[7]。天草高浜の庄屋で陶石の生産・販売や磁器生産に関わった上田家の七代宜珍（よしうず）が文化７年（1810）に記した『陶山遺訓』（角田 1940）などに「はたり粉（㕮粉）」の用語が見える。臼で挽いて粉末にすることを「はたる」と言い、粉砕した粉を「はたり粉」と呼ぶのであり、「㕮」字は麦などを臼で挽くことであるが、有田でも陶石の粉末を「はたり粉（㕮リ粉）」と称しており（池田史郎　編 1966，pp. 430-431　など）、陶磁器生産に関わる文脈での「はたり粉」は陶土の原料となる粉砕した陶石の粉である。

３．反射炉用耐火煉瓦の製造

築地反射炉用の耐火煉瓦製造は、大銃製造方主任の本島藤太夫の編纂録『松乃落葉』や鋳物師棟梁を務めた谷口弥右衛門の手覚『両島新台場御備大砲其外於築地ニ鋳立記』に記録がある。

史料３　『両島新御台場御備大砲其外於築地ニ鋳立記』（佐賀市教育委員会 2012）

嘉永五子年正月十四日、反射炉火入八封度銃御鋳立相整候（中略）此鋳立後、志田山エ土角焼立ニ付土見究其外拵方仕組ニ出郷致ス、役所ヨリハ副島殿･園村重四郎殿、中村和七･橋本新左衛門ト両人参ル

史料４　『両島新御台場御備大砲其外於築地ニ鋳立記』（佐賀市教育委員会 2012）

（嘉永五年閏二月）二十五日、同鋳立其外鋳ル（中略）此鋳立前白石山へ反射炉土角切合ニ出郷致ス、此後志田山へモ同断ナリ、是ハ初ノ二月十五日ヨリナリ

史料５　『松乃落葉』（杉本・酒井・向井 編 1987）

（嘉永五年四月）去亥十月より当今迄大銃製造方御遣料（中略）

右者反射炉築立方土台用松角、白石・志田両山土角焼立用炉木山取運賃駄賃其外築立方日雇細工人賃銀并試験筒五挺鋳立方部番子賃銀御酒料銀等迄入工銀

史料３は嘉永５年（1852）１月、築地反射炉での操業の合間に「志田山」へ「土角」の焼成について（原料）土の見極めなど製造の段取りのため現地へ行ったというもので、築地から橋本新左衛門と中村和七が同行している。橋本新左衛門は鉄の熔解などで中心的な役割を果たした刀工で、中村和七については後述する。この「志田山」が志田皿山のことであるのは言うまでもない。「土角」の用例は多くないが、焼成して作る土製で角形の反射炉用資材とすれば、やはり耐火煉瓦を含む煉瓦とみなせる。史料４も同年閏２月に「白石山」へ「反射炉土角」の「切合」に出向き、同様に「志田山」にも行ったとする。「白石山」はもちろん白石皿山である。史料５では同年４月までの築地反射炉に関する費用として白石山と志田山での「土角」焼成に用いる「炉木（たたらぎ）」（登窯の燃料とする薪）調達に必要な人件費が挙げられている。史料３～５から築地反射炉用煉瓦の製造が少なくとも嘉永５年の段階では白石皿山と志田皿山の２箇所で行われたことは明らかである。

築地反射炉での製砲事業が軌道に乗り始め、幕府から注文された品川台場用の鉄製大砲製造のため嘉永６年（1853）に多布施反射炉（公儀石火矢鋳立方）が設置された。新たな反射炉の築造に用いる耐火煉瓦の製造についても築地反射炉と同じく白石皿山と志田皿山で「土角＝煉瓦の焼成が行われていることが次の史料にみえる。

史料６　『両島新御台場御備大砲其外於築地ニ鋳立記』（佐賀市教育委員会 2012）

（嘉永六年）九月末ノ比ヨリ多布施エ御石火矢鋳立方役所被相立、（中略）反射炉二双・錐台三連二組其外役所、炭・地金庫等、建方相始、偖又白石山・志田山両所エ土角焼作立

以上から佐賀藩反射炉における耐火煉瓦と鋳型の原料土は、陶磁器産地である白石皿山と志田皿山から供給され、耐火煉瓦の焼成も両所で行われたことが確認できた。両皿山のどこで焼造されたかまでは分からないが、志田では鋳立方役人が滞在した記事（後掲史料８）がある西山の可能性が高い。

各地の反射炉事業のテキストとなった『鉄製砲鋳造法』では反射炉を使用して耐火煉瓦を焼成すると解説されるが、佐賀藩では在来産業の磁器生産地で焼成し、薩摩藩でも反射炉に隣接する登窯で焼成した可能性が指摘されている（渡辺 2005）。伊豆韮山では反射炉の近くに「反射炉築立入用焼石製造所」が置かれ[8]、後に原料の採土地である梨本村で焼成まで行われた。水戸藩も反射炉付近で煉瓦を製造したが、炉内の耐火煉瓦は登窯で焼造し、他は在来の瓦師に作らせるなど柔軟に対応している[9]。西洋の技術である反射炉を導入する際に各地で応用可能な在来技術や入手できる原料は異なるため、実現に至る過程も一様ではなかったのである。

耐火煉瓦の名称については、薩摩藩や伊豆の反射炉事業では基本的に「杉谷手記」と同じ「焼石」が使われており[10]、佐賀藩翻訳書の利用や関係者の交流によるものと考えられる。谷口弥右衛門や本島藤太夫が記した「土角」は伊豆でも「焼石土角」と併記したり「土角干立小屋」「土

角製方小屋」の用例があり[11]、煉瓦を意味している。水戸藩の那珂湊反射炉では「瓦」と呼ばれていて、佐賀藩などとは異なる[12]。なお、文久３年（1863）に幕府直轄の反射炉を江戸に設置する計画があり、耐火煉瓦を伊豆で作ることになった際は「焼石」ではなく「煉化石」に変わっている[13]。「煉化石」は西洋から導入された建築煉瓦＝普通煉瓦も含めた名称として明治期になって普及し、「耐火煉瓦」や「煉瓦（普通煉瓦）」名が明治後期から大正期に一般化したとされる（竹内 1990，pp. 25-26・水野 1999，p. 7）。

白石・志田両皿山以外で佐賀藩の反射炉用耐火煉瓦が製造された可能性はあるだろうか。武雄鍋島家三ノ丸窯で焼造したとの説が根拠に乏しいことは以前に指摘した（德永 2014, p. 143）。『有田磁業史』（寺内 1933）や『肥前陶磁史考』（中島 1936）では大川内山の鍋島藩窯で反射炉用の耐火煉瓦を焼造したとするが、何を典拠としたかは示されていない。これに関連して次の史料を挙げる。

史料７　『嘉永七年御目通并公用諸控』嘉永７年４月 29 日条（小宮 監修 2007）

奇輔反射炉之工合了簡ニ乗レ合不申由

大河内土之工合者カラキ土之工合等、奇輔申候与太違候都合申上候事

皿山迄者兎角も大河内者格別相違申候　御意

嘉永７年（1854）４月に藩主鍋島直正も臨席し藩重臣が藩政運営について協議した事項の１つ。奇輔とは京都出身の中村奇輔で、佐賀藩に招かれ精煉方で理化学実験や研究を推進した人物である。反射炉の状況が奇輔の想定と合わず「大河内土」が「カラキ」状態であるなど奇輔の説明と大きく違うことが議題となっている。皿山まではともかく大河内は格別に違っているという。これからわかるのは、①反射炉で使用する「大河内土」が中村奇輔の考えとは異なり適性がなかったこと、②大河内（の土）は皿山（の土）とは大きく違うこと、の２点である。「カラキ」と言う表現がどのような状態を指すのか分からないが[14]、少なくとも反射炉用原料には不適とされたことは文脈から読み取れる。「大河内」は、有田と考えられる「皿山」と対比した記述から藩窯が置かれた大川内山を意味することは明らかであるが、述べられているのは「大河内土」の特性が反射炉の用途に適していないことのみで、それがいかなる原料か、どこで何に使うのかは記されていない。大川内山と有田の土が比較されている点から、陶石とは限らないが陶磁器関係の原料土ではあるだろう。佐賀藩の反射炉事業では築地から多布施へ移行する過程で耐火煉瓦の改良が行われ、嘉永７年（1854）４月以降は耐火煉瓦の製造に関する記録が途絶えることが品質の安定を示唆するものと指摘されている（前田 2014, p. 12）。ただ、仮に史料７が耐火煉瓦製造に関わる最後の記事であるとしても、「大河内土」が原料として不適であったことが問題視されているわけであり、試作が藩窯で行われたのか原料土の取寄せに留まったのかに拘わらず、「大河内土」は採用されなかった可能性が高い。

反射炉用耐火煉瓦の製造に関して、佐賀藩では陶磁器産地で原料調達や製造が行われた。薩摩藩でも原料調達に窯業者の知見が生かされ（渡辺 2005、深港 2020）、水戸藩でも陶磁器生産との関係が認められる[15]。ただ、伊豆では耐火煉瓦製造に陶磁器産地との直接の接点はなく、黒鍬と呼ばれる土木技術者が請け負ったが進まぬまま瓦師に引き継がれている[16]。耐火煉瓦の製造において陶磁器の生産技術はもちろん有用であっただろうが、課題は耐火煉瓦に適した原料の探索や複数種を用いる場合の調合であったと考えられる。

４．反射炉事業と陶磁器産地をつないだ人物－大銃方・鋳立方下役 中村和七

佐賀藩の反射炉事業では各種の専門知識や技能を持つ人材が集められ、各々の能力が活かされた。耐火煉瓦や鋳型については肥前の陶磁器産業で培われてきた知識、技術、経験が応用されたが、ここに反射炉事業と陶磁器産地をつないだ人物、中村和七の存在があった。

中村和七は、嘉永７年（1854）の佐嘉城下町竈帳に伊勢屋町の住人として記され、酒屋を営み同町の咾（おとな）役と御鋳立方下役を務める足軽であった（三好不二雄・三好嘉子　編 1990）[17]。諸事をこなす下級役人だった彼は反射炉事業に携わった者の中ではまったくの無名だが、築地反射炉の操業が本格化する嘉永５年（1852）正月の鋳造の後に志田山へ出張しており（史料３）、先述したように耐火煉瓦の原料調達や製造のための調整などであった。

反射炉事業に携わる以前、天保 10 ～ 13 年（1839 － 1842）に酒井田柿右衛門が下南川原山庄屋として出した借用証文や皿山代官所への願出などに名が見え（有田町史編纂委　編 1985, pp. 520-529）、このうち天保 10 年（1839）11 月の「御役所御奥印乞受指出置申候」とある借用証文覚（酒井田柿右衛門家文書 20 号）に皿山代官所役人の立場で押印している。

塩田商人の江口平兵衛が残した『天相日記』は天保 12 年（1841）から志田東山の再興に尽力した経緯の覚書「天保十弐年丑三月ヨリ志田東山陶器仕組ニ附　日記覚」（塩田町教委 1994）から始まるが、そこに築窯に必要な銀拝借の手続きや根回しなど平兵衛に助言・協力を行った皿山代官所下役の中村和七の名が記されている。同日記で彼の名が次にみえるのは嘉永６年（1853）９月である。

史料８　『天相日記』嘉永６年９月 23 日条　（塩田町教育委員会 2000）

西山ゟ石火矢御鋳立方役人中村和七殿ゟ伝言、来月末迄も西山へ逗留致し候に付、何角諸調もの彼是被申付候間、其心得可被致ト申越ニ相成候也、此和七殿進メニよりて、予東山再興せし事也、皿山教導所詰役の時也

西山（志田西山）から「石火矢御鋳立方役人」中村和七の伝言があり、志田西山（西皿山）にしばらく滞在しいろいろと調べものをするという。時期的に築造が始まったばかりの公儀石火矢御鋳立方＝多布施反射炉の役人として多布施反射炉用資材のための滞在とみてよい。続け

て日記では平兵衛が東山を再興したのは中村和七の勧めによるもので、皿山教導所の詰役であった時のことと述べる。中村和七は皿山代官所下役を勤めていた時に年齢も近い[18]江口平兵衛と懇意になったのであろう。

『池田私記』嘉永７年（1854）７月 13 日条には前日に知らされた両島台場や反射炉事業に関わった者への褒賞の対象人物と褒美の内容が列記されているが、その末尾に一代手明鑓[19]となり大銃方下役から同手伝役に昇格した中村和七の名が記されている（佐賀郷土史料研究会編 2016）。皿山代官所に勤め志田東山再興に助言・協力するなどした経歴を買われ、陶磁器生産地の事情にも明るい実務者として反射炉事業に加わったものと想定される。彼は技術者ではなかったが、その経験と人脈は日本で初めてとなる耐火煉瓦などの製造に繋がり、佐賀藩の反射炉事業に貢献したのである。

５．陶磁器登窯の煉瓦状構築材

磁器の焼成温度は約 1250 ～ 1300℃とされ窯の構築材や窯道具などには一種の耐火物に近い資材が開発使用されていたが、反射炉で大量の鉄を熔解させて鉄製大砲を鋳造するにはそれ以上の高温に十分に耐える炉内部の壁材、つまり耐火煉瓦が必要であった。江戸時代に肥前の登窯に用いられた煉瓦状の構築材が「耐火煉瓦」と表現されることはよくあるが、広い意味での耐火物とは言えるとしても近代以降の定義では「耐火煉瓦」に該当しないとされる。

登窯の煉瓦状構築材は、現在では「トンバイ」と呼ばれることが多いが、江戸中期の有田を物語の形で伝える享保 16 年（1731）の『皿山雀』に「今も竈（かま）を焼ぬること（言）葉、少は残りて、くるかん･とんばり･おろ･ちやつ･とちみ･おんざん抔（など）と申て、文字もしれ（知）すい（言）ひ伝ふ。」とあって（尾﨑 編 2000，p. 23）、磁器生産の用語の１つとして「とんばり」と記されている。

肥前では江戸時代の史料に「トンバリ」の形状や用途あるいは原料や製造方法などを記した例は知られていないが、肥後天草の上田家文書（熊本県教委 1980）では 18 世紀後半以降に「とんばり」が散見され、築窯の説明で「とん者（ば）り壱窯ニ凡五百程作置乾し置上岸三尺程ニ右とんばりニ而両岸を築立其上ニおんざんの穴明ケ」など登窯の構築材としての使用方法や上田家文書中の絵図「焼物窯内之図并ニ道具共ニ」で直方体の「トンバリ」が図示されており、窯道具などは赤土で作るが「トチミハ土性トンバリヨリハ上品ヲ用也」との注記があることなどが指摘されている（大橋 1986）。京焼陶工の欽古堂亀祐が文政 13 年（1830）に著した『陶器指南』で肥前系の磁器生産に関する図にも「トンバリ大小アリ　高サ凡一尺角五寸」とあり、福岡藩御用の陶器窯の例だが、『高取歴代記録』の寛延２年（1749）「高取東山御焼物所之記」では築窯の想定見積りに「とんばり土立」や「立とんばり拵」に要する人数が記されるなど（高取編 1979）、江戸期の用例ではすべて「トンバリ（とんばり）」である。

肥前では「トンバリ」による壁の構築が 18 世紀前半まで奥壁のみであったのが 18 世紀後半以降は側壁まで用いられるようになるとされ（大橋 1986）、19 世紀初頭の大山新窯跡では側壁の「トンバリ」積は通焔孔の高さまででそれより上部は塗壁であることから、天井まで含めて窯全体が総「トンバリ」作りとなる正確な年代は明らかでないとの指摘もあるが（野上 2005）、幕末の肥前で登窯の構築材として「トンバリ」が普及していたことは確かである。

肥前の「トンバリ」に関しては、登窯の構造変遷を考える要素として検討した上記の研究や、鍋島藩窯跡から採集した資料の組成分析による原料土推定や耐火度測定（家永 1954，p. 132）などがあるものの、「トンバリ」自体を主な対象とした研究は管見にない。耐火煉瓦との類似や相違を比較するにも形態、規格、製作技術、原料など情報が不足しており[20]、これらの検討や分析が課題である。

６．おわりに

幕末佐賀藩の反射炉用資材と陶磁器産地の関係について、陶磁史の視点から再検討した。

登窯の構築材である「トンバリ」や窯道具の「トチミ」は陶磁器焼成の資材であるが[21]、陶磁器産地で培われた耐火物の知識や技術が、西洋の技術書を手掛かりに反射炉を実体化するにあたって応用されたと考えられる。

反射炉用煉瓦の原料調達や製造が、佐賀藩内における磁器生産の中心地である有田や本藩が直轄する大川内の藩窯ではなく、蓮池藩領の志田西皿山や白石鍋島家領の白石皿山で行われたのは、求めたのが高品質な陶磁器ではなく資材であることや輸送の利便性などいくつかの要因が考えられるが、陶石の特性や地元原料との調合の経験などが考慮されたのではないだろうか。これらを考えるうえでも、築地・多布施反射炉跡の発掘調査成果が報告される場合には、出土した耐火煉瓦の組成分析[22]や技術・形態的特徴、出土状況などの情報が陶磁器産地の関連資料と併せて公表されることを期待したい。

注

1　オランダの陸軍少将でロイク国立鉄製砲鋳造所長。日本語表記ではヒュギューニン、ヒュゲーニン、ヒュゲェニン、ヒュ―ゲニン、ユゲーニンなど、揺らぎが大きい。

2　Luik はリエージュのオランダ語表記で同書の出版時はネーデルラント王国の領域。

3　これらを地形としての山の名称と理解し「志田山」を藤津郡志田の丘陵地帯、「白石山」を志田に隣接する杵島郡白石（しろいし）辺りの杵島山地のいずれかの峰かとするのは武雄三ノ丸窯での耐火煉瓦製造説による誤解。「文珠山」は未詳で、陶工が用いる材料が記されないことから陶磁器産地（皿山）名ではなく原料となった粘土の産地名かもしれない。

4　有田での早い例として、酒井田柿右衛門家文書の元禄３年（1690）「土合帳」で「ごす土」に用いる原料土の一種として「とちみ土」が挙げられている（有田町史編纂委 1985，p. 480 ほか）。

5　例外として天保 15 年（1844）９月 11 日条に「檮灰三十弐俵上野村馬より東山為登」（塩田町教委

1994）とある。上野（かみの）村は武雄領で陶器大甕の生産地として知られ、志田山にも近接する。

6　同年の日記で「灰船」（７月７日条）、「砟こ船」（２月２日条）と区別している（塩田町教委 1997）。

7　「杉谷手記」で当初「型砂」に試された天草産の礬土＝アルミナ質土とはこれを指すのかもしれない。「砟粉」＝「はたり粉」の可能性は高いが有田や天草の史料では見ない。平兵衛独自の表現であろうか。

8　『反射炉御用留年々用』安政３年４月（伊豆の国市教委 2019a，pp. 46-47）

9　「反射炉製造秘記」嘉永７年７月では「炉之内通必用之瀬戸瓦」は登窯とみられる「瀬戸竈」の築窯に時間がかかるため、先に「反射炉外囲」に築く「瓦」を在来の関戸瓦師に試焼させている（那珂湊市史編さん委　編 1991，p. 12）。登窯は反射炉付近にあったとされ、遺構は確認されていないが推定地で耐火煉瓦や窯道具のトチミ、タコハマなどが採集されている（川口 2016・2019）。

10　薩摩藩反射炉では『市来広和（四郎）日記』安政４年５月 11　日条の「此度之炉は焼石等其他造築等都而西洋通」（松尾　編 2003，p. 369）など、伊豆反射炉では『反射炉御用留年々用』嘉永６年 11　月「反射炉并錐台取立場所之儀ニ付申上候書付」に「反射炉之儀、焼石と唱七寸六分四方、厚三寸弐分ニ土ヲ固メ素焼仕、右を以築立候」（伊豆の国市教委 2019a，p. 25）など。なお、後者の史料に記される計画段階の寸法は『鉄製砲鋳造法』に基づく規格である。

11　『反射炉御取建中日記』嘉永７年７月 18　日条「反射炉え焼石土角、今日より積始」（伊豆の国市教委 2019b，p. 187）。また、同日記の安政６年７月 25　日条で「土角干立小屋」、８月 13　日条で「土角製方小屋」がいずれも大風雨で潰れたことが記されている（伊豆の国市教委 2019b，p. 204）

12　注９。「反射炉日録抄」安政２年４月 25　日条（那珂湊市史編さん委　編 1991，p. 79）など。

13　『反射炉御用留年々用』文久３年９月（伊豆の国市教委 2019a，p. 129）など。

14　翻刻の注では「固すぎるの意か」（小宮　監修 2007，p. 72）とされるが、未詳。

15　注９。その他、「反射炉製造秘記」安政４年２月 15　日の職人や資材等に要する費用見積に鍛冶職や鋳物師と共に「陶器師」がみえる（那珂湊市史編さん委　編 1991，p. 37）。

16　『反射炉御取建中日記』嘉永７年８月６日・10 日条（伊豆の国市教委 2019b，p. 187）

17　弘化２年総着到では犬塚三郎兵衛組の鉄砲足軽として切米５石５斗とみえる（『弘化二巳年惣着到上』鍋島家文庫　佐賀県立図書館複製資料　S 複鍋 331-62/2）。

18　中村和七は嘉永７年（1854）３月の竈帳に 65　才と記され、寛政２年（1790）生まれ。江口平兵衛は『天相日記』弘化４年（1847）１月 27　日条に「本卦還リの祝膳」とあり（塩田町教委 1994）、天明７年（1787）１月 27　日生まれ。

19　「手明鑓」は侍と足軽の間にあたる佐賀藩独自の階層で、杉谷雍助、橋本新左衛門、谷口弥右衛門など反射炉事業が始まった際の中心的な専門的人材には手明鑓格が含まれていた。

20　肥前の陶磁器窯跡の発掘調査で、遺物としての情報が重視されるのは廃棄された製品や窯道具などで、窯の構築材である「トンバリ」は遺物として詳しく報告されることがこれまでほとんどなかった。

21　築地反射炉跡の発掘調査では反射炉本体は未確認であるが、在来のこしき炉に関連する廃棄土坑でこしき炉由来の鉄滓や反射炉用と思われる耐火煉瓦などと共に陶磁器焼成時の窯道具「ハマ」が複数出土している（佐賀市教委 2010『築地反射炉跡発掘調査　現地説明会資料』）。何の目的で築地反射炉に持ち込まれたのか今のところわからないが、反射炉と陶磁器産地の関係を示す資料の一種である。

22　築地・多布施反射炉跡からは発掘調査で多様な耐火煉瓦が出土しており、多布施反射炉跡から出土した耐火煉瓦の分析では、珪酸成分（SiO_2）75 ～ 77.5%、アルミナ（Al_2O_3）16 ～ 19%、耐火度 SK20 ～ SK27　の高珪酸質粘土煉瓦で、細かい茶色の微粉とやや粗い白色粒の混合原料であり、白色粒は陶石で煉瓦の焼成温度は 1200 ～ 1250℃と推定されている（寄田 2005）。また、両反射炉跡出土の耐火煉瓦は蛍光 X 線分析で耐火性の高いジルコニウムが高濃度に含まれることが指摘されている（田端 2016）。

引用・参考文献

有田町史編纂委員会 編 1985『有田町史　陶業編Ⅰ』 有田町

家永敬三 1954「鍋島藩窯の科学的考察」『鍋島藩窯の研究』 佐賀県文化館
池田史郎 編 1966『皿山代官旧記覚書』 皿山代官旧記覚書刊行会
伊豆の国市教育委員会 2019a・2019b『韮山反射炉関係資料集』第１巻上・下
茨城県立歴史館 2024『那珂湊反射炉　鉄と近代を創る』
大橋康二 1986「肥前古窯の変遷－焼成室規模よりみた－」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要』第１号
大橋周治 1991「〔補論〕佐賀邑領武雄の鋳砲事業」『幕末明治製鉄論』 アグネ
尾﨑葉子 編 2000「皿山雀」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第９号
角田政治 1940『上田宜珍伝　附 上田家代々の略記』
鹿児島市教育委員会・尚古集成館 編 2003『旧集成館溶鉱炉跡・反射炉跡』（株）島津興業尚古集成館
川口武彦 2016･2019「那珂湊反射炉跡採集の窯資料－水戸藩領内における近世窯業の一側面－」「（同）(続報)」『ひたちなか埋文だより』第 44・51 号　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
熊本県教育委員会 1980『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県文化財調査報告書第 48 集
小宮睦之 監修 2007『嘉永七年御目通并公用諸控』 古文書研究会（佐賀）
佐賀郷土史料研究会 編 2016『幕末佐賀　池田半九郎日記』第二巻
佐賀市教育委員会 2012『幕末佐賀藩製砲関係史料集』佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第２集
佐賀市教育委員会 2013・2014・2015『幕末佐賀藩 反射炉関係文献調査報告書』『（同）Ⅱ』『（同）Ⅲ』佐賀市重要産業遺跡関係調査報告書第４・６・８集
塩田町教育委員会 1994・1996・1997・2000『天相日記　抜粋』『嘉永二年（同）抜粋四』『嘉永三年（同）抜粋五』『嘉永六年（同）抜粋八』塩田町文化財調査報告書第 11・14・16・22 集
杉本勲・酒井泰治・向井晃 編 1987『幕末軍事技術の軌跡　佐賀藩史料『松乃落葉」』 思文閣出版
鈴木一義 1992「幕末期の西洋技術導入に関する一考察（Ⅱ）－佐賀藩の反射炉用耐火煉瓦の製造技術について－」『国立科学博物館研究報告（Ｅ類)』第 15 巻
芹澤正雄 1991『洋式製鉄の萌芽（蘭書と反射炉)』アグネ叢書４　アグネ技術センター
高取静山 編 1979『髙取家文書』 雄山閣出版
竹内清和 1990『耐火煉瓦の歴史－セラミックス史の一断面－』 内田老鶴圃
田端正明 2016「佐賀藩反射炉跡出土遺物の分析－レンガ・鉄滓の蛍光Ｘ線分析－」『幕末佐賀藩の科学技術　上　長崎警備強化と反射炉の構築』 岩田書院
寺内信一 1933『有田磁業史』 陶器全集刊行会
德永貞紹 2014「武雄の磁器　断絶と再興、新たなる創成」『白き黄金』 佐賀県立九州陶磁文化館
中島浩氣 1936『肥前陶磁史考』 肥前陶磁史考刊行会
中島平一 1982「三の丸窯と耐火煉瓦」『湯か里』第 38 号　武雄歴史研究会
那珂湊市史編さん委員会 編 1991『那珂湊市史料　第一二集（反射炉編)』 那珂湊市
韮山町 1989『史跡 韮山反射炉　保存修理事業報告書』
野上建紀 2005「肥前の築窯技術の伝播について」『窯構造・窯道具からみた窯業－関西窯場の技術的系譜をさぐる－』研究集会資料集　関西陶磁史研究会
深港恭子 2020「集成館事業における耐火レンガ製造と薩摩焼小考」『黎明館調査研究報告』第 32 集　鹿児島県歴史・美術センター黎明館
前田達男 2014「幕末佐賀藩における反射炉の鋳砲記録 (2)」『産業考古学』第 151 号
松尾千歳 編 2003「反射炉関係史料」『旧集成館溶鉱炉跡・反射炉跡』（株）島津興業尚古集成館
水野信太郎 1999『日本煉瓦史の研究』 法政大学出版局
三好不二雄・三好嘉子 編 1990『佐嘉城下町竈帳』 九州大学出版会
寄田栄一 2005「佐賀藩反射炉用耐火煉瓦の品質試験結果」『幕末佐賀科学技術史研究』第１号
渡辺芳郎 2005「幕末における耐火レンガ生産と在来窯業－薩摩藩・集成館事業の場合－」『金大考古』第 49 号

17 世紀前半に肥前で生産された鳥形香合について

巖　由季子

１．はじめに

17 世紀前半に磁器を開発した肥前では、食膳具を中心にさまざまな器種を生産した。磁器の生産開始間もないこの頃の製品は初期伊万里と呼ばれる。器胎が厚く、のびのびと描かれた染付の文様などに初期らしい特徴がみられるが、なかには注文主の存在が想定されるような少量多品種の精巧な茶道具もみられる。本稿では茶道具のうち比較的作例の多い鳥形の香合を取り上げ、製作技法の検討と関連資料との比較を通じてその生産背景を考察する。

２．17 世紀に肥前で生産された鳥形合子

（１）初期伊万里の鳥形香合

茶道具としての香合は、わび茶が広がりつつあった 16 世紀後半の茶会記などに記載例が少なく、天正年間（1573 ～ 1592）までは中世以来の唐物香合を中心としていた。文禄年間（1592 ～ 1596）頃に炭手前が定着したことで茶陶として重視されるようになり、慶長年間（1596 ～ 1615）の初め頃からそれまで見られなかった和陶の香合が出現し、さらに中国から染付や交趾の香合がもたらされ、急速に多様化した[1]。陶磁器製の鳥形香合に代表される具象的な香合は茶人の趣向に適う道具として好まれ、注文によって中国の染付磁器やオランダの白釉陶器の鳥形香合が作られた。

初期伊万里の鳥形香合は 1630 年代から 1640 年代を中心に生産された。ヘラなどの道具を用いた手作業の工程による丁寧な仕上げが見られ、鳥の頭部を象った蓋を身に比べて小さく作り、立ち姿をあらわしたものが多い点に特徴がある。本項では 2025 年に開催した特別企画展「初期伊万里ビッグバン」において展示した鳥形香合５点に出土資料１点を加え、製作技法に着目する。

資料１　瑠璃釉鳥形香合（佐賀県立九州陶磁文化館所蔵　柴田夫妻コレクション）（図１）

肥前　有田　1630 ～ 1640 年代　総高 7.1cm　底径 3.4 × 3.3cm

図１

表面に型成形で生じる皺や割型の線を見出すことができないが、全体を型で成形し、尾羽など

を貼り付けて成形した可能性が考えられる。内側面に指調整した痕があり、内部を空洞にするため土を刳り出した後、指先で整えたものと思われる。型などで基本的な形を作り、ヘラで土を落として成形するヘラ削りは 1630 ～ 1640 年代頃の窯ノ辻窯跡出土陶片にみられ、特に立体物などで用いられたが、量産に向かないため作例は少ない[2]。合口は蓋側に立ち上がりを設ける。線彫りによって羽の模様などの細部を表し、器表全体に瑠璃釉を掛け、目の周りに銹釉、嘴と身と蓋の内部に透明釉を掛ける。底部は平底で露胎。体色や肉垂、長い尾羽などの特徴は雄の雉を思わせる。

資料２　染付木菟形香合（個人蔵）（図２）

肥前　有田　1630 ～ 1640 年代　総高 6. 1cm

図２

顔を正面に向けて立つ木菟（みみずく）の姿をあらわした香合。〈資料１〉のように全体に型を用い、羽角（耳のように見える頭部の羽毛）などの細部を貼り付けにより成形したと思われる。合口は蓋側に立ち上がりを設ける。羽の表現は陰刻で細かい。染付で目や羽の一部と脚鱗を表す。身の内側のみ透明釉を掛け、蓋の内側は無釉である。脚の裏と垂直に下ろした翼の先端に砂が熔着する。小さな脚部のみで自立するのが難しく、翼も支えとして機能させたように思われる。

資料３　染付辰砂鳥形香合（個人蔵）（図３）

肥前　有田　1630 ～ 1640 年代　総高 6. 7cm　底径 8. 3 × 3. 7cm

図３

蓋の内側

長い首をひねり、後ろを向く鳥の姿をあらわした香合。〈資料２〉同様、脚と翼の先が接地する立ち姿だが安定性が低く、身のみでは尾羽側に傾（かし）いで自立しない。蓋の内側には細いヘラのような工具を用いて複数回にわたり素地を削り出した痕（図３右）が顕著に認められる。合口は蓋側に立ち上がりを設ける。直線的な翼の表現や羽の線彫りは〈資料１〉に近く、底部の成形は後述の〈資料４〉に似る。一部に辰砂と染付を用い、全体に透明釉を掛ける。内部は身側のみ施釉し、蓋側は無釉にする。脚と翼の先端は露胎で砂が溶着している。

資料４　染付銹釉鶏形香合（個人蔵）（図４）

肥前　有田　1630 ～ 1640 年代　総高 5.0cm　底径 6.0 × 3.0cm

図４

鶏の翼は丸みを帯びてわずかに盛り上がり、直線的に盛り上げて翼を表した〈資料１～３〉と異なる。鶏冠と肉垂に銹釉を用いる。蓋の内側全体と合口が無釉で､身の内側に透明釉を施す。羽の模様は染付で描き込まれているが、気泡の多い透明釉が厚くかかるためやや不鮮明に見える。脚と翼の先と尾羽の先端に砂が溶着する。

資料５　染付鴨形香合（個人蔵）（図５）

肥前　有田　1630 ～ 1640 年代　総高 4.5cm　底径 5.7 × 3.9cm

図５

嘴を羽に埋めて休む鴨の姿をあらわした香合。脚や翼で自立する立ち姿の香合に比べると単純な構造であると言える。蓋の内側に素地土を削り出した筋が確認できる。合口は〈資料１～４〉と異なり、身側に立ち上がりを設ける。17 世紀の中国磁器にも、本資料のように翼を蓋側にあらわし、身に立ち上がりを設けた鳥形香合がある。身の外底部と蓋の内側が無釉。身の内側に透明釉を掛ける。

資料６　窯ノ辻窯跡（佐賀県武雄市山内町大字宮野）出土　染付鳥形香合（蓋）

1630 ～ 1640 年代（佐賀県立九州陶磁文化館所蔵）（図６）

図６

蓋のみで頭部を欠くため本来の姿は不明だが、白い体色と長い嘴から水鳥であると思われる。頭部の破断面を上から見ると本体と嘴の間に瑠璃釉が入り込んでいるため、嘴を除く全体を成形してから嘴を接着したことがわかる（図６右図)。内側に指などで素地土を押して調整した痕跡がある。残存する合口部分は釉剥ぎし、立ち上がりを持たないことから薬籠蓋であることがわかる。

以上６点の資料に限られるが、初期伊万里の鳥形香合には以下の傾向が見られる。

① 成形に型を用い、内部の痕跡から土を刳り出して中空にした可能性が考えられた。

② 細部の貼り付けや羽の線彫りなど手間のかかる作業が行われている。

③ 蓋を身に比べて小さく作る立ち姿のもの（資料１～４）と、鳥が休む姿をあらわし合口が楕円形になるもの（資料５）がある。合口のつくりは、立ち姿の鳥では蓋の内側に設けた桟状の立ち上がりを身にはめこむ桟蓋になり（資料１～４)、休む姿の鳥では身側に立ち上がりを作る薬籠蓋（資料５・６）になる。

④ 装飾は染付もしくは銹釉、辰砂釉を一部に使用した多色釉による。

以上の特徴が共通して見られるが、〈資料１〉は立ち姿であるにもかかわらず底部を平底にすることで比較的安定しており、〈資料２～５〉では蓋の内側を無釉にするが、〈資料１〉の内側には透明釉を掛けている点でも異なる。

（２）17 世紀中頃から後半にかけて生産された肥前の鳥形合子

初期伊万里の鳥形香合の生産年代は 1630 ～ 1640 年代頃と考えられ、後の時代に同様の資料を見ることはできない。17 世紀中頃から後半にかけても鳥形合子（図７）が生産されたが、初期伊万里の鳥形香合に比べて単純化した製法が取られ、形状も異なる。この頃の鳥形合子は奈良県郡山城跡など国内での出土例も知られる一方、インドネシア向けにも輸出され、嗜好品としてビンロウの実を噛む際に用いる石灰を入れる容器としても用いられたと考えられている[3]。

17 世紀中頃から後半にかけて鳥形合子を生産した窯として、長吉谷窯、下白川窯（図８)、谷窯などが知られる。これらの窯は 17 世紀後半に輸出向けの製品を多く生産したことがわかっている。〈図８〉は型で成形した鳥形合子の蓋で、内側は滑らかに調整した上で透明釉を掛ける。一方の目は陰刻のみで染付による線描が忘れられている。合口は身側の内側が立ち上がる。素焼きを行わなかった初期伊万里では見られない、染付の濃淡を巧みに生かす濃みの表現が羽の模様に認められる。郡山城跡西側の近世墓に副葬品として埋納された類品がある[4]。

1650 年代以降、有田では型押し成形が普及し、幸平遺跡から鳥形合子の成形に使用したと思われる雌型と雌型製作用の雄型をはじめとする多種の土型が出土している。これらの土型はすべて低火度焼成され土器質である[5]。焼成した雄型に粘土をかぶせて型をとり、糸で切り離して雄型をとりのぞいて成形・焼成した雌型に素地土を押し込んで製作するのであれば、内側

の素地土をヘラで削り取る工程を省くことができる。

図７　染付鳥文鳥形合子
肥前　有田　1660 ～ 1670 年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
柴田夫妻コレクション

図８　下白川窯跡（佐賀県有田町白川１丁目）出土
鳥形合子（蓋）1660 ～ 1680 年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

（３）まとめ

（１）初期伊万里の鳥形香合と（２）その後 17 世紀後半にかけて生産された鳥形合子を比較すると、以下の点が特に異なる。

①（２）は型押しによる成形後にヘラ彫りを加えない。蓋の内側にも素地土を削り取ったヘラ彫り痕跡は見られない。

②（２）は鳥が足を折って休む姿を象ったものがほとんどで、（１）に多い立ち姿は見られない。合口が楕円形をなす安定感のある形状で、身側に立ち上がりを作る薬籠蓋になる。

③装飾は染付や色絵、瑠璃釉のほか白磁があり、（１）の銹釉や辰砂の作例は見られない。施文する場合は蓋側のみに行うことが多く、身の装飾はほとんどない（図７等）。

以上から、17 世紀中頃から後半にかけて生産された鳥形合子には初期伊万里の香合よりも工程が少なく、安定した形状で歩留まりを高めている点などからも、大量生産に適した工夫がみられると言える。

３．染付鳥形香合の受容と他産地の生産事例

（１）中国・肥前産染付鳥形香合の使用

史料に「染付鳥香合」とのみ記載される場合にその産地を特定することは難しいが、善田は徳川将軍家や遠州の寛永初期の茶会に登場する染付香合を中国産と捉えている（善田 2020、174-175 頁）。初期伊万里の香合は寛永 16 年閏 11 月 13 日条（1639）の「藤実香合」[6]の例があるように早くから国内に流通したが、鳥形に限ると同時期の史料中に肥前産の可能性がある香合の使用例を見出すことはできず、鳥形香合の使用例と見られる記録は 17 世紀後半から 18 世紀初頭の史料に求めることができた。ただし、鳥形であるか、器物に鳥を描いたものか判別することは困難であるため、あくまで鳥形を含めた鳥の意匠の香合に関する使用例の紹介に留まる。

京の公家による鳥形合子の使用例として、近衛家熙の茶会に参加し会記を残した平田職直（1649 ～ 1742）による『平田職直日記』の茶の湯関係の記事[7]の中に「南京少キ雀香合」（貞享３年［1686］６月 21 日）及び「御香合　染付　南京ノ鷹」（同年７月２日）が確認できる。いずれも「南京」とあるが産地を厳密に示したものではない可能性もあり、中国産か肥前産か不明である。「南京少キ雀香合」とは後述の祥瑞雀香合のようなものであろうか。

茶の湯に傾倒した仙台藩四代藩主伊達綱村（1659 ～ 1719）の茶会記には肥前磁器の鳥の香合が登場する。綱村晩年の宝永２年（1705）４月から同年６月にかけて江戸麻布邸にて開いた茶会の記録に「香合　古今利染付孔雀」とあり、さらに成立年代は不明であるものの綱村隠居の元禄 16 年（1703）以前の記録と推測される『仙台城二の丸内飾記』中にも同じ品と思しき「御香合　古今利染付孔雀」の記載がある[8]。「古今利」とあるので、同時代の伊万里焼ではなく初期伊万里の香合かもしれない。これは孔雀文を染付であらわした丸形や角形の香合である可能性もあるが、孔雀を象った香合として〈染付孔雀形香合〉（戸栗美術館所蔵、戸栗美術館 1997 の 64 頁 133 図）や細川家伝来の〈染付孔雀香合〉（永青文庫所蔵、千葉そごう美術館 1998 の 31 頁 23 図）が知られる。徳川将軍家で使用された染付・瑠璃釉の鳥形香合は、その後も公家や大名茶人にふさわしい道具として受容された様子がうかがえる。

（２）各地の鳥形香合

江戸時代に鳥形香合を生産した窯は少なくないが、ここでは肥前との関連が考えられる産地の 17 世紀の生産状況を確認する。

①中国・景徳鎮民窯（古染付（こそめつけ）・祥瑞（しょんずい））

15 世紀末以降、中国の染付磁器は日本に大量にもたらされていたが、茶の湯の道具としての受容は遅れ、16 世紀まで本格的に用いられず、小堀遠州（1579 ～ 1647）が幕府の茶道指南役になり、徳川将軍家の茶会で利休伝来の染付茶碗が使用されはじめ、遠州が自身の茶会において染付の茶道具を利用したことで流行したと考えられている（善田 2020、154 - 178 頁等）。

景徳鎮民窯で明時代・天啓年間（1621 ～ 1627）頃に日本で古染付と呼ばれる染付磁器が生産され、茶道具としての需要を背景に花生や水指、茶碗や向付、香合なども作られていた。香合には鳥や動物の意匠のものも多く、蓋甲に染付で鳥を描いた〈古染付叭々鳥香合〉（根津美術館所蔵）をはじめ現在まで伝わる名品が知られる。続いて崇禎年間（1628 ～ 1644）頃を中心に焼造された祥瑞に瑠璃釉の鳥形香合がある。表面全体に瑠璃釉を施した香合は「瑠璃雀」と呼ばれ賞玩されたもので、〈祥瑞瑠璃雀香合〉（徳川美術館所蔵）は蓋の内側にも瑠璃釉が施される（五島美術館［林克彦］2025、145 頁）。善田は徳川将軍家の茶会記『二代三代将軍御会記』寛永４年（1627）６月 25 日に三代将軍家光が使用した「香合　染付鶴（東・染漬雀）」の「染漬雀」について、伝世する類品が複数知られる「瑠璃雀」にあたる可能性を指摘した（善

田 2020、133 頁・174 頁)。本作は球形の合子に鳥の頭と翼の先端と尾羽を貼り付けて成形されている。中国や東南アジアで既に 12 世紀頃には生産されていた鳥形合子は球形に近い単純な合子に嘴や羽を貼り付けたものが多く、始めから写実的な鳥の姿を一体で型押しし、ヘラ彫りによって彫刻していく初期伊万里の鳥形香合と成形方法が異なる。

②美濃焼

16 世紀末頃からすぐれた茶陶を量産した美濃では香合も盛んに作られ、具象的な鳥形香合も見られる。織部鳳(ふくろう)香合（野村美術館所蔵、矢部 1999 の 78 頁左下図）は立ち姿の梟を象ったもので、顔を正面に向けて立つ姿は〈資料２〉に似る。また、近衛家熙（1667 ～ 1736）の言行を記録した『槐記』享保 13 年（1728）11 月 13 日条に織田有楽（1547 ～ 1621）秘蔵の「木兎ノ香合」の使用例がある。有楽の所蔵を経て家熙の曾祖父信尋の手に渡り、姻戚関係にあった後西天皇に献上された後、再び近衛家に戻ったと記される[9]この香合は、有楽の没年から美濃の志野や織部などの陶器である可能性が高いと思われる。安政２年 (1855) に出版された『型物香合番付』や伝世品（茶道資料館 1998 の 69 頁 59 図）に見られるように中国南部で生産された交趾にも木菟形の香合はあるが、管見の限り古染付に見出すことができなかった。美濃もしくは交趾などで生産された香合の影響もしくは鳥形香合を求める茶人の好みによって、肥前でも〈資料２〉などが作られた可能性が考えられる。

③京焼

京都では 17 世紀初め頃までに本格的な陶器生産が始まり、粟田口焼などで茶器が作られていた。御室焼を主宰した仁清（生没年不詳）は正保４年（1647）頃仁和寺の門前で開窯したと考えられ、鶴や鴛鴦、鵯などの鳥形香合も多く手掛けた。伝世する鳥形香合の作例は丁寧に成形され、銹絵や色絵により装飾されている（岡 2003、17・88 頁等)。現存する作例は合口が楕円形をなし、底部を平底にする安定した形状が多い。

京焼や肥前磁器に関する記録でも知られる『隔蓂記』に、著者鳳林承章が仁清の作陶現場を見学した記述があるが、承応３年（1654）12 月 20 日条に南禅寺の塔頭金地院においても「白鳥之香合」の制作を見学した記述があり、承章らはその成形の様子と焼成された完成形を見、狂句を詠んだ[10]。香合が出来上がるのを楽しむ様子から、京における鳥形香合の人気がうかがえるとともに、白鳥のような〈資料３〉なども歓迎されたのではないかと想像される。

４．むすび

茶の湯で多彩な香合が用いられるようになっていた 17 世紀前半、遠州は染付の道具を茶の湯に取り入れ、徳川将軍家の茶会で中国の染付・瑠璃釉の鳥形香合が使用されていた。こうした新たな流行を背景に肥前で染付鳥形香合が生産されたと思われるが、古染付や祥瑞に立ち姿

の鳥の香合が少ないことから美濃など国産陶器の影響や注文者による注文を検討する必要がある。初期伊万里の鳥形香合はヘラを用いて丁寧に彫った立ち姿の優品が多い一方、小さな脚と翼の先のみで支える不安定な形状が量産向きではなく、出土例も乏しいことから注文等に応じて少量生産されたと考えられる。その後 17 世紀後半に生産された鳥形合子には量産に適した工夫が見られ、国外にも輸出された。そして、肥前の磁器生産が大量生産に向かい、少量多品種で手間のかかる製品の生産量を減少させるなど大きな転換を迎えた頃、都市の消費者と距離が近い京焼で生産が本格化し、鳥形香合が生産されはじめていた。本稿は鳥形の香合に限定して検討したため、他の器形の香合の生産背景の検討と京焼との関係に関する調査は今後の課題としたい。

本稿執筆にあたり、作品画像の利用を御承諾いただいた御所蔵者様及び御助言を賜った岡佳子氏に記して感謝申し上げます。

注

1　赤沼多佳　2005「香合の変遷」『茶の湯と香合―国焼を中心に―』茶道資料館 77-80 頁

2　佐賀県立九州陶磁文化館 2005『古伊万里の見方　シリーズ２　成形』35 頁

3　大橋康二・巖由季子 2026「肥前 鉢・猪口・蓋付鉢・合子・水指・蓋置・薬壺（色絵以外）」『肥前磁器の編年 2』近世陶磁研究会 89 頁、大橋康二 2025「世界に輸出された肥前陶磁」『研究紀要　第 10 号』佐賀県立九州陶磁文化館 24 頁

4　大和郡山市教育委員会 1994『大職冠地区発掘調査概報 近世墓の調査 郡山城第 36 次』10 頁。このほか秋田県の久保田城跡でも 17 世紀後半に生産された肥前の色絵鳥形合子の出土例がある（秋田県教育委員会 2024『秋田県文化財調査報告書 532 久保田城跡 あきた芸術劇場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』第２分冊第 60 図９、60 頁）。

5　有田町教育委員会 2002『幸平遺跡』210-215 頁

6　赤松俊秀校註 1960『隔蓂記』第 1 巻 195 頁

7　岡佳子 2019「解題 『平田職直日記』茶の湯関係記事』について」『仁清　金と銀』西田宏子・岡佳子監修 淡交社。該当記事は 173・174 頁掲載。

8　酒井巖 編・解説 1968『伊達綱村茶会記』酒井忞い 中央公論事業出版　425・491 頁

9　千宗室ほか編 1958『茶道古典全集』第５巻、淡交新社、223 頁

10 注６前掲書第３巻　580 頁

参考文献

戸栗美術館 1997『初期伊万里―蔵品選集―』
千葉そごう美術館 1998『千葉そごう美術館開館５周年記念　肥後五十四万石・細川家伝来　永青文庫茶道名品展』
茶道資料館 1998『特別展　交趾香合―福建省出土遺物と日本の伝世品―』
矢部良明・竹内順一・伊藤嘉章編 1999『やきもの名鑑２　桃山の茶陶』講談社
岡佳子 2003『窯別ガイド　日本のやきもの　京都』淡交社
善田のぶ代 2020「祥瑞の分類と特徴」『古染付と祥瑞 その受容の様相』淡交社
佐賀県立九州陶磁文化館 2025『初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―』
五島美術館 2025『古染付と祥瑞―愛しの青―』淡交社

『山本神右衛門重澄年譜』の再検討

芳野貴典

１．はじめに

寛永 14 年（1637）佐賀藩により断行された伊万里・有田の窯場整理は肥前陶磁史における最大の画期であった。山林保護を名目に日本人陶工 826 名を追放、さらに伊万里・有田の窯場 11 ヶ所を廃し有田の 13 ヶ所に集約したもので、低い技術を淘汰し磁器生産の保護・育成を目指したものと評価される（大橋 2025）。これ以降有田の窯業は藩にとって重要な産業と位置付けられ管理・統制が進められ、のちの有田皿山体制が築かれる契機となったのである[1]。

本事件に関する根拠史料は、窯場整理の現場責任者でありのちに初代有田皿屋代官を務める山本重澄（1590 ～ 1669）の伝記『山本神右衛門重澄年譜』（以下、『年譜』）である。正式な書名を『山本神右衛門重澄　法名孝白善忠年譜』という。他にも有田皿屋の起源をめぐる言説や運上銀取立て、正保４年窯場整理など窯業に関係する記事が含まれている。渦中の人物にしか知り得ない情報が記され、通常の行政文書・記録には見られないようなリアリティに満ちた叙述が特徴である。17 世紀前半の窯業に関する史料は僅かであるため、前後のいきさつを含めて全体像を詳細に描いた『年譜』は基本的かつ最重要の史料といえる。

２．先行研究

『年譜』の文献史的な検討は（池田　1986）、（小宮　2005；2006）によってなされている。いずれも翻刻に伴う解題である。池田は「右は神右衛門隠居仕り候迄、御奉公の荒増、覚書等相改め、一冊に書き集め置き候成」の一節を根拠に『年譜』は重澄が書き残した覚書等に基づいて編まれたと指摘した。『葉隠聞書』関連の史料翻刻を収録した『佐賀県近世史料』第８編は第１巻に『年譜』を、第２巻に『山本神右衛門覚書』（以下、『覚書』）を収録し、小宮は『覚書』が『年譜』を作成する際の資料になった可能性を指摘した（小宮　2006）。

『年譜』に拠って寛永期前後の窯業を論じたものには（有田町史編纂委員会編　1985a；1985b）、（大橋　2001；大橋　2025）など多数あるが、本格的に取り上げたものとして（大橋 1983）、（前山　1986）、（鈴田　1999）、（村上　2023）が挙げられる。大橋は磁器草創期における砂目積み溝縁皿生産の年代を推定するにあたり、佐賀藩が窯場整理を行なった寛永 14 年頃を有力な下限として提示した。前山は寛永 14 年窯場整理前後に重澄が果たした役割に注目し、彼の行政官僚としての手腕を多久家文書などから傍証した。鈴田は製品の編年と『年譜』の記事とを組み合わせて重澄時代の窯業の変遷を明らかにしている。村上は重澄こそが有田皿屋体制の確立者とし、その先見性と実行力を高く評価する。窯場整理は藩主を欺いてまで実現した

磁器生産の基礎固めであり、その後に打ち出した運上銀増収案は将来的な海外輸出も視野に入れ、色絵の誕生による量から質への転換を最大限利用したプランと見ている。

陶磁史研究ではすでに手垢の付いた感のある本史料だが、そこに記された事象の歴史的背景や登場人物に関する説明は必ずしも十分ではない。本稿ではまず『年譜』の史料論的検討を行ない、記事の背景というべき重澄の経歴や寛永期佐賀藩財政を確認した上で、他の史料と照らし合わせながら窯業に関する記事を読んでいきたい。

３．史料論的検討

『年譜』の成立は宝永４年（1707）である。正確には、重澄の子、常朝が女婿の吉三郎に「先祖の忠義に思いを馳せれば自らの奉公の励みになるだろうから折々熟覧するように」と与えたのが同年 11 月であり、いわば成立の下限である。編纂にあたっては「覚書等見改、偖又、常々之咄承覚候事共書記候」すなわち「覚書」など残された文字資料を参照するとともに重澄存命中に聞いた話を盛り込んだという。重澄は常朝が 11 歳の時に亡くなっており、『年譜』成立までに 40 年の開きがあって「常々之咄承覚候事」に基づく記事はさほど多くないと考えられる。もとは「覚書」以外にも重澄の事績を記した多くの書類があったが虫損や廃棄、紛失により書き漏らしが生じてしまったことを跋文で悔いている。

この「覚書」に該当すると考えられるのが『山本神右衛門覚書』（以下、『覚書』）である。近代の写本のみが伝わり（写真１、２）、原本は所在不明である。末尾には万治元年（1658）10 月 1 日の日付が入り、小宮が指摘するとおり 69 歳で隠居するのを機に書いたと推察される（小宮 2006）。『年譜』では主語が「神右衛門」であるの対し、『覚書』のそれは「某」である。また『年譜』は重澄隠居後、臨終の様子までが記されている一方、『覚書』は明暦２年（1656）

写真１『山本神右衛門覚書』
（福岡市博物館所蔵）表紙

写真２　同左　有田皿屋に関する部分

９月 25 日御作事御普請方を免ぜられたところで終わっている。

『年譜』のうち明暦２年までの記事は大部分が『覚書』に基づいている。寛永 14 年～正保４年にかけての窯業関連の段もほぼ『覚書』からの引用であり、文章が多少前後したり細かい字句の違いはあるものの、事実関係に関わるような大きな齟齬はない。したがって、『年譜』の窯業関連の記事は事象が起きた時点からさほど時間的懸隔のない同時代性の高いテキストなのである。内容がほぼ同じである以上、常朝の編集・校正により整理された文章で、すでに典拠として定着している『年譜』のほうが参照・引用する上での利便性は高い。

４．背景

（１）山本重澄の経歴と手腕

寛永 14 年以降の佐賀藩による窯業改革において上層部は入れ替わってもなお重澄が現場責任者であり続けた理由は、先学も指摘するとおりその手腕への期待があったためと思われる。江戸前期の行政官僚制は属人主義の傾向が強く、人に職が従属するかたちをとった（藤井 2023）。ある人物の能力や適性に応じて役職が設けられた例は枚挙にいとまがない。

重澄の藩行財政への関与は 35 歳、寛永元年（1624）に始まる。幕府が課した大坂城普請で二百人頭を命じられた。同５年（1628）再び同じ役職に就いている。普請は重澄の得意分野であったらしく承応元年（1652）勝茂・光茂の領内巡視に当たって小荷駄の差配とともに郷普請の監督を任されており（佐賀県立図書館編 1974）、同４年（1655）には佐賀城はじめ領内一円の普請を命じられた。

有田と関りを持った契機は同 12 年（1635）「西目山津辺迄一通り之横目」となったことである。主たる任務は有田・伊万里・川古郷（現・武雄市若木町）の開墾事業で、有田大木村在勤であった。父中野清明が「伊万里代官西目一通之心遣、境目之おさへ」として伊万里桃川に詰めていたことが影響しているように思われる。寛永 14 年窯場整理はその所管事項である山林管理の一環で始まった。

西目の一通りを監督するという広い職掌柄、直後に起きた島原の乱への対応も担ったことが『山本傳左衛門常亮所蔵 御書物其外書附類（有馬一揆之節）』から分かる。

> 有馬一揆之到来御座候由、清五左衛門より西目江申越、伊万里にて承、某儀追付夜通し当地罷越候処に、御国境目々々番等申付候条、私儀、組之者召連早々罷帰、西目御番万事気遣可仕之由、作州被申聞候間、伯耆殿迄色々理り申候へ共不罷成、西目之様罷戻り候。爰許風与之儀も御座候てはと致存、与之者之儀は当地清五左衛門尉へ申付置、有田かめ屋唐人共を番中一通り私江被相付可被下之段、鍋嶋玄蕃殿を以作州江申上候処に、則切手被差出候条、唐人共扨又伊万里・有田中之者にて所々番相澄申候。・・・（佐賀県立図

書館編 2006)

乱発生の報を受けて組の者を連れて現地へ馳せ参じたが、西目の警備を命じられ「有田かめ屋唐人共」すなわち有田皿屋の朝鮮人陶工たちを動員する許可を得て、伊万里・有田在住の者たちとともに各所で番をした。当時朝鮮人陶工たちが境界警備という限定的なかたちではあるが軍事動員の対象であったことは注目すべきである[2]。ただし、この件は『年譜』には見えず、むしろ素直に読めば矛盾する記事内容である。この点は今後検討すべき点である。

また、寛永 12 年（1635）牧奉行に任ぜられたことも重要な履歴である。楠久・伊万里・有田に牧を設置するなどの実績を上げ、明暦２年(1656)までの 22 年間その職を務めた。したがって、正保４年（1647）以降は有田皿屋代官との兼任であった。

〈表〉山本重澄略年表

年号	年齢（数え年）	事項
天正 18 年（1590）	１歳	８月７日佐賀蓮池で出生。父は中野神右衛門清明、母は靏田善助女。三男。幼名千松丸。
文禄元年（1592）	３歳	**中野清明、鍋島直茂に随い文禄の役に出陣。**
慶長３年（1598）	９歳	**中野清明、朝鮮半島から帰国。**
慶長８年（1603）	14 歳	鍋島勝茂の命で名を久太郎に改める。
慶長 13 年（1608）	19 歳	父に同行し駿府城普請に加わる。父が遠州浜松で小川右馬允を討ち親子共々神埼郡渡瀬村に蟄居を命じられる。
慶長 16 年（1611）	22 歳	秀半右衛門を討つため父や兄と共に肥後に赴く。
慶長 17 年（1612）	23 歳	多久茂辰･茂富の計らいで鍋島直茂･勝茂に謁する。山本助兵衛の養子となり蓮池から佐賀に移る。
慶長 19 年（1614）	25 歳	長子慶松（のち吉左衛門武弘）誕生
元和元年（1615）	26 歳	大坂夏の陣に参加を試みるも室津にて終戦の報に接する。鉄炮足軽組二十人を仰せつけられる。
不明	不明	**中野清明、「伊万里代官西目一通之心遣、境目之おさへ」を仰せつけられ伊万里桃川に在勤。**
元和６年（1620）	31 歳	中野清明、伊万里桃川の屋敷で死去。
元和７年（1621）	32 歳	名を伝左衛門から神右衛門に改める。
元和８年（1622）	33 歳	鉄炮物頭を仰せつけられる。
寛永元年（1624）	35 歳	大坂城普請に二百人頭として従事。
寛永５年（1628）	39 歳	再び大坂城普請に二百人頭として従事。
寛永９年（1632）	43 歳	弓物頭を仰せつけられる。
寛永 12 年（1635）	46 歳	**１月 17 日「西目山津辺迄一通り之横目」を仰せつけられ有田大木村に在勤。有田・伊万里・川古郷の開墾計画を命じられる。**
		３月４日牧奉行を仰せつけられる。楠久・伊万里・有田の三牧を設置。
寛永 14 年（1637）	48 歳	**３月 19 日伊万里・有田の日本人陶工 826 名の追放に伴い子細ある者の調査・報告を命じられる。**
		11 月 27 日息子の清五左衛門と鉄炮組・手明鑓計 65 名を連れて島原の乱に出陣、翌年１月負傷。
寛永 19 年（1642）	53 歳	勝茂の使者として唐津名護屋沖で江戸御船奉行岡田将監・大坂御舟奉行小濱光隆を接待する。進物として「新焼の御茶入弐つ」など。
寛永 20 年（1643）	54 歳	白石 10 ヶ村（地米 6,800 石余）の代官に任ぜられる。牛津川以西の百姓零落につき対策を命じられる。領内での駕籠使用を許される。
正保４年（1647）	58 歳	**皿屋運上増収計画を立て、有田皿屋代官に任ぜられる。**
慶安元年（1648）	59 歳	**１月１日から有田皿屋へ詰める**
慶安２年（1649）	60 歳	加増、現米 25 石拝領。
慶安３年（1650）	61 歳	加増､現米40石拝領｡石井兵庫代御役方を命じられ毎年の物成の目安を上げ､御遣方銀米算用を行う。
承応元年（1652）	63 歳	７月７日領内での乗物使用を許される。
承応３年（1654）	65 歳	御役方を免ぜられ有田から佐賀へ移る。
承応４年（1655）	66 歳	４月 16 日佐賀城本丸･城廻りの作事普請、海道筋･道橋の修理、長崎･深堀の修理等を命じられる。９月 25 日方々の作事普請を免ぜられる。
明暦２年（1656）	67 歳	７～８月伊万里・有田代官及び牧奉行を免ぜられる。
万治元年（1658）	69 歳	隠居を願い出て許される。家督を吉左衛門武弘に譲る。
万治２年（1659）	70 歳	末子松亀（のち山本神右衛門常朝）誕生。母は前田作右衛門女。
寛文元年（1661）	72 歳	鍋島勝茂室高源院死去に伴い落髪入道。
寛文６年（1666）	77 歳	吉左衛門武弘死去。家督は五郎左衛門常治が継ぐ。
寛文９年（1669）	80 歳	10 月 13 日東田代隠居屋敷で死去。法名孝白善忠。

『山本神右衛門重澄年譜』、『中野神右衛門清明年譜』、『山本神右衛門常朝年譜』に基づき筆者作成

佐賀藩政の形成期、行政機構が確立する以前にあって重澄が任じられた職は前任者や同僚がいるものもあったが、彼の持てる経験知や人的資源への期待から随時設置されたり職掌が定められたものが少なくない。

（２）寛永期佐賀藩の財政

『年譜』では運上銀取立について詳述した後「皿屋之儀、被成様さへ能御座候はゝ、以後迄御運上可被召上候」と重澄の所感を記す。重澄及び藩当局が当初の意図はともかく最終的に窯業、なかんずく磁器生産を有力な税源と認識するに至ったことは明らかである。重澄とともに一連の政策実行に関わった多久茂辰、諸岡彦右衛門といった人々は当時の財政政策の主導者であり、彼らが有田皿屋からの運上銀に目を付けるにいたった背景には佐賀藩の財政をめぐる課題と構造があった。

城島が指摘するとおり寛永期の佐賀藩は累積する借銀を抱えて慢性的な財政難にあった（城島 1980）。とりわけ寛永期後半には財政再建に向けた幾多の試行錯誤にもかかわらず財政が急激に悪化していたとされる。幕府から課された公儀役（慶長 15 年尾張名古屋城普請など）という外的要因に加え、旧龍造寺系家臣への対抗から支藩・親類領の創出が相次いだことによる蔵入地の縮小などの内的要因があった。

そうした状況下で勝茂が志向していたのは単なる財政再建ではなく公儀役に対応可能な体制の構築・維持であったとの指摘がある（宮脇 2024）。徳川氏への忠勤に心を砕いていた勝茂の姿勢に鑑みれば首肯すべき見解で、財政を立て直すことは目的というより手段であったのかもしれない。

財政窮乏化の中、佐賀藩が資金調達先の一つとしたのが長崎の金融市場であった。いわゆる長崎借銀である。有田皿屋代官の辞令が出た時、重澄は長崎借銀利払いのための銀 190 貫 400 目とともに、新たな借銀に係る文書を持参して長崎へ出張した帰りであった。

ただし、借銀に頼ることは弥縫策であり恒久税源の確保が必須であった。そこで一般会計である物成とは別に藩上層部が目を付けたのが小物成であった。有田皿屋からの運上銀も小物成に当たる。それは公儀料銀の主たる財源となり、その都合員数は国元諸事支配の多久茂辰と財政事務の統括者である諸岡彦右衛門のみが知り得るなど藩の機密事項として扱われた（城島 1980）。

公儀役を果たすべく様々な税源が模索されるなか、重澄らが有田皿屋の運上銀に目を付けて諸改革を打ち出したのはごく自然なことであった。

５．有田皿屋の起源をめぐる言説

有田皿屋之儀、直茂様高麗国より御帰朝の時、日本之宝に可被成と御座候て、焼物上手に仕候者頭六七人被召連、御帰朝被遊之由候。右之者共金立山に被召連（置）、焼物仕候。其後以御意、伊万里の内藤之川内へ罷移焼物仕候。（佐賀県立図書館編 2005）

寛永 14 年窯場整理の前史というべきこの一文は、有田皿屋、ひいては肥前磁器の草創を語ったものとしてつとに有名である。その端的な叙述のゆえもあって久米邦武『有田皿山創業調子』「明治十三年相調東京差越候控」はじめ近代以降の肥前陶磁史研究において重宝されてきた。

天正 18 年（1590）生まれの重澄にとって同時代ではあるが直接関与した出来事ではない。恐らく文禄・慶長の役で直茂に随い全期間従軍し、慶長・元和年間に「伊万里代官西目一通之心遣、境目之おさへ」を命じられて伊万里藤川内に隣接する桃川に居住、最後はそこで死去した父清明からの伝聞であったと思われる。『中野神右衛門清明年譜』には窯業関係の記事は一切見えないが、朝鮮人陶工が関わった肥前磁器草創期の窯は多久や武雄にもありながら、伊万里藤川内のみを挙げているのは清明由来の情報であることを暗に示しているのではないだろうか。

文禄・慶長の役後、藩祖鍋島直茂によって「日本の宝」とすべく６、７名の製陶技術を持つ人々が連れ帰られ、佐賀金立山ついで伊万里藤川内に移され窯業に従事した―。かかる記述は近世の様々な文献に登場する。

（１）『葉隠聞書』第３　享保元年（1716）頃成立

有田皿山は直茂公高麗国より御帰朝の時、日本の宝になさるべくと候て、焼物上手頭六七人召連れられ候。金立山に召置かれ、焼物仕り候。其の後伊萬里の内、藤河内山に罷移り、焼物仕り候。（栗原 1940）

（２）『葉隠聞書校補』３　安政期頃成立

有田皿山　焼物上手頭六、七人之名不詳。尤朝鮮国工政大王之孫金公之墓、妻同国金氏之女と云逆修之塔熊山に在。金立山之焼物場、今上人岳之麓より熊山辺迄処々跡遺れり。有田皿山唐人金ヶ江三兵衛、元和二年丙申年より有田皿山に移候由、承応二年同人差出書付に有。藤ノ河内は伊萬里郷山形村の字なり。爰も亦窯跡等残れり。（佐賀県立図書館編 2005）

（３）『直茂公譜附録』　享保年間（1716 ～ 1735）以後

同御帰朝の節、焼物師六、七人被召連、初は上佐嘉金立山の麓にて致焼物、中比多久藤ノ河内にて焼之、後には伊万里・有田にて右子孫の者、焼之也。（佐賀県立図書館編 1993］

（4）『直茂公譜考補』9　天保 12 年（1841）頃成立

又有田皿山は公御帰朝の時、日本の宝に可被成とありて、焼物上手にする者六、七人被召連れ御帰朝被遊、右の者共金立山に被石（召ヵ）置焼物す。其後以御意伊万里の内、藤ノ川内山へ移り焼物す。右高麗人子孫多く成、焼物するを日本人見習ふに、細工するに付伊万坐（里）・有田方々に皿屋相立、段々山切荒し申すに付て、右山横目神右衛門被仰付と。中野三代集　（佐賀県立図書館編 1993）

（5）『直茂公譜考補附録』11　天保 12 年（1841）頃成立

有田皿山は、公高麗国ゟ御帰朝之時、日本之宝に可被成と候而、焼物上手頭六、七人被召連候、金立山に被召置、焼物仕候、其後伊万里之内藤河内山江被移、焼物仕候。夫ゟ日本人見習、伊万里・有田方々江成立候由。（佐賀県立図書館編 1993）

（6）『勝茂公譜考補』4　天保 14 年（1843）頃成立

有田皿山の始りは、直茂公高麗より御帰朝の節、日本の宝になさるへくと、焼物の上手にて、頭立たるもの六、七人を召連られ、金立山へ召をかれ、此所にて焼物を焼せられけり、其後に伊萬里の内、藤ノ川内山へ御移しありて、焼物仰付られけるに・・・（佐賀県立図書館編 1994）

（1）『葉隠聞書』（通称『葉隠』）は重澄の子常朝の口述を元にした書物であるが、第３巻以降は筆録者田代陣基が常朝以外の人物に取材したり記録・文書を参照したりしたという説がある。しかし、常朝が語ったにせよ、陣基が閲読したにせよ、『年譜』に拠っていることは構成や文言の一致から明らかである。『葉隠聞書』は写本や輪読会を通じて佐賀藩士たちに盛んに読まれ、その歴史認識に大きな影響を与えた。『年譜』よりも読者層は格段に広く、近世佐賀における肥前陶磁史の基本的理解はこれによって形作られたのではないかと思う。

嘉永～安政期に枝吉神陽が『葉隠聞書』の注釈書として編んだ（２）にはいくつかの情報が追加されている。「朝鮮国工政大王之孫金公之墓」は現在も佐賀市金立町大字金立に残り佐賀市史跡に指定されている「高麗人の墓碑・逆修碑」（写真３）を指す。金立山は佐賀藩士たちが行楽に訪れる定番の地であったので、神陽も石碑の存在は把握していたであろう。「金立山之焼物場」についても同じ理由で見聞きしたことがあったと思われる。「有田皿山唐人金ヶ江三兵衛・・・」の部分は金ヶ江三兵衛が多久家に提出した文書「皿山金ヶ江三兵衛高麗より罷越候書立」に基づく。原本は確認されておらず多久家の編纂史料である『肥陽舊章録』所収の写しが知られるが、神陽が閲覧したのは佐賀本藩で所蔵していた多久家文書の写しであったと

〈写真３〉高麗人の墓碑・逆修碑　佐賀市金立町大字金立 筆者撮影

考えられる。金ヶ江三兵衛集団が多久から有田に移住した年が記された史料として現代の陶磁史研究者にはなじみ深いが、神陽は幕末段階でその重要性に気づいていたといえる。さらに注目すべきは原文書にある金ヶ江三兵衛らの有田入りの年「丙辰之年」を元和２年に、文書作成の「巳」年を承応２年に比定していることだ。文禄・慶長の役などから導き出した年次と思われるが、今日の陶磁史研究の通説的理解と一致している。

（３）は藤川内を伊万里ではなく多久市西多久町のそれとする唯一の史料である。弘化年間、多久の儒者深江順房が編んだ『丹邱邑誌』に「藤河内村大山口、天叟府君朝鮮人陶器を製せしめ玉ひしかとも、土性佳ならず、遂に止みたり」（多久古文書の村他校訂　1993）とあるなど、多久藤川内も江戸時代の多久周辺の人々には朝鮮陶工ゆかりの古窯跡が遺る場所と認識される場所であった。（３）は『年譜』或いは『葉隠聞書』に拠りながらも、在地の伝承を取り入れるかたちで別の解釈を行なったのであろう[3]。

（４）では当該記述が「中野三代集」、すなわち中野清明、山本重澄、常朝らの年譜を典拠とすることが明記されている。（３）は享保期以降、（４）～（６）は天保期に編纂された直茂、勝茂の公式年譜の附録や注釈書の一節であるが、実は本編というべき各年譜には一切載っていない。有田皿屋の起源を語る言説は重澄の『年譜』に発して、後代の藩史に関わる注釈作業を通じて公式化されていった。

なお、文禄・慶長の役後日本にやってきた朝鮮陶工らが金立山→伊万里藤川内→有田へと移ったという言説は、安永２年（1773）家永正右衛門子孫が先祖の功績を述べた文書（『皿山代官旧記覚書』所収「安永弐巳年日記」「乍恐御詫言申上口上覚」）にも見える。

> きんもふ山へ罷在候唐人焼物上手に而候条、彼唐人弟子に相付、何卒習取候様被仰付、依之、彼地罷越習い浮、焼立候陶器被御上覧候末、右三人之唐人召連れ、佐嘉金立山に皿山相立候様蒙仰出、帰国仕候。右唐人小関忠兵衛又六と申者共に而御座候。乍然、金

立山近辺に宜土床無御座、松浦郡いまり藤野川内に相移り、皿山相立居候処、右唐人共は御暇申乞、本国へ罷帰候。（池田史郎編 1966）

日本に連れてこられた朝鮮陶工の数が『年譜』では６、７人であるのに対し本史料では３人、そのうち一人の名前を「小関忠兵衛」としている。佐賀金立山から伊万里藤川内へ移った理由は『年譜』には何ら書かれていないが、「良質な原料がなかったため」と明言する。さらに、藤川内にいた朝鮮陶工が最終的に帰国したなど、『年譜』とは明らかに異なる独自情報を含んでいる。

ただし、基本的な構成は同じであり、『年譜』や『葉隠聞書』に家永家の伝承（もちろん口頭のみならず文書・記録による伝承も含む）が加わった可能性は否定できない。18 世紀後半までに家永家が『年譜』を参照し得たかというと疑問は残るが、『葉隠聞書』には何らかの形でアクセスすることができたかもしれない。

６．寛永 14 年の窯場整理

右高麗人子孫多罷成、焼物仕候を日本人見習申候て、細工仕付、伊万里・有田方々ちりちりに皿屋相立罷有、山切荒し申候付て、右山横目被仰付候、請役に付、於御前神右衛門として致披露、被聞召上、唐人筋之外焼物仕候日本人可被召払由、寛永十四年丑の三月十九日、美作殿へ被仰渡候。神右衛門有田へ罷有候条、立入相究、日本人之内、子細有之者は其断承届御前へ申上、美作殿切手にて残し置、其外は稠敷払申候様にと被仰付、丑の年閏三月十五日切に、男女八百弐拾六人相払申候。右の内、男五百三拾弐人、女弐百九拾四人にて御座候。其節之払帳于今手前に御座候。美作殿御存にて御座候。日本人相払申候其次而に、伊万里皿屋四ヶ所、有田皿屋之内七ヶ所、合拾壱ヶ所之皿屋、神右衛門一人之見計校量迄に而請御意、相払申候、さ候而黒牟田･岩屋川内皿屋ゟ上年木山切、上白川切、合拾三山に押寄せ焼せ申候。（佐賀県立図書館編 2005）

寛永 14 年窯場整理は重澄自身が主体的に関わった事柄であり、一般的な覚書・年譜と比べても詳細を極めている。記憶だけではなく、「払帳」などの記録が後年まで手元に保管されていたことが大きかったと思われる。

当該箇所は『勝茂公御年譜』（享保年間成立）、『勝茂公譜考補』、『直茂公譜考補』に引かれている。窯場の濫立に伴い切り荒された山を『年譜』では単に「山」とするのに対し、『勝茂公御年譜』では「御立山」としている。御立山は藩が管理収益の主体である山で、藩用或いは郷村土木用の材を供給し、かつ払い下げ用の立木を植えていた山である（佐賀県林業史編さん委員会編 1990）。窯業にも利用されていたとは思うが、『勝茂公御年譜』が編まれた享保期時点では「御立山」と認識されていたと指摘するにとどめる。山林管理を所管する山方役所は寛

永 12 年（1635）～明暦元年（1655）に設立され、重澄が任ぜられた「山横目」は山奉行、御山方役に次ぐ役職であり複数名いた（同前書）。

明暦元年（1655）までに骨格が出来上がり、江戸時代を通じて佐賀藩の基本法として機能した『鳥ノ子帳』には「西目焼物仕候山の儀、所柄見合可相渡候、むさと不切荒様念を入可申付事」（農林省編 1971）という条文がある。西目の窯場なので有田に限ったものではないが、窯業を営む以上必ずといってよいほど付きまとう山林荒廃の危機に対し、窯場整理後は法制化することで折り合いをつけたものである。

「・・・寛永十四年丑の三月十九日、美作殿へ被仰渡候」に相当すると考えられるのが「唐人・又扶持人其外焼物之儀ニ付泰盛院様より之御書出控」（『肥陽舊章録』第３巻所収）である。

覚

一　古唐人・同嫡子一職、数年居付候て罷在候者には先様焼物可差免事

一　唐人之内にも他国より参、其所に家を持候はぬ者は可相払事

一　又扶持人・徒者・町人・旅人、此者共何も焼物先様法度可可申付、但其所に居付候て罷在候者、百姓を仕可罷居と申者は、其まま召置、焼物は不仕様堅可申付事

寛永十四年三月廿日

多久美作殿（多久古文書学校編 2021）

日付が１日ずれているのは口頭と文書による伝達の差であろうか。『年譜』では事情のある者を除く日本人陶工が追放されたとしか述べられていないが、本史料からは朝鮮半島出身者であっても領外から新たに来た者は窯業に従事することが許されなかったことが分かる。

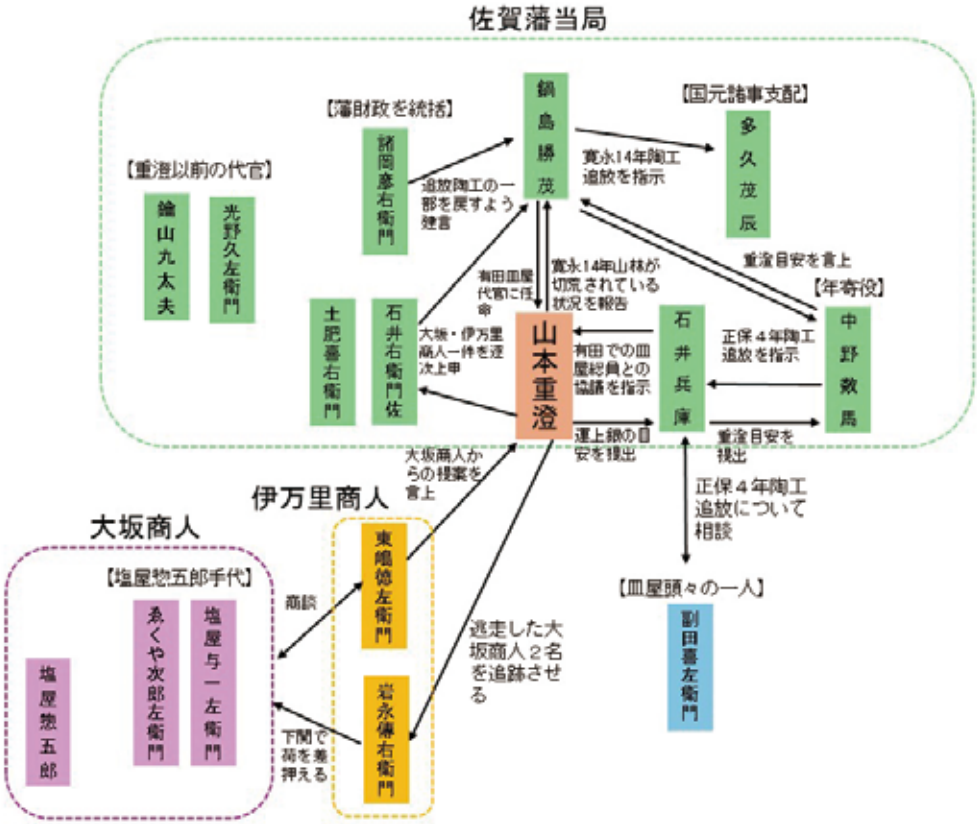
一方、追放の対象から外れた日本人がどういう人々であったかについては多久茂辰・諸岡彦右衛門宛鍋島勝茂書状（寛永 14 年カ６月９日付）によって推測し得る。

・・・焼物師両人指免候にと、紀伊守ゟ申候付而、今度我等手形遣候。此中如申渡候。焼物師多候へは山あれ候条、弥堅可被申付候。先様、我等以墨付、可指免候条、其心得可被申候。・・・（佐賀県立図書館編 1965）

勝茂の長男で小城藩主の鍋島元茂から陶工２名の活動を許可するよう願いがあった。これを受けて勝茂は窯場整理の政策責任者である多久茂辰と財政部門を所掌する諸岡彦右衛門に対し「陶工が増えると山が荒れてしまう点はきつく言い含め今回は我々が保証して許可を与える」と述べている。２名の陶工は元茂の庇護下にあった者で、日本人ではない可能性もあるが、恐らく被官として召し抱えられていた人々であろう。支藩の藩主や親類、親類同格など大身家臣らと関係の深い陶工を追放対象から除外する動きがあった可能性が指摘できる。

前出の家永正右衛門子孫提出の文書にも追放除外に関するくだりがある。

美作守様高麗御帰陣之砌、御連越之唐人御伽仕居候を、御暇被下候末、南京上手に焼物御



〈図〉山本重澄を中心とした人物関係図

仕立候に付而、右高麗人ゟ日本人相払被下候はは、一手に而釜焼仕度旨御願申上候に付、日本人釜焼職不相叶、依之、正エ門へは右由緒を以、美作守様ゟ御免状其節之御代官山本甚右エ門殿迄被差出候由に而、右御免状写正エ門へは被相渡置候由に而、代々右写書相譲置申候。(池田史郎編 1966)

「美作守様」とあるのは長門守の誤りで多久茂辰の祖父、安順を指す。安順の「御伽」であった朝鮮人陶工が磁器生産を独占しようと日本人陶工追放を藩当局に働きかけたが、正右衛門に関しては「由緒」を理由に多久家から重澄に「御免状」が出されたという。これは『年譜』の「神右衛門有田へ罷有候条、立入相究、日本人之内、子細有之者は其断承届御前へ申上、美作殿切手にて残し置・・・」に対応する。「由緒」とは、この前段に載る、正右衛門が磁器原料となる土を求めて伊万里藤川内から各地を経て有田郷小溝原に入り、直茂から末代まで窯業に励むよう言われ、ついに泉山陶石を発見して近くに白川天狗谷に窯を築いたとする伝承を指す。

大橋、村上が指摘するとおり生産独占を企てた安順「御伽」の朝鮮半島出身者とは金ヶ江三兵衛を指すと考えられるが（大橋 1983；村上 2023)、実際に三兵衛が日本人陶工の追放決定にどれほどの影響を与え得たかは疑わしい。権益を主張する文書という性質上、とりわけ競合相手に関する部分は割り引いて読む必要がある。しかし、家永正右衛門が日本人でありながら追放を免れたこと、家永家にはその際の多久茂辰免状の写しが 18 世紀後半時点で伝来してい

たことは事実であろう。『年譜』における「子細有之者」の「子細」の一つは藩当局が正統性を認める「由緒」であった。

７．運上銀増収の方策

寛永 14 年窯場整理に続き、重澄が有田皿屋の運上銀増収に奔走した様子が描かれている。これもまた当事者でないと不可能な微に入り細を穿つ書きぶりである。全体は大きく①追放された日本人陶工の引き戻しによる運上銀増加、②大坂商人の山請と未納逃走事件、③正保４年窯場整理計画と運上銀増収案、⑤重澄の皿屋代官任命の柱からなる。各段のあらましについては既に先行研究で紹介されているためここでは逐一繰り返さないが、重澄を中心とした登場人物の関係は前頁〈図〉のとおりである。

有田の磁器産業に目を付けた大坂商人２名の主人、塩屋惣五郎は当時の複数の史料に名前が登場する。慶長・元和年間に松平忠明（勝茂の子忠直及び直澄の岳父に当たる）が大坂藩主として都市建設を進めていた時期まで上荷船・茶船（大坂市中の水運を独占）を支配し運上銀を納めるかなり有力な商人であり（日本海事史学会　編　1969)、寛永６年大坂常安町水帳には表６間・裏行 26 間の店を構えていたことが記されている（作道　1968)。

彼らと伊万里の東嶋徳左衛門に有田皿屋を山請させて寛永 19、20 両年は運上銀として銀 20 貫目を納めさせたが、恐らく翌正保元年（1644)、大坂商人２名が大損失を出して運上銀未納のまま遁走したため伊万里商人の岩永伝右衛門を派遣して下関で荷を差し押さえる追跡劇が展開された。東嶋ではなく岩永が派遣されたのは当事者ではなかったこと、また推測の域は出ないが伊万里港と下関等を結ぶ海運に明るかったことによるものと思われる。かかるトラブルは発生したものの、その後も大坂商人らが引き続き年間 35 貫目で３年にわたり山請し、生産は順調に伸び、税収も増えていった。

しかし、その弊害で再び山林が切り荒されたことを受けて、正保４年（1647）第二次窯場整理と呼ぶべき計画が持ち上がる。寛永 14 年窯場整理の政策責任者であった多久茂辰は前年に罷免されており、今回は中野数馬が勝茂の意向を踏まえて指示を出し、石井兵庫が重澄のいわば上役として指揮を執った（重澄は兵庫の「副人」)。正保３年 10 月 29 日付で石井兵庫が中野良純（『年譜』では杢之助）に宛てた「山方一通」は「御立山西東帳二品」から始まる山方関係文書の一覧であるが、その中に「有田皿屋御書物壱ツ　口上」が含まれている。すでに前年には山林管理が懸案となっていた可能性がある。

窯場を削減しない代わりに運上銀を増やす重澄の案は、窯焼たちへの説明と藩重臣の説得を経て実現した。当時の窯焼 155 軒のうち半数の 75 名が増銀を受入れ連判状に署名したとされる。逆を言えば半数は廃業したわけで、皿屋全体に課せられる運上銀は増えたのに窯が減り、残っ

た窯焼たちにとっては著しい負担増であったはずである。しかるに『年譜』はこの点に触れていない。また、寛永 14 年窯場整理では小城藩お抱えの焼物師や家永正右衛門のように残留を図る者がいた状況がうかがえたが、正保４年の場合は残留するか否か自ら選択できた点が大きく異なる。

正保４年 12 月 24 日深夜、重澄は長崎借銀の利払いと新規借用の任務を終えて佐賀に戻る途次、矢上（現・長崎市矢上町）で有田皿屋代官の辞令を受け取った。併せて皿屋から年に銀 68 貫目を徴収する増銀案の実行が指示された。

とはいえ、最初から有田皿屋代官の仕事に専念できたわけではなかった。赴任のため有田へ向かう途中、伊万里で豊後国岡藩主中川久盛を接待するよう急遽命じられたのはその一例である。久盛は唐津藩主寺沢堅高自害に伴う寺沢家改易を受けて唐津城番に任ぜられ唐津へ向かっていた。似た例では、寛永 19 年幕府から派遣された江戸船奉行岡田将監と大阪船奉行小浜光隆（『年譜』では「大濱民部」）に名護屋沖の船上で応対している[4]。この時重澄は岡田に対し島原の乱で負った傷が元で耳が遠いと釈明しており、運上銀増収案をめぐっての難しい調整や初代有田皿屋代官としての仕事には身体の不自由を抱えながら臨んでいたことになる。

また、「有田へ金山御座候時は頭人被仰付、金山・皿屋両様かけ申候て、何程心遣仕候事」とあるように、皿屋と同じように意を用いたのが金山の管理・監督であった[5]。年不明石井兵庫宛中野良純書状に「山本神右衛門ゟ先日金山砂金指越被申候・・・、金山の砂金、江戸に而両替仕候、山かねは十当にかへ申候。堀場砂金は十三当にかへ申候。此段も山神右方へ御噂奉頼候」（佐賀県立図書館編 1978）とあり、重澄が採掘した金は江戸で両替えされていた模様である。

さらに「其外にも、本は入不申候而、伊万里･有田に而神右衛門心遣迄に而、都合大分の銀子、外に米六百八拾七石余相納り申事候」とされ、有田皿屋の運上銀以外にも重澄が所管すべき税目があった。承応２年（1653）『万小物成算用帳』によると「杵島郡之内伊万里有田 田畠屋敷百五拾町四段四畝拾三歩 地米五百九拾石壱升六合」、「伊万里町酒屋請 銀六百五拾目」、「楠久有田牧駒代」が重澄の徴収した諸税であった。

重澄の増銀目標はすでに有田皿屋代官就任後１年目には達成され、慶安元年（1648）は 77 貫 688 匁と予定を上回る運上銀を徴収することに成功した。当然のことながら、生産量を増やすだけではなく市場への流通を円滑化することで実現を図ったはずであるが、『年譜』ではそのあたりの具体的な方策には触れていない。寛永年間末には下地ができた有田皿屋―伊万里港―大坂市場の流通網がさらに発展していったのであろう。

８．おわりに

『年譜』は重澄視点での叙述であるが、有田皿屋の起源や寛永 14 年窯場整理、運上銀取立などの窯業関連記事に関する限り同時代性・独自性・具体性を備えた基本史料といえる。

有田皿屋の起源をめぐる言説は『葉隠聞書』や佐賀藩の公式編纂史料に類似のものが見られるが、本稿で確認したとおり全てが『年譜』を引いた、いわば重澄発の言説であった。これが近代以降の陶磁史研究にも大きな影響を与えている。

従来、寛永 14 年窯場整理の追放対象は日本人陶工とひとまとめにすることが多かったが、日本人であっても大身家臣と関係の深い人々や無視できない「由緒」を持つ人々は追放を免れ、逆に朝鮮半島出身者でも領外からの新規参入は許されなかったことが他の史料から分かる。

約 10 年後に第二次窯場整理計画が持ち上がった際、重澄が打ち出した運上銀増収案は窯焼たちには大きな負担を強いるもので、結果として半数が廃業したように一種の賭けであった。しかし重澄自身には勝算があり藩当局内での反対を押し切って実行した。その後における磁器産業の隆盛に鑑みると、「皿屋之儀、被成様さへ能御座候はゝ、以後迄御運上可被召上候」（佐賀県立図書館編 2005）という彼の言葉は根拠なきものではなく、「神右衛門一存に而毎年過分の御所務被成、向後御為に罷成候儀、一人之儀案し工夫迄に而御座候。談合相手と候て、誰そ一人も無御座候つ・・・」（同前）との自負も決して誇大ではないのである。

注

1 17 世紀中ごろまでの史料では「皿屋」の語が用いられ、「皿山」と呼ぶようになるのは 17 世紀後半以降のことである。『年譜』でも一貫して「皿屋」の語が用いられている。

2 城島は庄屋百姓身分の「名被官」が島原の乱に動員されたことを指摘している（城島 1980）。朝鮮人陶工のなかにも金ヶ江三兵衛が多久家の被官であったように無禄ながら特定の給人と名義的な主従関係にある者が相当数いたと思われる。

3 多久藤川内周辺には大山古窯跡や保四郎窯跡があり、『丹邱邑誌』で言及されているのはこれらのことと思われる。大山古窯は 1610 年代頃まで、保四郎窯は 17 世紀後半に操業していたと推定されている（大橋 2002）。

4 当該記事は『覚書』には見えず『年譜』に載るのみ。

5 有田で金山開発が行われたのは寛永２～４年（1625 ～ 1627）が中心で、それ以後は慶安元年（1648）再び計画はされたもののすぐに止まったと考えられている（有田町史編纂委員会編 1985）。しかしながら、『年譜』の記述を信じれば重澄が「西目山津辺迄一通り之横目」を仰せつけられ有田と関わるようになった寛永 12 年以降も金の採掘が続いていたことになる。この点は今後の検討課題である。

付記

史料の引用に当たっては読みやすさを考慮して適宜漢字表記や句読点を改めた。

謝辞

本稿は令和 7 年度に佐賀県立九州陶磁文化館で開催した開館 45 周年記念特別企画展「初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―」に伴う研究成果である。資料調査や画像利用に際して御高配を賜った

所蔵者各位に厚くお礼申し上げます。

参考文献

有田町史編纂員会編 1985a『有田町史 陶業編Ⅰ』有田町
有田町史編纂委員会編 1985b『有田町史 政治・社会編 1』有田町
池田史郎編 1966『皿山代官旧記覚書』皿山代官旧記覚書刊行会
池田史郎 1986「山本神右衛門重澄年譜について」『葉隠研究』創刊号
大橋康二 1983「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について―窯詰技法よりみた―」佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集編集委員会編『佐久間重男教授退休記念 中国史・陶磁史論集』燎原
大橋康二 2001『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
大橋康二 2002「多久領の窯業」多久市史編さん委員会編『多久市史 第二巻 近世編』多久市
大橋康二 2025「肥前磁器始まりの全貌」『開館 45 周年記念特別企画展 初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―』佐賀県立九州陶磁文化館
小宮木代良 2009a「『陶祖』言説の歴史的前提」、北島万次他編『日朝交流と相克の歴史』、校倉書房
小宮木代良 2009b「『陶祖』言説の成立と展開」、九州史学会編『九州史学』153 号
小宮睦之 2005「解題」佐賀県立図書館編『佐賀県近世史料』第８編第１巻
小宮睦之 2006「解題」佐賀県立図書館編『佐賀県近世史料』第８編第２巻
佐賀県立九州陶磁文化館 2025『開館 45 周年記念特別企画展 初期伊万里ビッグバン』
佐賀県立図書館編 1965『佐賀県史料集成』第９巻
佐賀県立図書館編 1974『佐賀県史料集成』第 15 巻
佐賀県立図書館編 1978『佐賀県史料集成』第 19 巻
佐賀県立図書館編 2005『佐賀県近世史料』第８編第１巻
佐賀県立図書館編 2006『佐賀県近世史料』第８編第２巻
佐賀県林業史編さん委員会編 1990『佐賀県林業史』佐賀県
作道洋太郎 1968「細川藩の大阪蔵屋敷について」宮本又次編『大阪の研究』第２巻 清文堂出版
城島正祥 1980『佐賀藩の制度と財政』文献出版
鈴田由紀夫 1999「有田皿山代官山本神右衛門重澄時代の窯業」『葉隠研究』第 37 号
多久古文書の村他校訂 1993『丹邱邑誌』文献出版
多久古文書学校編 2021『多久古文書の村史料叢書第１冊 小城鍋島家肥陽舊章録』第１集 多久古文書の村
多久古文書学校編 2024『多久古文書の村史料叢書第１冊 小城鍋島家肥陽舊章録』第２集 多久古文書の村
長野暹 1978「佐賀藩確立期の財政構造に関する一考察」『佐賀大学経済論集』11(2)
日本海事史学会 編 1969『海事史料叢書』第３巻 成山堂書店
農林省編 1971『日本林制史資料』18 臨川書店
藤井譲治 2023『江戸時代の官僚制』法藏館
前山博 1986「山本神右衛門重澄と有田皿山」『葉隠研究』創刊号 葉隠研究会
宮脇啓 2024「公儀役と藩財政の成立―寛永期佐賀藩鍋島家を事例に―」『史学雑誌』133 巻 9 号 史学会
村上伸之 2023「17 世紀の有田における磁器の生産体制―山本神右衛門重澄の窯業改革を中心として―」大橋康二先生喜寿記念論文集編集委員会編『大橋康二先生喜寿記念論文集 陶磁器と考古学』雄山閣
芳野貴典 2025「初期伊万里の史料を読み直す―同時代史料を中心に―」『開館 45 周年記念特別企画展 初期伊万里ビッグバン』佐賀県立九州陶磁文化館

中国磁器銘の集成
—冨永コレクション・髙取家コレクション・柴田夫妻コレクション—

宮木貴史

１．はじめに

肥前磁器の高台内には、銘や銘款、底裏銘などと呼ばれる文字やマークのようなものが染付や色絵で描かれていることがある。筆者はこれまでに、佐賀県立九州陶磁文化館（以下、九州陶磁文化館）が所蔵する肥前磁器を中心としたコレクションである柴澤コレクションと柴田夫妻コレクションについて、コレクション中にみられる銘の集成と分類を行ってきた（宮木 2020、2021、2022、2023）。肥前磁器はその創始時点から中国磁器を意識した製品作りを行っており、高台内の銘も中国磁器銘を写して書き入れていることはすでに指摘されているとおりである（大橋 1988）。その影響関係を整理するため、本稿では九州陶磁文化館で所蔵する中国磁器にみられる銘の集成と分類を行う。対象はコレクション目録を公開している冨永コレクション、髙取家コレクション、柴田夫妻コレクションである[1]。

中でも冨永コレクションは、14 ～ 19 世紀の中国磁器のうち日本に輸入された製品が中心となっている。景徳鎮民窯の青花（日本磁器でいう染付）が最も多いが、福建省南部の漳州窯等の景徳鎮窯以外の製品も含む。全体で 554 件 893 点を数えるが、ここから日本磁器 9 件 31 点を除いた 545 件 862 点のうち、銘が施されたものは 111 件[2]あった。中国景徳鎮窯の青花の銘については、冨永コレクションの寄贈者である冨永樹之氏によって、国内出土品からその分類や器種との対応関係などが整理されている（冨永 1998）が、肥前磁器に影響を与えたと考えられる 16 世紀から 19 世紀までの中国磁器銘を通観できる資料として取り上げ、肥前磁器銘との関係を整理したい。また、九州陶磁文化館所蔵髙取家コレクションは、重要文化財「旧高取家住宅」を建てた髙取伊好氏や子息 九郎氏らが、邸宅内で使用・収集してきた陶磁器である。肥前の陶磁器を中心としつつ国内はもとより海外の陶磁器も含まれる。中国磁器は 143 件 298 点を数えるが、このうち銘のある磁器製品は 30 件であった。柴田夫妻コレクションは有田産の磁器を体系的に収集した一大コレクションであるが、一部（41 件 49 点）中国磁器を含んでいる。銘があるものは４件である。冨永コレクションを中心としつつ、冨永コレクションにないものやバリエーションを示すために髙取家コレクション・柴田夫妻コレクションを紹介したい。

２．銘の分類

肥前磁器銘は大きく７つに分類し細分類を行った。中国磁器銘もその内容によっていくつか

の種類に分けられる。本稿では、(A) 中国の国・年号、(B) 吉祥語、(C) 合字・異体字・不明字、(D) 草花等のマーク、(E) 所属を表すもの、(F) 生産地、制作者を表すもの、の６つに分類し、細分類していく。以下、分類ごとに年代順で紹介するが、冨永コレクションにない銘は後に送っているため年代が前後するものがある。なお、文末の（　）内は該当する作品の図版番号であり、図版として「中国磁器銘一覧」を付した。

A：中国の国・年号

A １：「大明年造」　中国明王朝（1368 ～ 1644）の国号を表すもの。冨永コレクション中ではいずれも二重圏線を伴う。(001、004 他)

A ２：「正徳年製」　中国の明王朝の年号「正徳」(1506 ～ 1521）を表すもの。002 は瓶の高台内で二重圏線を伴う。

A ３：「大明宣徳年造」　中国明王朝の「宣徳」(1426 ～ 1435）を表すもの。中国磁器に多い３字２行形の年号銘は、宣徳年間に官窯製品に書き入れたことが始まりとみられる（佐久間 1976)。ただし､当該期のものは「大明宣徳年“製”」であり､｢年“造”」銘は嘉靖期末に始まったと考えられている（中沢・長谷川 1995)。(006)

A ４：「大明成化年製」　中国の明王朝の年号「成化」(1465 ～ 1487）を表すもの。冨永コレクション中最も多い 15 件で確認できたが、いずれも A ３同様に当該時期の製品にならって書き入れたものである。冨永コレクション中では一重ないし二重の圏線を伴うものがほとんどである。(014、030 他)

A ５：「大明洪武年造」　中国の明王朝の年号「洪武」(1368 ～ 1398）を表すもの。洪武帝は明朝初代皇帝であり、当該期の製品に確実な年号銘の資料は確認されていない。宣徳期以降にみられる３字２行形の銘であり、さらに「製」を「造」に変えている。(020)

A ６:「洪武年造」　A ５と同じく中国の明王朝の年号「洪武」を表すもの。後代の模倣銘である。(021)

A ７：「大明萬暦年製」　中国明王朝の「萬暦」(1573 ～ 1619）を表すもの。033 は圏線なく崩れた書体だが、125 は二重圏線を伴う綺麗な楷書で描かれている。126 は、清代に多い２字３行形である。

A ８：「大清雍正年製」　中国清王朝の「雍正」(1723 ～ 1735）を表すもの。清朝時代の青花でも３字２行形の年号銘が用いられた。(074)

A ９：「大清乾隆年製」　中国清王朝の「乾隆」(1736 ～ 1795）を表すもので、篆書体による２字３行形の年号銘。清朝磁器における年号銘はこの形態をとるものが多い。髙取家コレクションの 129 には陰刻でこの銘が記されている。単釉資料には陰刻や陽刻による銘も多い。(099、

103 他)

A10 :「大清嘉慶年製」　中国清王朝の「嘉慶」(1796 ～ 1820) を表す篆書体の２字３行形銘。書体の綺麗な 139 に比べ、082 や 117 は書体が大分崩れている。

A11 :「嘉慶年製」　中国清王朝の「嘉慶」を表す篆書体の２字３行形銘から「大清」が省略されたもの。(115)

A12 :「大清道光年製」　中国清王朝の「道光」(1820 ～ 1850) を表す篆書体の２字３行形銘。比較的丁寧な 092 と、少し丸文字風な 108 がある。

A13 :「道光年製」　中国清王朝の「道光」を表す２字２行形の楷書体銘。(102)

A14 :「大明宣徳年製」　中国明王朝の「宣徳」を表す「年製」銘。(120)

A15 :「大清康熙年製」　中国清王朝の「康熙」(1662 ～ 1722) を表す。122 は３字２行形だが、131 は２字３行形。いずれも楷書体である。

A16 :「成化年製」　中国の明王朝の年号「成化」を表す６文字銘から「大明」を省略したもの。(132)

A17 :「康熙年製」　中国の清王朝の「康熙」を表す６文字銘から「大清」を省略したもの。A14 と同じく楷書体である。(142、148)

B : 吉祥語

B １ :「長命冨貴」　健康長寿と冨を願う文句。005 は中央に□を置き十字に配した銭貨形態をとる。

B ２ :「永保長春」　人生の良い時期が長く続くことを願う文句か。007 は銭貨形態、024 は２字２行形銘である。

B ３ :「萬福攸同」　たくさんの幸福があることを願う文句。中国磁器銘には多い。たいてい２字２行形をとる。(008、012)

B ４ :「玉堂佳器」　器を賛辞する吉祥の文句。中国磁器銘には多い。(009)

B ５ :「福」　幸福を願う文字。角枠を伴う例と伴わない例がある。ちなみに 027 の表面に付着しているものはモミガラ痕である。(010、027)

B ６ :「福（×)」　福字銘の内、「田」の内側が「×」になっているものを分けた。(041、047 他)

B ７ :「寿」　長寿を願う文字。(022)

B ８ :「天禄富貴佳器」　B12 (冨貴佳器) の頭に「天禄」を付けたもの。３字２行形をとる。(035)

B ９ :「福 (米)」　福の「田」の部分が「※」のようになっているものと考えられる銘。いずれも二重か三重の角枠を伴う。(037、060 他)

B10 :「寅生佳製」　他に類例を知らないが、虎年に作られた佳い器という意味か。(038)

B11：「長春佳器」 器を賛辞する吉祥の文句。(052)

B12：「冨貴佳器」 器を賛辞する吉祥の文句。中国磁器銘には多い。055 は角枠を伴わないが、角枠を伴う形態のものがＣ２などに崩れていく。

B13：「美玉雅製」 器を賛辞する吉祥の文句。実例は他にみていないが、複数の書籍で紹介されている（耿 1984、朱 2018、童 1984）(066)

B14：「正玉」 器を賛辞する吉祥の文句。(090)

B15：「盛玉」 器を賛辞する吉祥の文句。(091)

B16：「錦堂福記」 他に類例を知らない。いわゆる堂斎銘（堂名款ともいう。皇帝や文人らの居住や書斎の名を冠したもの）には「世錦堂」もあるが、「〇〇堂製」の形態ではないため、Ｂ４に合わせて吉祥語とした。(094)

B17：「生生生生」「生」を４つ書き入れたもの。他に類例がないため、４文字銘がかなり崩れたものかもしれない。(101)

B18：「玩玉」 器を賛辞する吉祥の文句。(143)

B19：「玉」 器を賛辞する吉祥の文句。(144)

B20：「珍賞」 珍しい褒美となる品という意味か。「賞」がつく銘の事例は少ないが、明代白磁瓶の肩部に「賞賜」とあるものや（王 2004)、清朝磁器に「賞」一文字の例が紹介されている(朱 2018)。(146)

B21:「中華珍品」「中華」の文字がいつから使用されているのか不明だが、磁器銘には少ない。他に「中華共和元年」と描かれたものが紹介されている(朱 2018 p174)。意味としては中国(製)の珍しいもの、という器を賛辞する文句の一種。(147、149)

Ｃ：合字・異体字・不明字

Ｃ１：「不明字１」 一重角枠内に文字のようなものが書かれたもの。中央縦に１～２本の線が入り、区画されているようにもみえる。右側が「青」にみえるものもあるが、Ｃ２（冨貴佳器）の崩れではないかと思われる。(003、013 他)

Ｃ２：「冨貴佳器」 一重ないし二重の角枠内に２字２行形で「冨貴佳器」の４文字を書き入れたものと考えられる。011 では右側の「冨」や「貴」、左側の「器」が辛うじて分かる。(011、015 他)

Ｃ３：「冨ヵ」 Ｂ６のような「田」の内側が「×」になっているものから「冨」だけを抜き出したものか。(016)

Ｃ４：「不明字２（福ヵ)」 Ｂ６の省略形だろう。(017、018 他)

Ｃ５：「不明字３（佳器ヵ)」 一重角枠内に「犀」のようにもみえる判読不明の文字をいれた

もの。C ２との比較から「佳器」ないし「佳」の部分だけを抜き出したものと考えている。(025、026 他)

C ６ :「不明字４」　二重角枠内の左には「示」偏を、右には「U」と「十」を組み合わせたような字を入れたもの。かなり崩れて省略されているが、原形は「福」であろう。(032)

C ７ :「不明字５」　一重角枠内に縦長の文字が３つ入ったようにみえる判読不明のもの。冨永氏が「精製」と分類したものの一種だろう（冨永 1998)。(036)

C ８:「不明字６」　一重角枠を中央で区分けし、左に縦一本線、右に格子状に直線を入れたもの。062 は右が梯子のようにみえるが、141 は「隹」のようにみえる。原型不明だが、C ４からの変形ではないだろうか。(062、129)

C ９:「王偏ヵ」　原型不明だが、「王偏」だけを抜き出したもののようにみえる。あるいは「玉」一文字か。(063)

C10 :「不明字７」　二重角枠に入る原型不明の文字。「示」偏に「舌」のようにみえる。(067)

C11 :「木 + 青」　二重角枠に入る不明な文字。「木」の篆書体と「青」が組み合わされているようにみえる。(073)

C12:「不明字８」　一重角枠に入る原型不明の文字。中央に縦線が入り、左には「木」の篆書体、右には「兀」を上下に反転させて配置したようにみえる。(076)

C13 :「不明字９」　二重角枠に入る原型不明の文字。「描」のようにもみえるが、右は「木」の篆書体風である。(084)

C14 :「不明字 10」　二重角枠を中央に区画線を入れ、判読不明の文字の崩れを入れたもの。左は「示」偏の省略形か。「福」の崩れと想定する。(093)

C15 :「不明字 11」　角印の印章のように配置されたもので、これは清王朝の２字３行形篆書体銘がくずれたもの。中央上の「咸」が辛うじて読めることから「大清咸豊年製」(「咸豊」＝1851 ～ 1861）が崩れたものと考えられる。(095)

C16 :「不明字 12」　C14 同様２字３行形篆書体銘の崩れ。こちらは判読不能。(096)

C17 :「不明字 13」　印章形の年号銘崩れ。中央２字の書き方から「大清乾隆年製」の崩れ銘と考えられる。(097)

C18:「不明字 14」　印章形の年号銘崩れ。これは２字２行形で元は「大清年製」であろう。(098)

C19 :「不明字 15」　判読不能の崩れ字。二重角枠に縦線が２～３本あるようにみえるが、右端は線が途切れている。福字銘の崩れか。(100)

C20 :「不明字 16」　判読不能の印章形銘。「大清年製」の崩れか。(106)

C21:「不明字 17」　判読不能の印章形銘。中央縦の書き方から「大清乾隆年製」を想定する。(107)

C22 :「不明字 18」　一重角枠に「リカ」とみえる文字を入れたもの。(110)

C23:「不明字 19」 判読不能の印章形銘。２字３行形銘の崩れだろう。(112)

C24:「不明字 20」 一重角枠に縦線を３本入れたもの。(116)

C25:「不明字 21」 一重角枠の中央を縦線で区分けし、左に「示」偏にみえるものを、右に「木」の篆書体にみえるものを入れた銘。(131A、132)

C26:「不明字 22」 一重角枠の中央を縦線で区分けし、左に「示」偏にみえるものを、右に縦線１本と横線２線を入れた銘。(131B)

C27:「不明字 23」 一重角枠の中央を縦線で区分けし、左に「示」偏にみえるものを、右に縦線２本を入れた銘。(133)

C28:「不明字 24」 印章形の４文字ないし３文字銘が崩れたと考えられるもの。(136)

C29:「不明字 25」 判読不能の印章形銘だが、「大清乾隆年製」の崩れだろう。(145)

D：虫・草花等のマーク

Ｄ１:「葉」 木の葉を描いたもの。「八宝」の一つとして描かれたものか。(056)

Ｄ２:「兎」 後ろを振り向く兎を描いたもの。(057、071 他)

Ｄ３:「卍」 二重角枠内に「卍」のような文様を入れたもの。(040)

Ｄ４:「鼎」「鼎」は本来三足付きの鍋だが、祭器として扱われた。銘としては宝文様の一つとして描かれたものだろう。(061、085)

Ｄ５:「双魚」 ２匹の魚が寄り添った双魚文は八吉祥の一つ。(064、065 他)

Ｄ６:「四方襷文」 四方襷文は本来、複数の平行斜線による連続文様だが、そこに生じる四角形ないし菱形の一区画を抜き出したようにみえるものをＤ６とした。Ｄ９とした 079 の中央に似た表現がある。(075、087)

Ｄ７:「印章形１」 角枠にマークのようなものを入れた銘を印章形とした。Ｄ７は二重角枠に笠のようにみえるものや、渦巻きがみえる。角枠内に宝文様を４つ並べて表現したと考えている。(068)

Ｄ８:「印章形２」 二重角枠に隠れ蓑や車輪のような文様がみえるものを分けた。077 でいえば右上が隠れ蓑（ないし白蓋か)、左上が車輪（法輪)、左下が七宝か方勝にみえる。右下の渦巻きは何を表しているかわからないが、宝文の一種とすれば宝珠か。(077、088)

Ｄ９:「印章形３」 二重角枠に笠や車輪のような文様があり、余白を斜線で埋めたもの。配置は違うが、078 と 079 どちらも笠が２つに車輪と渦巻きという組み合わせは共通している。

D10:「印章形４」 Ｄ９から渦巻きだけが残り、斜線が強調されたようなもの。斜線は網代状になっている。(080)

D11:「印章形５」 D10 と同じく宝文が省略され、斜線が強調された形態のもの。D10 との違い

は左下の渦巻きの対角である右上に二重か三重の円文があること。081 の方は左上の笠も表現されており、比較的宝文の状態を残している。(081、083)

D12:「草花文」　草花を描いたもの。(086)

D13:「文字風１（宝文ヵ)」　２字２行風に何かを並べて表現したもの。D ７などの印章形とは違い、角枠を伴わない。左上の葉がなびいているような表現のものが特徴的で、これに類すると思われるものを分けた。４つとも下部には「人」字のような表現があるが、宝文にある組紐を表したものとすれば、いずれも宝文と考えられる。ただ、左上以外は巻軸のようにもみえるが何を表したものか判然としない。(105A、111A)

D14:「文字風２」　何かの文字を４つ並べたようにみえる。105B 左上の眼鏡のような表現が特徴的だが、111C に至っては「丙」のようにもみえる。(105B、111B・C)

D15:「桃＋蝙蝠」　桃と蝙蝠を組み合わせたもの。桃は寿、蝙蝠は福を意味するため、この組み合わせによって福寿を表し、吉祥文様となる。冨永コレクションの 109 や 113 だけでは判別しにくかったが、髙取家コレクションの 135 を見ると明らかである。

D16:「盤長」　仏教にまつわる八吉祥の一つ。(114)

D17:「文字風３」　何かの文字の崩れを４つ並べたようにみえるが、組み物となっている他の４点は D13 等に分類できるため、これも宝文の崩れだろうか。(134B)

E：所属を表すもの

E １:「内府」　宮廷用の製品であることを示す文字銘。このような官庁用製品であることを示す文字は、年号銘が確立する明代以前からあり、高台内に限らず、瓶では体部側面に描かれることも多い。(089)

F：制作者を表すもの

F １:「林長茂造」　篆書体で「林長茂造」と読めるもの[3]。所蔵（つまり注文主）を表す堂斎銘は「〇〇堂製」の形態をとることが多いため、「造」を用いた F １は制作者と捉えた[4]。中国磁器における制作者を表す銘の事例自体少なく、F １の類例は他に知らない。(140)

３．中国磁器銘と肥前磁器銘

（１）中国磁器銘の消長

今回、対象としたコレクション内から 86 種類の中国磁器銘が確認できた。この 86 種類を表１にまとめる。分類毎では、A 類 17 種類、B 類 21 種類、C 類 29 種類、D 類 17 種類、F・E 類は１種類ずつとなっている。

表１　中国磁器銘の消長（冨永・柴田夫妻・髙取家コレクション）

分類	16 世紀			17 世紀			18 世紀			19 世紀			20 世紀	銘	点数
A　1	■	■	■	■	■									大明年造	4
A　2	■													正徳年製	1
A　3		■	■											大明宣徳年造	1
A　4		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		大明成化年製	18
A　5		■	■											大明洪武年造	1
A　6		■	■											洪武年造	1
A　7			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	大明萬暦年製	3
A　8							■	■	■					大清雍正年製	1
A　9								■	■	■				大清乾隆年製	7
A　10							■	■	■	■	■	■		大清嘉慶年製	3
A　11										■	■			嘉慶年製	1
A　12										■	■			大清道光年製	2
A　13										■	■	■		道光年製	1
A　14							■	■	■					大明宣徳年製	1
A　15					■	■	■	■	■	■	■	■	■	大清康熙年製	2
A　16							■	■	■					成化年製	1
A　17										■	■	■	■	康熙年製	2
B　1		■	■											長命冨貴（十字）	1
B　2		■	■	■										永保長春	2
B　3		■	■	■										萬福攸同	2
B　4		■	■											玉堂佳器	1
B　5		■	■	■	■									福	2
B　6		■	■	■	■									福（×）	3
B　7		■	■	■	■									寿	1
B　8			■	■	■									天禄富貴佳器	1
B　9				■	■									福（米福）	4
B　10				■	■									寅生佳製	1
B　11		■	■	■	■									長春佳器	1
B　12			■	■	■									冨貴佳器	1
B　13					■	■	■	■						美玉雅製	1
B　14							■	■	■					正玉	1
B　15							■	■	■					盛玉	1
B　16									■					錦堂福記	1
B　17										■	■	■		生生生生	1
B　18											■	■		玩玉	1
B　19											■	■		玉	1
B　20										■	■	■		珍賞	1
B　21												■	■	中華珍品	2
C　1		■	■	■										不明字１	3
C　2		■	■	■	■									冨貴佳器	4
C　3		■	■											冨ヵ	1
C　4		■	■	■	■	■	■	■						不明字２（福ヵ）	5
C　5		■	■	■	■									不明字３（佳器ヵ）	2
C　6			■	■	■									不明字４	1
C　7			■	■										不明字５	1
C　8							■	■	■		■	■		不明字６	2
C　9					■	■	■	■						王偏ヵ	1
C　10					■	■	■	■						不明字７	1
C　11						■	■	■						木＋青	1
C　12						■	■	■						変形字８	1
C　13						■	■	■						変形字９	1
C　14									■					変形字 10	1
C　15									■	■	■	■		変形字 11（大清咸豊年製ヵ）	1
C　16									■	■	■	■		変形字 12	1
C　17									■	■				変形字 13	1
C　18									■	■				変形字 14	1
C　19									■	■	■			変形字 15	1
C　20									■					変形字 16	1
C　21										■	■	■		変形字 17	1
C　22										■	■	■		変形字 18	1
C　23									■	■	■	■		変形字 19	1
C　24							■	■	■					変形字 20	1
C　25									■					変形字 21	1
C　26									■					変形字 22	1
C　27									■					変形字 23	1
C　28									■					変形字 24	1
C　29										■	■	■		変形字 25	1

分類	16 世紀			17 世紀			18 世紀			19 世紀			20 世紀	銘	点数
D　1														マーク（葉）	1
D　2														マーク（兎）	3
D　3														マーク（卍）	1
D　4														マーク（鼎）	2
D　5														マーク（双魚）	3
D　6														マーク（四方襷）	2
D　7														マーク（印章形１）	1
D　8														マーク（印章形２）	2
D　9														マーク（印章形３）	2
D　10														マーク（印章形４）	1
D　11														マーク（印章形５）	2
D　12														マーク（草花）	1
D　13														マーク（文字風１）	1
D　14														マーク（文字風２）	1
D　15														マーク（桃＋蝙蝠）	3
D　16														マーク（盤長）	1
D　17														マーク（文字風３）	1
E　1														内府	1
F　1														林長茂造	1

C 類が最も種類が多いが、作品件数はそれぞれ１、２件がほとんどである。A 類は D 類と同数の 17 種類だが、D 類の作品件数が 28 件であるのに対し、50 件と最も多い。中でも A ４（大明成化年製）の 18 件が最多であり、A ９（大清乾隆年製）がこれに次ぐ７件である。「成化」(1465 ～ 1487) および「宣徳」(1426 ～ 1435) の磁器は、後世、明代の磁器の中で最も良いとされ(『陶説』『飲流斎説瓷』など)、明代末期から盛んに「宣徳」「成化」の年号銘が使用された。実際、冨永コレクションにおいて確認できる A ４の資料は、全て 16 世紀末～ 17 世紀前半に比定されている。清代の年号銘も、清朝初期の「康熙」(1662 ～ 1722) は後世に模倣されているが、A ９（大清乾隆年製）の数の多さに関しては、乾隆帝による約 60 年の治世によるところが大きいだろう。

明代の年号銘では３字２行形の楷書体銘が多いのに対し、清代では２字３行形の篆書体銘が多い。明代にも「永楽年製」や「宣徳年製」に篆書体銘がみられるなど、篆書体銘がないわけではないが、宣徳期に確立した年号銘の形態がほぼ変化なく引き継がれている。明代末期の萬暦期には、楷書体だが２字３行形がみられ、続く清王朝の康熙期や雍正期に多くなる。そして康熙 40 年（1701）からは篆書体銘が現れてくるという（朱 2018)。

B 類で多いのは「福」である。形態で３種類に分けているが、いずれも 16 ～ 17 世紀に収まる。18 世紀以降は「福」に代表される吉祥の文言よりも、「玩」「玉」「珍」等を用いた器を賛辞する文言が多くなる。今回対象とした資料にはなかったが、いわゆる堂斎銘も 18 世紀に種類が多くなる。

C 類にあげたものはほぼ一重ないし二重の角枠を伴うものであり、基本的には角枠内に「福」字を描く銘が省略等されていき、崩れたものが多いと考えている。その他、明代では「冨貴佳器」等の４文字吉祥語銘の崩れが、清代では６文字年号銘の崩れとみられるものが多い。

D 類に挙げたマーク銘はほぼ 18 世紀以降の資料である。明代からあるものは D １（葉）や D ２（兎）であるが、面白いことに高台内にみられる兎文はいずれも振り向いた形姿をしている。

さらに、冨永コレクションにみられる表文様に描かれる兎も、すべて振り向いている。中にはその顔の先に月が描かれているものもあるが、高台内にはそこまでの表現はない。月には兎が住み、臼で仙薬を搗くとして月と兎の組み合わせはよくあるものの、振り向いた姿に意味があるかはわからない。清代のマーク銘は、双魚（金魚）や盤長等の八吉祥や雑宝としての鼎等、基本的には宝文様を描いている。D ７～ 11 や D13 等のような銘も宝文を並べたもの、ないしその崩れと考えられる。

（２）肥前磁器銘への影響

肥前磁器は、現在の佐賀県有田町を中心とした地域において生産が開始され、その草創期段階から中国磁器を意識した製品が作られている。最初期こそ、裏文様すら描かない製品が多かったが、1630 年代以降は銘を書き入れる製品が増えていく。この時代は、中国では明王朝末期の段階であり、この頃に描かれた銘の影響を直接的に受けているものと考えられる。実際、A ４（大明成化年製）から転化した銘（「大明」「太明」「大明成」等）やＢ５（福）字銘は、初期の肥前磁器銘に多い。ただし、A １（大明年造）のような「年“造”」銘は少ない。国内の遺跡からも出土例があるように（冨永 1998）、当時から日本に輸入されていることは間違いない。同じく B 類においても、Ｂ２（永保長春）やＢ３（萬福攸同）等、中国磁器に多く国内出土資料にもみられる銘が肥前磁器にはほぼない。また、「福」字銘も中国磁器では必ずしも角枠を伴わないのに対し、肥前磁器ではほぼ角枠を伴う。実は角枠を伴う「福」字は、銘が一般化する前から肥前磁器に使用されている。最初期の肥前磁器には、中国磁器からだけではなく、『八種画譜』等の中国で出版された画譜を装飾の手本としたものが知られ、その場合「倣筆意」の文言が記された例が多い[5]。「倣筆意」の文言の下部にやや横長の二重角枠「福」字が描かれるものがあり、表文様にないものでも高台内に描かれる場合がある（写真１）。その場合でも横長の二重角枠「福」字銘である。『八種画譜』をみると、大抵角形の落款が記されており、角枠の「福」字はこれを表現したように思われる。中国磁器にしても画譜にしても、そのまま写すよりも抽出したり、デフォルメしたりしながらデザインしているため、二重角枠の「福」字装飾も、あくまで落款風のデザインとして使用していると考えられる。17 世紀中頃の資料には、直接的に『八種画譜』にみられる文言を高台内に記した事例がある（巖 2021）。筆者が以前取り上げた柴田夫妻コレクションにみられる肥前磁器銘でも、意味不明の６文字として紹介した（宮木 2021、総目録番号 0331・収蔵番号 03949）。「倣顧愷之筆意」の崩れとみてよいだろう。この文言の横には本歌の落款の代わりに二重角枠「福」字が描かれる（写真２）。このことからも、落款風の装飾として二重角枠「福」字が使用された可能性は高い[6]。そして、肥前磁器で銘が一般化してからも、角枠を伴うスタイルが引き継がれたものと考えられる。

中国では 1644 年におきた明清の王朝交替による内乱が長く続ことになるが、その頃、肥前に中国磁器の生産技術が導入され、色絵磁器を含む、より中国磁器に近い製品が作られるようになる。こうした製品の中で使用された銘も多種にわたる。基本的には年号銘や「福」を中心とする吉祥語銘が多いが、本稿でＣ類に分類した合字・異体字・不明字の銘も出現、増加していく。ただし、本稿で取り上げた銘の肥前磁器への使用例は少なく、Ｃ２とした「冨貴佳器」の崩れ銘と考えられるものがみられる程度である（宮木 2021、総目録番号 0519・収蔵番号 05321)。福字銘の一種としたＢ９も 17 世紀前半の中国磁器に使用されているが、同時代の肥前磁器にはない。肥前磁器においてＢ９に倣った銘は 18 世紀後半から出現する（宮木 2024、分類 B18、総目録番号 3273・収蔵番号 01941 他)。「冨貴佳器」銘の崩れと考えられる銘も肥前磁器では 18 世紀以降の資料が多い。17 世紀の段階では手本としなかった磁器や選択されなかった銘が、18 世紀になってから模倣されるようになった可能性がある。D 類のマーク銘も肥前磁器に取り入れられるのは 17 世紀末頃からで、18 世紀以降に種類が増えている。中国磁器をみても明代から葉や兎のマークはあるものの、種類が増えるのは清代以降である。こうした中国磁器における銘の変化も感じとってマーク銘を採用していくのだろう。ただ、肥前磁器のマーク銘に当初みられるのは、丁子を２つ組み合わせたものや丁子に葉を組み合わせたもので、これは中国磁器にはない。しかも、中国磁器にあるものでも肥前磁器では葉のマーク銘を採用している。葉のマーク銘は明代からみられるマーク銘であり、清代以降にみられるマーク銘を直接採用する例は少ない。18 世紀後半以降の肥前磁器の中で多いマーク銘は虫のようにみえるもので、必定如意を表した宝文が崩れたマーク銘と考えられる（宮木 2024、分類 D10・11、総目録番号 4206・収蔵番号 06585 他)。清代の中国磁器にはある銘（扇浦・大橋 2020）なので、吉祥語銘等と同じく中国磁器にあるものを全て写すのではなく、選択的に採用している。

このように選択的に採用されている銘がある一方、年号銘に関しては中国磁器にある銘のほとんどが肥前磁器にもみられる。前述のとおり、肥前磁器が生産を開始した初期の頃からＡ４（大明成化年製）から転化した銘があり、19 世紀に至るまで主要な肥前磁器銘の１つとなる。Ａ４に続いて多いＡ９（大清乾隆年製）も肥前磁器にみられる。ただし、６文字篆書体銘もあるものの、「乾」１文字だけの銘の方が多い。「大明成化年製」の転化銘もそうだが、こうした表記は中国磁器にはないもので、肥前磁器の特徴的な銘である。19 世紀の肥前磁器銘は「大明成化年製」の楷書体６文字銘、「成化年製」楷書体４文字銘、「乾」篆書体１文字銘が多く、同時代の「嘉慶」(1796 ～ 1820）や「道光」(1820 ～ 1850）の年号銘はほぼみない[7]。

本稿でＥ類（所属を表す）とＦ類（制作者を表す）に分類した銘は、直接写したようなものは肥前磁器にみない。中国磁器にある堂斎銘を写したものは肥前磁器にもあるものの、当然デザインであって機能的に記されたものではない。制作者銘は中国磁器も肥前磁器にも少ない。

肥前磁器では幕末から「蔵春亭」を走りとしてブランド銘を記すようになるが、これは中国磁器というよりも国内他産地磁器かヨーロッパ磁器の影響が強いのではないだろうか。

４．まとめ

冨永コレクションをはじめ、柴田夫妻コレクションと髙取家コレクションも対象として中国磁器銘の集成、分類を行った。対象範囲の資料数として 145 件の作品があり、86 種類の銘が確認できた。

今回対象とした資料の範囲では、時代を通じて年号銘の資料が数的に多かった。これは、17 ～ 18 世紀の肥前磁器では吉祥語銘（主に福字銘か冨貴長春銘）が常に多いこととは対照的である。その年号銘では、17 世紀は楷書体が中心で 18 世紀以降、篆書体が主体となる様がよく分かる。ただし、篆書体銘が中心になったとしても、17 世紀の年号銘に倣う場合は楷書体を用いている。吉祥語銘における変化は、清代以降幸福を願う文言より器を寿ぐ文言が多くなる点にある。肥前磁器でも 18 世紀代に中国磁器銘に倣った器を賛辞する文言が出現してくるのは、こうした変化が影響しているものと考えられる。だが、肥前磁器において吉祥語銘の中心はあくまでも福字銘であり、それに次ぐ冨貴長春も明朝磁器に使用される銘である。合字・不明字とした銘は基本的に角枠を伴う印章形の銘が崩れたものと考えられ、対象とした数の差も当然あるものの、肥前磁器にあるような豊富なバリエーションはみられない。こうした肥前磁器における合字・不明字銘は、中国磁器だけではなく、画譜等に書かれた文字が採用された可能性も考慮する必要がある。マーク銘は 17 世紀からみられるものの、使用の中心は 18 世紀であり、このことは肥前磁器とも共通する。しかし、肥前磁器にみられるマーク銘が中国磁器でも多いという状況はないので、他の銘と同様、中国磁器の影響を受けつつも国内需要に向けて選択的に採用している。

日本の磁器需要は中国志向が強く、基本的には中国磁器の文様装飾や形態を意識して製品作りをしている。しかし、ストレートに写すのではなく、抽出や省略、アレンジを加えていることが、銘をみていても感じられる。今回、中国磁器銘の集成・分類を行ったが、その資料数は柴田夫妻コレクションの資料数と比べると格段に少ない。一般的にみられる銘の紹介はできたと思うが、より多くの資料で集成・分類を行う必要がある。また、銘と器種や表文様等との対応関係を分析し、そのうえで肥前磁器との比較を行う等、中国磁器銘と肥前磁器銘の関係を考えるうえでの課題は多い。本稿及び、柴田夫妻コレクションの銘を紹介した資料が、今後の陶磁器研究に資するものとなれば幸いである。

注

1　各コレクションの目録は次のとおりである。いずれも産地・年代については大橋康二氏による比定である。

・冨永コレクション：佐賀県立九州陶磁文化館 2016『日本磁器の源流』

・柴田夫妻コレクション：佐賀県立九州陶磁文化館 2020『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』

・髙取家コレクション：佐賀県立九州陶磁文化館 2019『開館 40 周年記念・寄贈記念 特別企画展 髙取家コレクション』

2　冨永コレクションには銘のある肥前磁器が１例含まれる。本稿の分類ではＡ９（大清乾隆年製）の篆書体銘であり、19 世紀の資料である。

3　芳野貴典氏の助言による。

4　年号銘には「製」「造」が混在しているものの、銘の意味としては大きな違いはないだろう。製造者を示す銘文の事例としては、年代は違うが中国 宋王朝の磁州窯で作られた枕に、「張家造」や「王家造」等の銘文がみられる（童 1984、朱 2018）。肥前磁器でも製造者銘は少ないが、19 世紀にみられる製造者銘は「造」を使うことが多く、「製」「造」が混在する「肥碟山信甫」でも概して「造」の方が古いという（鈴田 2022）。特定の製造者を示す場合、一般的には「造」を使用するものと考えたい。

5　「倣筆意」の文言のある事例は次のとおりである。佐賀県立九州陶磁文化館 2025『初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―』p39 図録番号 024 染付蓮文皿、p43 図録番号 030 染付柳人物文皿、p49 図録番号 041 および 042 染付騎牛笛童子文皿。

6　柴田夫妻コレクションの肥前磁器銘には「芭蕉」と描かれたものもみられる（宮木 2021、総目録番号 0282・収蔵番号 03569）。楠木谷窯跡の出土品にもみられるが、1640 ～ 1650 年代頃の特殊な銘である。描かれる意味は不明とした。しかし、画譜にみられる文言を高台内に記す事例があるならば、この「芭蕉」銘もその一種と考えたい。『八種画譜』同様、肥前磁器の絵手本となったものに『図絵宗彝』があり、その巻一「人物山水」に「芭蕉」の文字がみられるのである。他にも柴田夫妻コレクションで肥前磁器銘 C36 に分類した銘は「言」の篆書体ではないかと言われていた。「言」を銘とする意図が不明で以前は「嘉」や「喜」からの転化を想定した。しかし『八種画譜』をみると、『五言唐詩』にある顧況の渓上には「許立言印」の篆書体落款があり、この「言」と形態的にほぼ同じである。C36 は二重角枠を伴うため、福字銘の例を考えると、このような落款から「言」を抽出して銘とした可能性が考えられる。

7　「嘉慶」の年号銘を採用した肥前磁器は九州陶磁文化館所蔵品に２例あり、髙取家コレクション図録番号 0292・収蔵番号 06920、白雨コレクション収蔵番号 06153 である。「道光」の年号銘はみない。

引用・参考文献

相賀徹夫 1983『世界陶磁全集 第 15 巻 清』株式会社小学館

有田町史編集委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町

出光美術館 1994『バウアー・コレクション 中国陶磁名品展』

巖由季子 2021「＜色絵 山水人物文 輪花皿＞と『五言唐詩画譜』」『福井夫妻コレクション 古九谷』pp. 80 ～ 81 大阪市立東洋陶磁美術館

扇浦正義・大橋康二 2020「清朝磁器の文様と銘の変遷」『第 9 回近世陶磁研究会 江戸時代における年代の判る罹災資料』p. 91 ～ 116 近世陶磁研究会

大橋康二 1988「17 世紀後半における肥前磁器の銘款について」『東洋陶磁』第 17 号 pp. 25 ～ 37 東洋陶磁学会

大橋康二 2016「中国染付磁器の始まりから発展と、有田磁器の関わり」『日本磁器の源流』pp. 2 ～ 31 佐賀県立九州陶磁文化館

尾崎洵盛 1981『陶説注解』雄山閣

後藤茂樹 1976『世界陶磁全集 第 14 巻 明』株式会社小学館
耿寶昌 1984『明清瓷器鑒定 清代部分』學苑文化事業出版
斎藤菊太郎 1972『陶磁体系 第四四巻 古染付 祥瑞』平凡社
佐賀県立九州陶磁文化館 2016『日本磁器の源流』
佐賀県立九州陶磁文化館 2019『開館 40 周年記念・寄贈記念 特別企画展 髙取家コレクション』
佐賀県立九州陶磁文化館 2020『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』
佐賀県立九州陶磁文化館 2025『初期伊万里ビッグバン―日本磁器始まりの全貌―』
佐久間重男 1989「明代景徳鎮の官窯」『百年庵陶磁論集』第２号 pp. 1 ～ 19 深川製磁株式会社芸術室
鹽田力藏 1941『支那陶磁 ： 説瓷新註』第一書房
朱裕平 2018『中国瓷器銘文』上海科学技木出版社
鈴田由紀夫 2022 「19 世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究－薄手磁器を中心として－」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第７号 pp. 38 ～ 67 佐賀県立九州陶磁文化館
中沢富士雄・長谷川祥子 1995『中国の陶磁 第８巻 元・明の青花』株式会社平凡社
中沢富士雄 1996『中国の陶磁 第 11 巻 清の官窯』株式会社平凡社
西田宏子・出川哲郎 1997『中国の陶磁 第 10 巻 明末清初の民窯』株式会社平凡社
冨永樹之 1998「出土品に見る景徳鎮青花の底裏銘」『青山考古』第 15 号 pp. 35 ～ 65 青山考古学会
冨永樹之 2016「輸入中国青花の高級食器としての需要の過程―戦国～近世の出土品と伝世品の観点から―」『日本磁器の源流』pp. 32 ～ 44 佐賀県立九州陶磁文化館
童依華 1984『中國歴代陶瓷款識彙集』大業公司
宮木貴史 2020 「柴澤コレクションにみる肥前磁器の銘款について」『開館 40 周年記念・寄贈記念 特別企画展 柴澤コレクション』pp. 117 ～ 130 佐賀県立九州陶磁文化館
宮木貴史 2021 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 1」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第６号 pp. 30 ～ 51 佐賀県立九州陶磁文化館
宮木貴史 2022 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成２」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第７号 pp. 68 ～ 85 佐賀県立九州陶磁文化館
宮木貴史 2023 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成３」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第８号 pp. 61 ～ 83 佐賀県立九州陶磁文化館
宮木貴史 2024 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成４」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第９号 pp. 33 ～ 57 佐賀県立九州陶磁文化館
村上伸之 1999 「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』第 19 号 p. 65 ～ 84 日本貿易陶磁研究会
矢島律子 1996『中国の陶磁 第９巻 明の五彩』株式会社平凡社
王光尭 2004『中国古代官窯制度』紫禁城出版社

写真１　染付蓮文皿 1610 ～ 1630 年代 佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 山口陽二氏寄贈（収蔵番号 15446）

写真２　色絵牡丹紗綾形文輪花皿 1650 年代頃
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 柴田夫妻コレクション（収蔵番号 03949）

＜冨永コレクション＞

※キャプションは 図版番号 分類 目録番号 収蔵番号 銘 産地 / 年代 の順に表記した。

001 A1 046 12812
大明年造
景德鎮窯 /16 世紀

002 A2 117 12910
正德年製
景德鎮窯 / 正德 (1506 ～ 1521) 頃

003 C1 135 12916
不明字 1
景德鎮窯 /16 世紀後半

004 A1 137 12958
大明年造
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

005 B1 140 12919
長命冨貴（十字）
景德鎮窯 /16 世紀後半

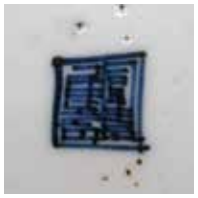
006 A3 141 12920
大明宣德年造
景德鎮窯 /16 世紀後半

007 B2 142 12964
永保長春（十字）
景德鎮窯 /
16C 末～ 17C 第 1 四半期

008 B3 143 12946
萬福攸同
景德鎮窯 /16 世紀後半

009 B4 144 12947
玉堂佳器
景德鎮窯 /16 世紀後半

010 B5 144 12947
福
景德鎮窯 /16 世紀後半


011 C2 144 12947
冨貴佳器
景德鎮窯 /16 世紀後半

012 B3 145 12921
萬福攸同
景德鎮窯 /1590 ～ 1610 年代

013 C1 146 12922
不明字 1
景德鎮窯 /1590 ～ 1610 年代

014 A4 147 12937
大明成化年製
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 第 1 四半期

015 C2 148 12945
冨貴佳器
景德鎮窯 /16 世紀後半

016 C3 150 12949
冨ヵ
景德鎮窯 /16 世紀後半

017 C4 151 12950
不明字２（福ヵ）
景德鎮窯 /16 世紀後半

018 C4 152 12951
不明字２（福ヵ）
景德鎮窯 /16 世紀後半

019 C2 153 12952
冨貴佳器
景德鎮窯 /16 世紀後半

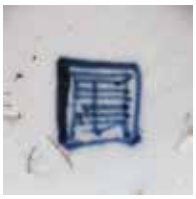
020 A5 154 12953
大明洪武年造
景德鎮窯 /16 世紀後半

021 A6 154 12953
洪武年造
景德鎮窯 /16 世紀後半

022 B7 155 12957
寿
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

023 C4 157 12963
不明字２（福ヵ）
景德鎮窯 /16C 末～ 17C 初

024 B2 158 12973
永保長春
景德鎮窯 /16 世紀後半


025 C5 161 12974
不明字３（佳器ヵ）
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

026 C5 166 12989
不明字３（佳器ヵ）
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

027 B5 173 12999
福
景德鎮窯ヵ /16C 後半～ 17C 初

028 C1 194 12926
不明字 1
景德鎮窯 /1590 ～ 1630 年代

029 A1 196 12943
大明年造
景德鎮窯 /1590 ～ 1610 年代

030 A4 202 12927
大明成化年製
景德鎮窯 /1590 ～ 1630 年代

031 A4 204 12929
大明成化年製
景德鎮窯 /1590 ～ 1630 年代

032 C6 230 12936
不明字４
景德鎮窯 /1590 ～ 1640 年代

033 A7 231 12959
大明萬暦年製
景德鎮窯 /
16C 第 4 四半期～ 17C 前半

034 C2 232 12938
冨貴佳器
景德鎮窯 /16C 末～ 17C 初

035 B8 233 12940
天禄冨貴佳器
景德鎮窯 /16C 末～ 17C 初

036 C7 243 12965
不明字５
景德鎮窯 /
16C 末～ 17 世紀第 1 四半期

037　B9　245　13048
福（米）
景德鎮窯 /17 世紀前半

038　B10　248　13054
寅生佳製
景德鎮窯 /17 世紀前半

039　A4　249　13047
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

040　D3　257　13208
マーク（卍）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

041　B6　258　13024
福（×）
景德鎮窯 /1600 ～ 1630 年代

042　A4　260　13027
大明成化年製
景德鎮窯 /1610 ～ 1630 年代

043　A4　261　13028
大明成化年製
景德鎮窯 /1610 ～ 1630 年代

044　A4　263　13063
大明成化年製
景德鎮窯 /1610 ～ 1640 年代

045　A4　278　13059
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

046　A4　279　13026
大明成化年製
景德鎮窯 /1600 ～ 1630 年代

047　B6　280　13071
福（×）
景德鎮窯 /17 世紀前半

048　A1　281　12960
大明年造
景德鎮窯 /16C 第 4 四半期～ 17C 前半

049　A4　299　13089
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

050　A4　300　13107
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

051　B6　324　12980
福（×）
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

052　B11　325　12981
長春佳器
景德鎮窯 /16C 後半～ 17C 初

053　A4　331　13127
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半ヵ

054　A4　332　12978
大明成化年製
景德鎮窯 /1590 ～ 1630 年代

055　B12　336　12992
冨貴佳器
景德鎮窯 /16C 末～ 17C 前半

056　D1　339　13130
マーク（葉）
景德鎮窯 /17 世紀

057　D2　346　13134
マーク（兎）
景德鎮窯 /17 世紀前半

058　A4　384　13016
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

059　A4　392　13053
大明成化年製
景德鎮窯 /17 世紀前半

060　B9　393　13084
福（米）
景德鎮窯 /1620 ～ 1640 年代

061　D4　460　13156
マーク（鼎）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 第 1 四半期

062　C8　466　13228
不明字６
景德鎮窯ヵ /19 世紀以降

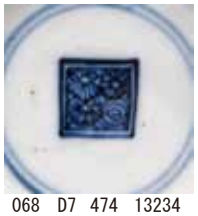
063　C9　467　13158
王偏ヵ
景德鎮窯 /17C 中葉～ 18C 前半

064　D5　468　13159
マーク（双魚）
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 初

065　D5　470　13187
マーク（双魚）
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 初

066　B13　471　13189
美玉雅製
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 初

067　C10　473　13188
不明字７
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 初


068　D7　474　13234
印章形１
景德鎮窯 /18C 第 2・3 四半期

069　D5　475　13160
マーク（双魚）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 初

070　C4　476　13162
不明字２（福ヵ）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

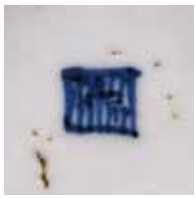
071　D2　484　13166
マーク（兎）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

072　C4　485　13164
不明字２（福ヵ）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

073 C11 486 13163
木＋青
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

074 A8 487 13167
大清雍正年製
景德鎮窯 /18 世紀

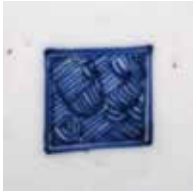
075 D6 496 13181
マーク（四方襷）
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 前半


076 C12 497 13182
変形字８
景德鎮窯 /
17C 第 4 四半期～ 18C 前半

077 D8 499 13184
印章形２
景德鎮窯 /18 世紀

078 D9 500 13165
印章形３
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

079 D9 501 13168
印章形３
景德鎮窯 /18 世紀ヵ


080 D10 502 13175
印章形４
景德鎮窯 /18C 前半～中葉

081 D11 505 13180
印章形５
景德鎮窯 /18 世紀前半頃

082 A10 507 13186
大清嘉慶年製
景德鎮窯 /18 世紀ヵ

083 D11 509 13191
印章形５
景德鎮窯 /17C 後半～ 18C 前半

084 C13 510 13192
不明字９
景德鎮窯 /
17C 第 4 四半期～ 18C 前半

085 D4 512 13194
マーク（鼎）
景德鎮窯 /17C 末～ 18C 前半

086 D12 516 13198
マーク（草花）
景德鎮窯 /18 世紀

087 D6 517 13197
マーク（四方襷）
景德鎮窯 /18 世紀

088 D8 518 13229
印章形２
景德鎮窯 /18 世紀

089 E1 519 13196
内府
景德鎮窯ヵ /18 世紀

090 B14 536 13322
正玉
福建 /18 世紀

091 B15 537 13327
盛玉
福建 /18 世紀

092 A12 543 13216
大清道光年製
景德鎮窯 /19 世紀前半

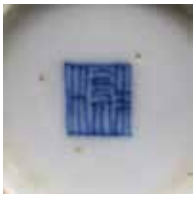
093 C14 545 13218
不明字 10
景德鎮窯系 /18 世紀後半

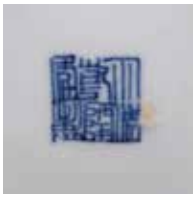
094 B16 546 13219
錦堂福記
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C

095 C15 547 13220
不明字 11
景德鎮窯 /18C 末～ 19C 中葉

096 C16 547 13220
不明字 12
景德鎮窯 /18C 末～ 19C 中葉

097 C17 549 13222
不明字 13
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 初


098 C18 549 13222
不明字 14
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 初


099 A9 550 13223
大清乾隆年製
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

100 C19 552 13225
不明字 15
景德鎮窯 /18C 末～ 19C 前半

101 B17 553 13226
生生生生
景德鎮窯 /19 世紀

102 A13 554 13227
道光年製
景德鎮窯 /19 世紀

103 A9 556 13230
大清乾隆年製
景德鎮窯 /18 世紀後半

104 A9 557 13231
大清乾隆年製
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 前半

105A D13 559 13238
文字風１（宝文ヵ）

105B D14 559 13238
文字風２

景德鎮窯 /
18C 第 4 四半期～ 19C 第 1 四半期

106 C20 560 13240
不明字 16
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 前半

107A C21 561 13235
不明字 17
景德鎮窯ヵ /19 世紀

107B C21 561 13235
不明字 17
景徳鎮窯ヵ /19 世紀

108 A12 562 13236
大清道光年製
景徳鎮窯 /1820 ～ 1850 年代

109 D15 564 13239
マーク（桃＋蝙蝠）
景徳鎮窯 /18C 末～ 19C

110 C22 565 13241
不明字 18
景徳鎮窯 /19 世紀

111A D13 567 13243
文字風１（宝文ヵ）
景徳鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

111B D14 567 13243
文字風２
景徳鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

111C D14 567 13243
文字風２
景徳鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

112 C23 568 13244
不明字 19
景徳鎮窯 /18C 末～ 19C

113 D15 568 13244
マーク（桃＋蝙蝠）
景徳鎮窯 /18C 末～ 19C

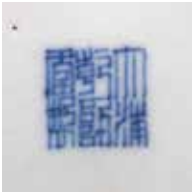
114 D16 568 13244
マーク（盤長）
景徳鎮窯 /18C 末～ 19C

115A A11 571 13247
嘉慶年製
景徳鎮窯 /19 世紀前半

115B A11 571 13247
嘉慶年製
景徳鎮窯 /19 世紀前半

116 C24 584 13329
不明字 20
福建 /18C ～ 19C

117 A10 590 13339
大清嘉慶年製
中国 /19 世紀


118 A9 591 13340
大清乾隆年製
中国ヵ /18 世紀後半以降

参考 A9
大清乾隆年製
日本 肥前窯 /19 世紀後半

＜柴田夫妻コレクション＞

119 D2 4306 05670
マーク（兎）
景徳鎮窯 /1600 ～ 1630 年代

120 A14 4307 06299
大明宣徳年製
景徳鎮窯 /18C ～ 19C 前半

121 A4 4325 05386
大明成化年製
景徳鎮窯 /1620 ～ 1640 年代

122 A15 4329 05339
大清康熙年製
景徳鎮窯 /1660 ～ 1700 年代

＜髙取家コレクション＞

123 A7 0940 15128
大明萬暦年製
景德鎮窯 /
萬暦年間（1573 ～ 1620）

124 B9 0948 15136
福（米）
景德鎮窯 /1630 ～ 1640 年代

125A B9 0949 15137
福（米）三重角枠
景德鎮窯 /1630 ～ 1640 年代

125B B9 0949 15137
福（米）二重角枠
景德鎮窯 /1630 ～ 1640 年代

126 A7 0976 07304
大明萬暦年製
景德鎮窯 / 清（1644 ～ 1912）ヵ

127 A16 0981 15155
成化年製
景德鎮窯 /18 世紀

128 A4 0982 15157
大明成化年製
景德鎮ヵ /18 世紀ヵ

129 C8 0983 15156
不明字 6
景德鎮窯 /18 世紀

130 A9 0989 07288
大清乾隆年製
景德鎮窯 /18 世紀後半

131A C26 0990 07293
不明字 22
中国 /18 世紀後半

131B C26 0990 07293
不明字 22
中国 /18 世紀後半

132 C25 0991 07292
不明字 21
中国 /18 世紀後半

133 C27 0992 07295
不明字 23
中国 /18 世紀後半

134A D17 0998 15172
文字風 3
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

134B D13 0998 15172
文字風 1（宝文ヵ）
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 初

135 D15 1000 07297
マーク（桃 + 蝙蝠）
景德鎮窯 /18C 後半～ 19C 前半

136 C28 1006 07309
不明字 24
景德鎮窯 /18 世紀後半以降

137 A9 1011 07278
大清乾隆年製
景德鎮窯 /18C 中葉～末

138 A9 1013 07267
大清乾隆年製（彫銘）
景德鎮窯 /18C 中葉～末

139 A10 1024 15175
大清嘉慶年製
景德鎮窯 /19 世紀前半

140 F1 1025 07290
林長茂造
中国 /19C 前半～中葉

141 A4 1027 07300
大明成化年製
景德鎮窯 /19 世紀ヵ

142 A17 1028 07298
康熙年製
景德鎮窯 /19 世紀

143 B18 1029 07301
玩玉
中国 /19 世紀後半

144 B19 1029 07301
玉
中国 /19 世紀後半

145 C29 1030 07299
不明字 25
中国 /19 世紀

146 B20 1032 15180
珍賞
中国 /19 世紀

147 B21 1042 07302
中華珍品
景德鎮窯 /19C 末～ 20C

148 A17 1043 07303
康熙年製
景德鎮窯 /19C 末～ 20C 前半

149 B21 1043 07303
中華珍品
景德鎮窯 /19C 末～ 20C 前半

150 A15 1046 15149
大清康熙年製
中国 / 清（1644 ～ 1912）

資料紹介

瀬川コレクションの大皿地文様

鈴田由紀夫

１．はじめに

当館では瀬川竹生氏からご寄贈いただいた染付大皿を披露する特別企画展「江戸大皿百物語―躍動する青の世界―」が令和６年（2024）９月７日から11月４日まで開催された。そこでは大皿の魅力と特徴について様々な角度から紹介されたが、筆者は主文様の背景に描かれる地文に関心を持ち、観察した資料について気付いたことを作品解説の中で記述した[1]。

地文は主文様の背景や区画内に描かれる細かな繰り返し文様であり、文様の主役ではない。しかし背景を埋めることによって地の空白を装飾し、作品の美を高める効果がある。余白を生かした17世紀末の柿右衛門様式の構図には地文はほとんど見られないが、瀬川コレクションのような江戸後期の大皿には地文がよく描かれている。

こうした地文は小さくて単純な文様であるが、面積の広い大皿の余白を埋めるにはそれなりの労力と時間を要する。瀬川コレクションの大皿を観察してみると、波文、魚子文（ななこもん）、亀甲文、四方襷文、氷裂文、青海波文、麻の葉文、唐草文など多くの種類の地文が描きこまれている。これらの地文の意味や効果を考察しながら、その書き込む数の多さに驚かされた。

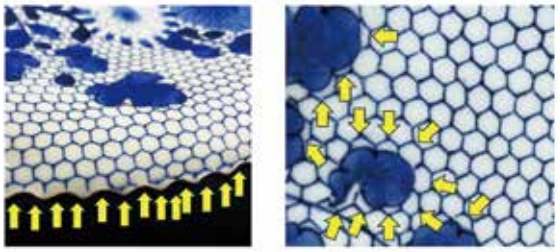
本稿では二例の大皿に描かれた地文を数え、その労力や描き方を観察した試みを報告するものである。地文を施すことにより美的な効果が高まるとともに、手間に応じたコストが加算されるであろうが、この件については考察する基礎的な資料がないため触れていない[2]。

２．事例１

地文のカウントについて最初に選んだのは072染付菊花瓶山水文輪花大皿である（図１）。口径46.8㎝の大皿であり、制作年代は1790～1830年代。口縁部がわずかに外反し、縁は棘状の輪花となっている。文様は上下に松皮菱形の窓絵を配し、間に菊花文を描く。背景は六角形の亀甲文で埋め尽くされている。細い線描きであり、線の太さや濃淡は同じ調子で破綻なく描かれ、全体的に均一な地文様となっている。

図１

個々の単位は正六角形であるが、縁や主文様に接するところは六角の形が完結していないものが多い（図２－１、２の矢印参照）。今回の検証では不完全形もカウントすることとした。



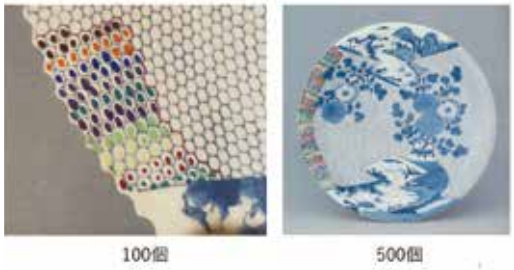
1 縁に描かれた亀甲文の一部　2 主文様周囲に描かれた亀甲文の一部

図２

図３

数え方については皿の画像をＡ３用紙にプリントし、六角形を一個ずつサインペンで塗りつぶしてカウントした。そのさい途中の誤カウントを防ぐため 10 色のサインペンを文様数 10 個ごとに入れ替え、各色を塗り終えると 100 個カウントしたことになり、これを繰り返した（図３参照）。

図４は最初の 100 個と 500 個を数えたところである。画面左下の緑色がスタートであるが、松皮菱の窓絵に接しているため六角形の一部分しか描かれていない。10 個を塗りつぶした緑の面積は他の色よりも狭い。縁に沿って塗り進めてゆくと、10 個の色帯は縁に沿って湾曲している。



100個　500個

図４

口縁部の湾曲した亀甲文列に対し、中央付近の列は直線に並んでいる（図５－１参照）。円形の大皿であるため全面を幾何学的な地文で埋めるためには同心円状の配列にするのが理にかなっていると思うが、この皿の場合は周辺部を弧列配置、中心部を直列配置にし、その間を少しずつに変化させている。こうした列の変化は視覚的に違和感のないようにまとめられている。

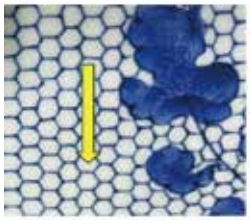


図５－１
直列する亀甲文

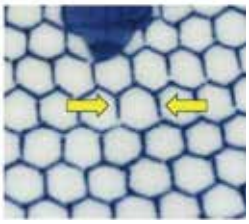


図５－２
横方向のジグザク線と縦方向の単線

図５

六角形の描き方については直列配置の部分を見ると、単体を一個ずつ描くのではなくジグザグに上端を先に描き、縦線を個々に引いて省力化を図っている（図５－２参照）[3]。

図６は 2000 個と 3000 個までカウントした段階である。2000 個の図を見るとほぼ半分を数えた状態であり、中心部が縦一列に並んでいる。

3000 個の段階になると右側の縁に近づくため、中央部の縦一列から周辺部の円弧配置に替わっている。

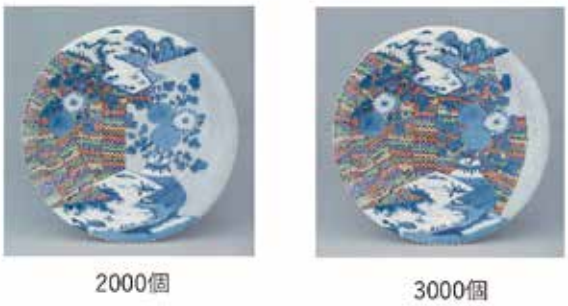


図６

図７　合計 3765 個

図７はカウントを終えた状態であり、六角形の地文は 3765 個であった。主文様を描く時間よりおそらく地文様に費やす時間が多かったと推測される。

３．事例２

二つ目のカウントに選んだのは 075 染付松竹梅唐草丸文大皿である（図８）。口径 55.5 ㎝、制作年代 1780 ～ 1820 年代。見込みに大きな円窓を設け、太湖石と松竹梅を描く。周囲には十字に小円を配置し二種の四方襷文を対にして埋めている。この大小の円窓以外の地の部分に唐草文を描き、さらにその背景を魚子文で埋めている。したがって何も描かれてない白地の部分は見込みの松竹梅文の背景と大皿口縁の一端のみである（図９参照）。

図８

魚子文は単に丸文のみではなく中に点を打っている。また唐草に隠れる部分の丸文は完形ではない。圏線に沿った最端部の一列は変形の五角形に近い形で描かれている。

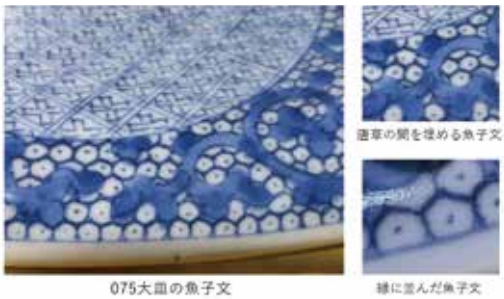


図９

図 10

076 染付唐草丸文輪花大皿は唐草文の間を魚子文で埋める表現が 075 と似ている。サイズは 50.0 ㎝、制作年代は 1800 ～ 1840 年代であり同類の製品である（図 10）。両者の魚子文の描き方を比較すると、076 の大皿は丸文の重なりや隙間の大きいところがあり（図 10- 1）、余白を徹底して埋める意識や表現への拘りは 075 の大皿の方が強い。

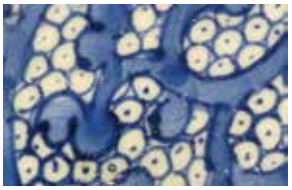


図 10-1

カウントの方法は事例 1 と同様に 10 色のサインペンにより繰り返し塗りつぶすことで魚子文を数えた（図 11）。色 2 と色 5 が黄色系統で類似していたため難儀することもあった。

図 11

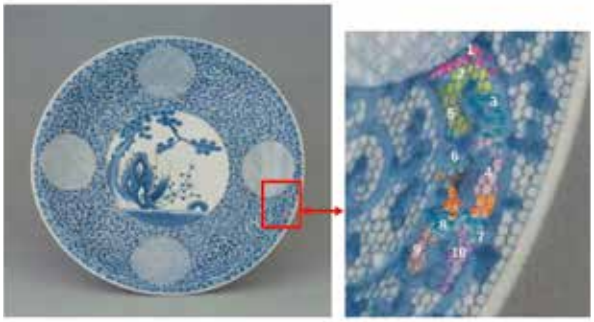


図12　100個

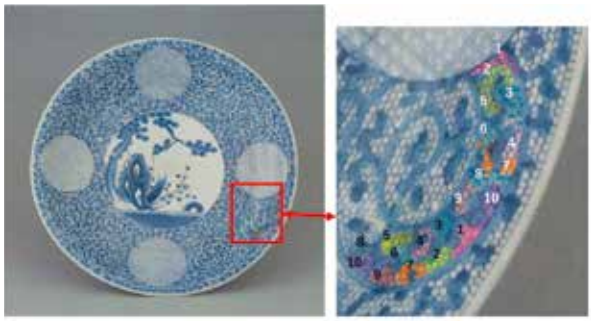


図13　200個

図 12 は 100 個を数えた段階である。数え始めの場所は特に決め手が見つからず、中央右端からスタートした。

図 13 は 200 個を数えた段階。色 1 のピンクが目立つため繰り返し時の確認の指標になった。最端部の魚子文は圏線に沿って整然と並んでいたため、大皿一周の地文数を出すため塗り残した。

図 14 は 500 個、1000 個、1500 個、2000 個の段階。瀬川コレクション展図録の作品解説では全体で約 2000 個と予想したが、その概算は大きな誤謬であった[4]。

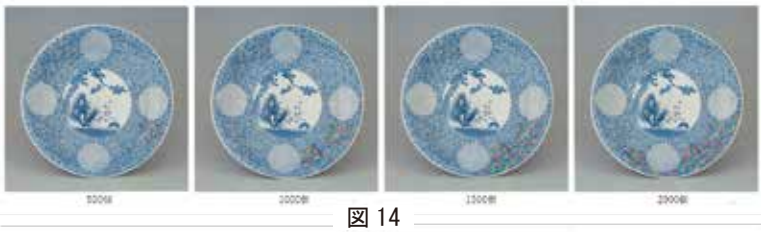


図 14

図 15 は 2500 個、3000 個、4000 個、5000 個。

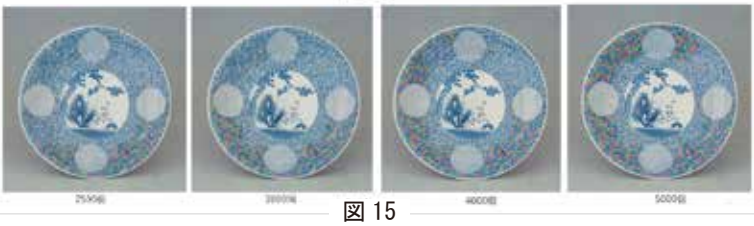


図 15

図 16 は 6000 個、7000 個、8000 個、9000 個。

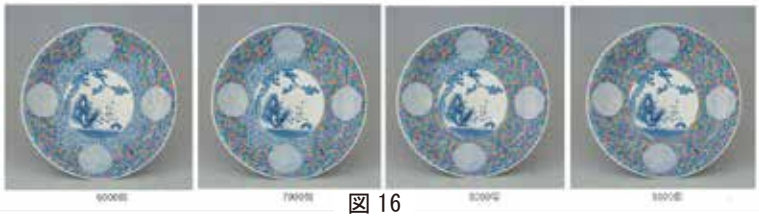
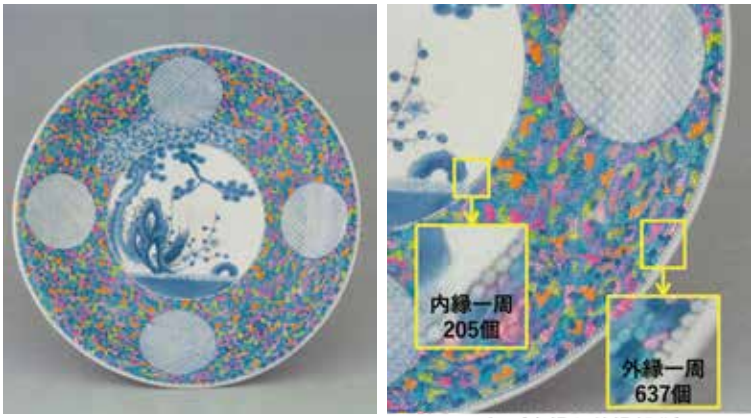


図 16

図 17 は 8000 個の時点で見込みの円窓圏線沿いと口縁圏線沿いの魚子文の並びを示した部分画像である。内部の魚子文と異なり、圏線沿いに整列している。内円一周沿いの魚子文は 205 個、外縁一周沿いは 637 個であった。

図 18 は最終的なカウントで合計は想像を遥かに超える 9343 個であった。



8000 個　　8000個（内縁と外縁部分）

図 17

なお検算のための再カウントは行わなかったが、色彩の中で特に目立つピンク（色１）とオレンジ（色７）について塊の数を数えた。結果はピンクの塊が 93 ヶ所で 930 個、オレンジの塊が 92 ヵ所で 920 個であり、10 色それぞれ数えたとすれば 9300 個から 9200 個の概数になり、9343 個のカウントに近いと考えている。

４．むすび

072 染付菊花瓶山水文輪花大皿の亀甲文と 075 染付松竹梅唐草丸文大皿の魚子文について数えてみたが、前者が 3765 個、後者が 9343 個であった。何れも大皿の広いスペースを乱れなく

一定のリズムで埋め尽くしている。連続文様を早く効率的に仕上げる工夫と、全体に破綻なく自然に収まるよう配慮された技量の高さに驚かされる。大変な根気を要する作業であるが、あくまでも主文様を際立たせるための脇役の仕事である。こうした作業は器の美的な価値を高めるためであり、地文の無い製品より価格も当然高いものであったと推測される。それにしても絵付け職人の一途な作業風景が見えるようなカウント作業であった。

図 18　9343 個

注

1　佐賀県立九州陶磁文化館　2024『江戸大皿百物語―躍動する青の世界―』p118 図 No068 ～ p128 図 No078

2　注１前掲書 p88「コラム２　有田大皿の価格」（芳野貴典）には家紋入りの尺５寸大皿１枚が１両という天保 15 年（1844）の記録が紹介されているが、この大皿には地文が描かれていない。

3　注１前掲書 p129「コラム４　有田大皿にみる地文様の描き方」（宮木貴史）

4　注１前掲書 p125 図 No075 染付松竹梅唐草丸文大皿作品解説（鈴田由紀夫）

資料紹介

「マイセン製　色絵甕割唐子文八角皿（司馬温公図皿）」について（１）

藤原友子

資料概要

所蔵：佐賀県立九州陶磁文化館

購入年:2025 年（令和６年度（2024 年度））

収蔵番号：15552

製作年代：1730 年頃

生産地：ドイツ　マイセン窯製

法量：口径 27.6 ㎝　最大径 29.9

高さ 4.5　底径 16.2

透光性：あり

重量：769 グラム

種別：（硬質）磁器　白磁に上絵付

染付なし

裏面：上絵の青によるマイセンの双剣銘

器形：八角皿（裏面中央に針支えのような痕跡あるが施釉されている）折縁で縁立ち

文様：甕割唐子　通称　司馬温公図　英語圏では Hob in the Well（井戸の小鬼）の名でも知られる

様式：柿右衛門様式

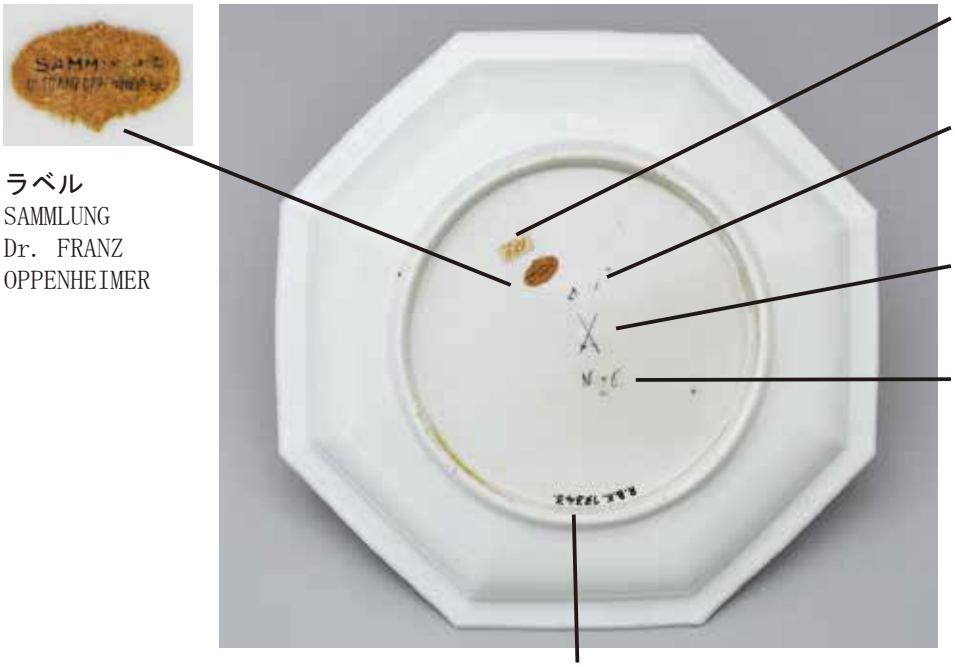
色数：黒線　赤線　赤だみ　萌黄、青、金、口縁部茶色（上絵）

資料来歴

東京の西洋陶磁を専門とする美術商ロムドシンより購入。サザビーズの売り立て目録 Sammlung Oppenheimer, Important Meissen Porcelain, 14 September, 2021, Sotheby's New York,94-95 頁掲載品。

資料来歴詳細

当資料は、裏面に彫り込まれたドレスデン王室旧蔵品であったことを示すパレスナンバー N:36W から、ザクセン選帝侯でありポーランド王であった宮廷（Kurfürst von Sachsen, und



アムステルダム国立博物館での管理番号 R.B.K.17343

König von Polen）の収蔵品であったことが明らかな資料である。1770 年のザクセン宮廷の収蔵品目録に以下のように登載されており、当時収蔵されていた３枚のうちの１枚と推定されている。

> N:36 Drey Stück detto 8. eckichite mit überschlagenen braunen Rande inwendig Pagoden gemahlt,1 3/4 Zoll tief, 11 3/4 Z. in Diam. [1]
>
> 36 番　８角形の３枚上に同じ　縁立ちの茶色の縁　中には東洋人が描かれている
> １と 3/4 インチの深さ（高さ）11 と 3/4 インチの口径（筆者訳）

大きさは Zoll をcmに換算すると口径 29.8 cm　高さ 4.45 cmとなり、実際の法量に一致する。ドレスデンの磁器コレクションは、通称、アウグスト強王（1670-1733）（August der Starke ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト１世 Friedrich August Ⅰ、ポーランド王アウグスト２世 August Ⅱ）のコレクションに由来し、ここには当時２万９千点にもおよぶ東洋磁器のコレクションとともに、1710 年に開窯したザクセン王立の磁器工房であるマイセン製品がコレクションされていた。大部分が既に散逸したとはいえ、約 8200 点もの東洋磁器について、18 世紀の収蔵品目録の解読と翻刻の作業とともに、現存する磁器コレクションの対照作業によってその収蔵品は記録と対照できるようになり、その情報はオンラインカタログとして公開されている[2]。2026 年２月現在、東洋陶磁コレクションについては、すべて公開されているが、将来的にはマ

イセン磁器についても同様にオンラインカタログとして公開される予定である。当資料も、ドレスデン国立美術館磁器コレクション（ツヴィンガー宮殿）に対し、情報提供している。

この資料はドレスデンの宮殿を離れたのち、ケルンのオークションハウス J.M. ヘーベルレ J.M. Herberle における 1906 年 10 月 22 日－25 日の売り立て（売立番号 923）により、ベルリンのゲルハルト・ヴァン・アーケン Gerhard van Aaken によって購入され、ベルリンを拠点とする実業家であったフランツ・オッペンハイマー Franz Oppenheimer（1871-1950）と妻マルガレーテ Margarethe の所蔵品となった。オッペンハイマーコレクションには、およそ 500 点ものマイセン磁器がコレクションされていたとされる。オッペンハイマー夫妻は、当時、マイセンコレクターとして第一人者であり、1927 年にはラベルが貼付され、80 番と番号付けされた[3]。

オッペンハイマー家は、ユダヤ人であったことから、ナチス・ドイツ政権時代に迫害を逃れ、ベルリンからウィーン、さらにスウェーデンとコロンビア経由でニューヨークへと居を移さざるを得なかった。その間、オッペンハイマーのマイセン磁器コレクションは、ユダヤ人銀行家であったオランダのフリッツ・マンハイマー Fritz Mannheimer（1890-1939）に託された。1939 年のマンハイマーの急死後、1941 年にこのコレクションは、ナチス政府によって接収され、オーストリアのリンツ Linz に設立予定であった総統博物館 Führermuseum に移送された[4]。戦況の悪化とともにアルト・アウスゼー塩鉱 Salzbergwerk Altaussee に保管された。終戦後、ナチス政府による略奪品奪還を使命とするいわゆる「モニュメント・メン」によって回収され、オランダへ送られた。その後長きにわたり、オッペンハイマーコレクションは、ロッテルダムのボイマンス・ファン・ベーニンゲン美術館、ハーグ市美術館、アムステルダム国立美術館の管理下に置かれた。2019 年 10 月、オランダの略奪品返還委員会は、オッペンハイマーの相続人に返還することを決定し、コレクションは 2021 年９月にニューヨークのサザビーズで競売にかけられた。当資料は、このうち、アムステルダム国立美術館に保管され、競売にかけられたものの一つである。

次号では、この資料にかかる製作背景、および文様について紹介したい。

注

1　① Abraham L. den Blaauwen, *Meissen Porcelain in the Rijksmuseum*, Rijksmuseum, Amsterdam, 2000, Waanders Publishers, pp.238-239 および② *Sammlung Oppenheimer, Important Meissen Porcelain*, 14 September, 2021, Sotheby's New York, pp.94-95

2　https://royalporcelaincollection.skd.museum/home にて公開中

3　前掲注１②　Sotheby's New York, p.94 ここでは、消えかけているが、裏のオッペンハイマーコレクション時の番号を 80 と読んでいる。

4　https://en.wikipedia.org/wiki/Franz_Oppenheimer_(art_collector), 2026 年２月 20 日閲覧

執筆者（掲載順）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館　名誉顧問）

井上康彦（植物研究家）

徳永貞紹（佐賀県立九州陶磁文化館　シニア・アドバイザリー・フェロー）

巖由季子（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）

芳野貴典（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）

宮木貴史（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸員）

鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館　館長）

藤原友子（佐賀県立九州陶磁文化館　学芸課長）

佐賀県立九州陶磁文化館
研究紀要　第 11 号

令和８年（2026 年）３月１９日

編集発行　佐賀県立九州陶磁文化館
〒 844-8585　佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1

印　　刷　株式会社　三光
〒 848-0022　佐賀県伊万里市大坪町乙 4161-1

BULLETIN

OF

KYUSHU CERAMIC MUSEUM

No.11

CONTENTS

A Study on the Use of Rice Husk as Bedding in Kiln Loading for Hizen Ceramics
・・・・・・・・・・・INOUE Yasuhiko, OHASHI Koji

Modernization Endeavors of the Saga Domain and Ceramics (1) - Materials for a Reverberatory Furnace and a Ceramic-Producing Region
・・・・・・・・・TOKUNAGA Sadatsugu

Bird-Shaped Incense Box Produced in Hizen in the First Half of the 17th Century
・・・・・・・・・・・IWAO Yukiko

A Reconsideration of the Chronological Record of Yamamoto Jin'emon Shigezumi
・・・・・・・・・・・YOSHINO Takanori

Compilation of Chinese Porcelain Marks – Tominaga Collection, Takatori Collection, and Mr. and Mrs. Shibata Collection –
・・・・・・・・・・・MIYAKI Takafumi

Object Introduction
Ground Designs on Large Dishes in the Segawa Collection
・・・・・・・・・・・SUZUTA Yukio

Object Introduction
Octagonal Meissen Dish with Design of Sima Guang Story Depicting Breaking Jar Chinese boys alias "Hob in the Well"(1)
・・・・・・・・・・・FUJIWARA Tomoko

2026

Kyushu Ceramic Museum
Toshaku Otsu 3100-1, Arita, Saga, 844-8585, Japan